

1 共同研究

【概要】

「共同研究」は、歴博が大学共同利用機関として、国内外の研究者の参加を得て実施する研究プロジェクトであり、研究課題は日本の歴史と文化に関する今日的動向を踏まえて設定されてきた。その特徴は、1981年に歴博が設置されて以来、歴史学、考古学、民俗学及び関連諸科学の連携による学際的で実証的な研究に基本を置いてきた点にある。歴博が取り組む共同研究には、基幹研究（Principal Research Project：本館の取り組む中心的な研究）、基盤研究（Fundamental Research Project：考古・歴史・民俗の資料に基づく実証的で学際的な研究）がある。また、若手研究者育成という面から、開発型共同研究（Developmental Research Project：対象は本館の任期付き助教）および共同利用型共同研究（Collaborative Access Type Joint Research：若手を主体とする外部研究者を対象とした館蔵資料および分析機器・設備を利用した研究）を行っている。この他、人間文化研究機構が実施する基幹研究プロジェクトおよび機構共創先導プロジェクト事業を進めている。

歴博は大学共同利用機関としての共同利用性を高め、大学等の研究・教育に供するため、2017年度から開発型共同研究を除くすべての共同研究（基幹研究、基盤研究、共同利用型共同研究）の全面公募を行っている。

【人間文化研究機構基幹研究プロジェクト】 プロジェクトには「機関拠点型」、「広領域連携型」及び「ネットワーク型」がある。機関拠点型としては「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」、広領域連携型としては「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」、「同位体による年代・古気候・交流史研究」、「延喜式のデジタル技術による汎用化」、ネットワーク型としては「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」を実施しており、いずれも6年計画の開始年度である。

【人間文化研究機構機構共創先導プロジェクト】 研究成果の共有化や地域・社会との共創を推進するために2022年度から開始された。海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進するための在外資料研究の一拠点として、「外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」を開始した。

【基幹研究】 基幹研究は、本館の取り組む中心的な研究テーマのもとに、学際的研究を実施する共同研究である。基幹研究ではまた、2019年度からはじまった全体課題「水と人間の日本列島史」（基幹研究Ⅱ）では、ランチ「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成」が2021年度に終了し、ランチ「水をめぐる生活世界—実用と信仰の視点から」が3年目に入った。また、2022年度には新たに「環境や交流からみた日本歴史の動的研究」という研究テーマのもとで3本の基幹研究のランチが開始された。「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化—その成立・展開過程—」、「東アジアからみた関東古墳時代開始の歴史像」、「先史から近代における日朝交流史像の再構築—航海・港市・交流に生きた人びとの視点から—」である。2021年3月に終了した研究課題は、「近代日本における産業・労働の展開とジェンダー」、「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成」の2件である。

【基盤研究】 基盤研究は、基盤研究1（課題設定型）、基盤研究2（館蔵資料型）、基盤研究3（歴博研究映像）からなる。基盤研究1は、考古・歴史・民俗資料の研究資源化、高度情報化を主要な目的として実施する学際的な研究であり、新しい研究視点、研究手法などの研究基盤の新構築を目指す共同研究である。基盤研究2は、本館の収蔵資料を対象として研究計画を提案する共同研究である。そして、基盤研究3は、「歴博研究映像」の制作・研究活用に関する共同研究である。2022年度は、基盤研究1として「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」、「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」の2件、基盤研究3として「歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築—沖縄地域の映像を中心に」の1件を、それぞれ3年計画で開始した。2021年3月に終了した研究課題は、「近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会」、「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」、「番方旗本家に関する総合的研究—大番士・儒者杉原家文書を中心に—」、「歴博研究映像の制作・保存・活用—芋麻文化の映像記録化を中心に」の4本である。

共同研究担当 樋浦 郷子・小瀬戸恵美・中村 耕作

2022年度 国立歴史民俗博物館共同研究計画一覧

研究種別	研究課題	年度) 西暦)					
		'19	'20	'21	'22	'23	'24
機構基幹研究プロジェクト	(1) 機関拠点型基幹研究プロジェクト 日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究(歴博研究部 准教授 後藤真)						
	(2) 広領域連携型基幹研究プロジェクト 横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して(主導機関：国立歴史民俗博物館, 国立民族学博物館) フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発(歴博・民俗研究系 准教授 川村清志)						
	人新世に至る, モノを通じた自然と人間の相互作用に関する研究(主導機関：総合地球環境学研究所) 同位体による年代・古気候・交流史研究(歴博・情報資料研究系 教授 坂本稔)						
	異分野融合による総合書物学の拡張的研究(主導機関：国文学研究資料館) 延喜式のデジタル技術による汎用化(歴博・歴史研究系 教授 小倉慈司)						
	(3) ネットワーク型基幹研究プロジェクト 歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業(歴博研究部 教授 三上喜孝・歴博研究部 准教授 天野真志)						
機構共創先導プロジェクト	(4) 日本関連在外資料調査研究 外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的脈絡による研究と現地およびオンライン空間における活用(歴博・情報資料研究系 教授 日高薫)						
基幹研究	(1) 水をめぐる生活世界—実用と信仰の視点から—(歴博・民俗研究系 教授 関沢まゆみ 他6名)						
	(2) 交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化, アイヌ文化—その成立・展開過程—(北海道博物館 学芸主幹 鈴木琢也 他14名)(館内 教授 林部均)						
	(3) 東アジアからみた関東古墳時代開始の歴史像(明治大学文学部 教授 佐々木憲一 他17名)(館内 教授 松木武彦)						
	(4) 先史から近代における日朝交流史像の再構築—航海・港市・交流に生きた人びとの視点から—(歴博・民俗研究系 准教授 松田睦彦 他10名)						
基盤研究	(5) 日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築(歴博・民俗研究系 准教授 青木隆浩 他14名)						
	(6) 家内における死者祭祀・祭具の現在とその歴史的検討：変容するモノ・家族・社会(ものづくり大学教養教育センター 教授 土居浩 他10名)(館内 教授 山田慎也)						
	(7) 定期市からみた地域の生活文化の歴史と多様性に関する研究(千葉県立中央博物館企画調整課 課長 鳥立理子 他9名)(館内 教授 内田順子)						
	(8) 秦漢時代の文字使用をめぐる学際的研究(東京学芸大学先端教育人材育成推進機構 准教授 下田誠 他10名)(館内 准教授 上野祥史)						
	(9) 映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究—制作とアーカイブスの実践的方法論の検討(京都産業大学文化学部 教授 村上忠喜 他13名)(館内 准教授 川村清志)						
	(10) 近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究(明治学院大学専任講師 田中祐介 他11名)(館内 教授 三上喜孝)						
	(11) 中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究(歴博・歴史研究系 准教授 田中大喜 他10名)						
(12) 『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究(学習院大学文学部 教授 家永遵嗣 他14名)(館内 准教授 田中大喜)							
基盤研究	(13) 高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究—額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に—(早稲田大学 准教授 下村周太郎 他17名)(館内 教授 仁藤敦史)						
	(14) 歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築—沖縄地域の映像を中心に(多摩美術大学 非常勤講師 春日聡 他7名)(館内 教授 内田順子)						

共同利用型共同研究 (当該年度実施)	館蔵資料利用型	『越前島津家文書』の分析と関連史料の収集を通じた室町幕府奉公衆の編成過程と活動実態の研究(中央大学大学院文学研究科 博士後期課程 矢嶋翔/歴博・歴史研究系 准教授 田中大喜)						
		博物館収蔵庫および周辺空間の温熱環境と空調制御に関する調査(京都大学大学院工学研究科建築学専攻 准教授 伊庭千恵美/歴博・情報資料研究系 准教授 島津美子)						
		藤貞幹の古瓦譜の制作過程に関する実験考古学的研究(京都府京都文化博物館学芸員 村野正景/歴博・考古研究系 准教授 村木二郎)						
		裸潜水漁撈用具の地域差と伝播 一長崎県と神奈川県を事例に(横須賀市自然・人文博物館 学芸員 瀬川渉/歴博・民俗研究系 准教授 松田陸彦)						
		高松宮家伝来禁裏本『日本紀略』の書誌学的研究(三輪仁美/歴博・歴史研究系 教授 小倉慈司)						
	設分析機器・備利用型	鉛同位体比分析による中世～近世のガラスの生産と流通に関する研究(東京電機大学工学部・応用化学科 研究員 村申まどか/歴博・情報資料研究系 教授 齋藤努)						

【機構基幹研究プロジェクト】

(1) 機関拠点型基幹研究プロジェクト 日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究 2022～2027年度 (研究代表者 後藤 真)

1. 目的

「日本歴史文化知」とは、地域における歴史資料(地域歴史資料)をはじめとする様々な歴史資料の多様なデータ構築とその高度なデータの研究を、歴史資料分析に即して進める「人文情報学的研究」と、そこから得られたデータを用いつつ、地域の人々と協働して資料の継承を考え、また地域歴史資料の研究を推進する「地域歴史協働研究」の相互連携のもとづく、研究プロセスと研究成果の総体を指す。

本プロジェクトの前身事業である「総合資料学の創成」事業(2016～21年度)の成果を継承しながら、歴史文化研究の課題意識にもとづいた人文情報学的な解析と、データネットワーク構築、そしてそれらを活用した地域との協働研究を推進する。

なお、本研究課題は、人間文化研究機構の中期目標・中期計画のうち、特にI-1-(1)「日本の歴史・文化の分野における基幹研究の推進：日本の歴史文化に関する「資源」「研究」「展示」の3つの機能を有機的に連携させる「博物館型研究統合」の理念のもと、歴史文化研究に基づくオープンな日本の歴史資料基盤構築に関する研究を実施し、歴史、考古、民俗、自然科学などに基づく資料データの横断的な統合をより促進させ、研究資源を一体的に公開・共有し、広くオープンサイエンスに寄与する。」を踏まえつつ実施するものである。

2. 今年度の研究計画

令和4年度においては、研究の開始にあたり、全体の課題を共有し、チームビルディングを実施する。とりわけ、本研究においては、その研究体制やプロセスのあり方すらモデル化し、広くそれを新たな地域歴史研究のモデルとすることを目指している。そのため、まずは適正なチームの作成を目指すものである。

具体的には、「人文情報学研究会」「地域歴史協働研究会」ごとに、これまでの歴博が進めてきた成果と課題に基づき、部会を設定する。それぞれの部会ごとに研究成果を上げることができるよう、チームビルディングを行う。また、このチームは、世代・ジェンダー・研究分野、さらに職業専門家以外の人までが適正に入ることができるようなチーム構成を行えるようにするとともに、それらのメンバーが適正に活動できるような部会の構築を行う。

また、上述の研究組織整備に加え、研究活動・研究基盤構築・研究成果普及活動として、次の事項を計画する。

1. オープンサイエンス基盤構築については、「総合資料学の創成」事業において構築を開始した情報基盤システムkhirinのサブシステムとして、khirin rおよびkhirin labsの構築を行い、khirinの4つの柱を完成させるとともに、データ件数をさらに増加させ、データ蓄積モデルを検討する。
2. DH(人文情報学)の国際会議であるADHO2022(東京・オンライン)へ協力をを行い、DH全体の振興に貢献する。

3. 人文情報学研究会のもとにDH関連の部会を構築し、その部会の活動を推進する。
4. 国際会議への参加を行い、研究成果を国際的に展開する。また、令和5年度に向けた国際会議への投稿を実施する。
5. 特に歴史資料と人文系のRDM（研究データマネジメント）の検討を進めるべく研究会を開催する。
6. 地域のさまざまなステークホルダーとの実践による資料調査と、成果の共有を行う。
7. 歴史資料の長期保全に関する研究会を開催する。
8. 令和6年度に予定される歴博企画展示への準備を行うとともに、連携先であるルーヴェン大学の日本関連企画展示へと協力する。
9. 千葉大学・長崎大学との協定に基づいた教育展開を行う。

3. 今年度の研究経過

①研究会

プロジェクトキックオフ研究会（8月）に始まり、人文情報学研究会（12月）および地域歴史協働研究会（11月）を実施した。ほか7月には、多様な目的意識または所属組織のもと地域歴史資料にかかわる方々を招へいして公開討論会「学術野営2022 in 吹屋」（オンライン／岡山県）を実施、これの討論テーマの事前検討会やフォローアップイベントとして「火起こしの会（全4回）」「テント干しの会」「スピンオフセミナー」（5・6・9・11月）をも併催した。

また国際連携として、12月にはバンドン工科大学との共催で人文情報学研究会のオンラインシンポジウム“Methodology and Workflow for Creating Digital Archives of Art and Cultural Resources”を、3月には科研費特別推進研究（科研費番号19H05457、地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成）との共催で地域歴史協働研究会の研究会「歴史資料継承の方法論と国際協力」（オンライン／都内会場）をも実施した。

これら研究会・国際研究集会等は計12回である。ほか、今年度のプロジェクト全体の活動成果報告集会を2023年4月に計画している。

②国内外での研究発表

昨年度に引き続き、参加を予定したもののコロナ対策により延期・中止された学会等は多数に上ったが、特筆すべきものとして、CIDOC 2021（オンライン／エストニア、2022年5月に延期）、ADHO2022（DH2022 Tokyoとしてオンライン開催に変更、7月）、第23回国際歴史学会議（ポーランド、8月）、ならびにThe 32nd EAJRS Conference（ポルトガル、9月）において報告・セッションを実施した。

③成果論文、成果論文を含む書籍など

今年度は成果書籍については発行がなかったが、共同研究員全体としては、複数の研究成果を出すに至った。特筆すべきものとして、「デジタル歴史資料が導き出しうる「パブリック・ヒストリー」とは」（後藤真、『歴史学研究』1021, pp.45-49）、「鹿児島県と論島における市民参加型「島の自然とくらしのゆんぬ古写真調査」の展開」（高橋そよ、池田香菜、菊凛太郎、後藤真、橋本雄太、南勇輔、『島嶼研究』24-1, pp.13-30）、「民具の「緩やかな保存」考―物のライフサイクルの視点から―」（川邊咲子、『農村計画学会誌』, 41-1, pp.6-9）が挙げられる。

④学術交流協定

新たにケンブリッジ大学アジア中東学部（英国）と協定を締結し、古文書読解のためのオンラインサービス「みんなで翻刻」を使用した和本サマースクールなどを通じて、オープンサイエンス時代の教育研究連携の試行を開始した。

ほか、ルーヴェン大学（ベルギー）との従前の協定に基づき、同大学附属図書館において開催した国際連携展示「Japan's Book Donation to the University of Louvain」（2022年10月28日～2023年1月15日）の展示実務を担当した。なお、今年度までに協定を締結した他の大学等とも、共同研究や大学院教育だけでなく、地域資料の保全や活用のための事業においても連携した（詳細は⑤以降）。

⑤共同研究の公募

日本歴史文化知奨励研究の公募を行い、計2件を採択し、公募型共同研究を実施した。その成果は2023年4月に計画するプロジェクト全体の活動成果報告集会において公表予定である。

主な成果としては、岩手県奥州市出身の政治家に関する近現代資料の整理・研究・公開が挙げられ、今後の地域協働の手法に反映しうる成果を得ることができた。とりわけ歴史資料の保全に関し、センシティブな近現代資料を正面から扱う研究が進んだことは重要な成果である。

⑥広報

専用Webサイトを運営し、研究会活動や国内外の研究発表についてはWeb上での活動報告を行った。

加えてEAJRS2022 (The European Association of Japanese Resource Specialists, 9月)への単独ブース出展、AAS2023 (Association of Asian Studies, 3月)への日本国内の出版社数社との合同ブース出展により、プロジェクトの概要展示やkhirinのデモンストレーションを行い、国内外の研究者へのアピールに努めた。

⑦その他 (教育・若手育成・共同利用等)

9月には長崎大学大学院の院生5名を対象として、千葉大学卓越大学院プログラム (千葉大学, 熊本大学, 岡山大学, 総合研究大学院大学, 長崎大学の各大学院)との合同で、国立歴史民俗博物館未来世代育成プログラム (若手研究者教育プログラム)を実施した。また2月には、千葉大学の学部生14名を対象として、集中講義「博物館で歴史を読み解く」を実施した。

情報基盤システムkhirinを、館外からのフィードバックをふまえて改修するとともに、大学所蔵資料に限らない地方資料の可視化・共同利用化に向けた協議を進め、複数の自治体 (奥州市, 与論町等)や企業との協定・覚書にもとづき、地域と協働した資料保全・継承・研究の取り組みを試行した。加えて国際研究集会 (3月, 詳細は①)等を通じて資料継承のための議論を深め、大学を含む複数の国内外の研究機関等とも連携する態勢を強化した。

○研究の進捗状況

総じて、コロナ対策により延期・中止した事業があるにもかかわらず順調に進展している。調査研究活動は、地域資料の保全・活用に関する研究実践を軸に、順調に進展しており、研究成果の公開・可視化についても同様に、国際研究集会・シンポジウム等の実施、大学院教育への展開等、順調に進展しているといえる。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信は、従来のウェブサイト運営に加え、複数の海外の大学とのシンポジウム・教育プログラムが新たな発信の形としても順調に機能している。また、若手研究者の人材育成の取り組みも、未来世代育成プログラムの実施を含め、順調に進展しており、今後の成果へとつなぐことが期待される。

4. 今年度の研究成果

1) 研究成果の概要

人文情報学研究会を中心に複数の論文成果を出すことができた。地域歴史協働研究会においても、実際に地域と連携した幅広い研究・調査を実施するとともに、博物館資料の大学教育・社会教育への幅広い活用なども検討することができ、それぞれの側面から新たな展開を見せた。さらに、国際研究集会やワークショップの実施など、国際的な連携も更に進展し、プロジェクトを地域・国際の両面から進めることができていく。

2) 論文名

【主な論文】

- 2022年4月 「自治体における歴史資料の保全と管理・継承の「いま」—特集 地域史を見つめ直す」, 後藤真, 『都市問題』113-4, pp.46-53
- 2022年4月 「デジタル歴史資料が導き出しうる「パブリック・ヒストリー」とは」, 後藤真, 『歴史学研究』1021, pp.45-49
- 2022年6月 「民具の「緩やかな保存」考—物のライフサイクルの視点から—」, 川邊咲子, 『農村計画学会誌』41-1, pp.6-9
- 2022年12月 「暮らしの中から考える与論島のサンゴ礁の恵みと漁撈文化 —ゆんぬピシバナ研究チーム—」, 高橋そよ, 渡久地健, 呉屋義勝, 堀信行, 麓才良, 竹盛窪, 池田佳, 『自然保護助成基金助成成果報告書』31, pp.1-10
- 2022年12月 「人文学社会科学分野における学際的共同研究類型化の試み」, 朝岡誠, 大波純一, 林正治, 関野樹, 後藤真, 山地一禎, 『じんもんこん2022論文集』pp.131-136
- 2022年12月 「『日本人名辞典』からの歴史人物情報の抽出: Few-shot学習による古文の固有表現抽出の試み」, 苑広媛, 李康穎, 後藤真, 木村文則, 前田亮 『じんもんこん2022論文集』, pp.187-192

- 2023年2月 「アーティストと市民との協働による民具の「緩やかな保存」の取り組みと展望」, 川邊咲子, 『日本民俗学』313, pp.92-99
- 2023年3月 「鹿児島県与論島における市民参加型「島の自然とくらしのゆんぬ古写真調査」の展開」, 高橋そよ, 池田香菜, 菊凜太郎, 後藤真, 橋本雄太, 南勇輔, 『島嶼研究』24-1, pp.13-30

3) 主な研究会・シンポジウム等

- ・学術野営2022 in 吹屋 (2022年7月1日～3日 於：オンライン／岡山県・吹屋)
 - 7月1日(金)
 - プレイベント「地域からの情報共有」地域における新たな文化的価値観の台頭～“似て非なるもの”との対峙と対話～
 - 7月2日(土)
 - ワークショップ「みんなで学術関連職業創出！」
 - ディスカッション
 - 議論① 大月希望氏(東京大学大学院学際情報学府文化・人間情報学コース博士課程, 集める人としての担い手)の議論を中心に
 - 議論② 藤野裕子氏(早稲田大学文学学術院, 研究者の担い手)の議論を中心に
 - 議論③ 林美帆氏(みずしま財団, 地域の人としての担い手)の議論を中心に
 - 議論④ 川邊咲子氏(歴博, 多様な活用の担い手との協働)の議論を中心に
 - 全体討論
 - 7月3日(日)
 - 巡見
- ・キックオフ研究会(2022年8月5日 於：オンライン／歴博)
 - 後藤真「本共同研究の整理と狙い」
 - 橋本雄太「クラウドプラットフォームの可能性—「みんなで古写真」を事例に—」
 - 川邊咲子「日常における資料消失への対応を考える—「学術野営」の内容報告を中心に—」
 - 全体討論(本研究計画の位置付けや可能性, 課題点など)(司会:天野真志)
- ・地域歴史協働研究会 第1回(2022年11月21日 於：オンライン／歴博)
 - (合同会社AMANEとの共同開催)
 - 後藤真「国立歴史民俗博物館の奥州市地域資料研究プロジェクト」
 - 高橋和孝(奥州市教育委員会)「奥州市の地域資料の特徴と現状」
 - 堀井美里(合同会社AMANE)「各プロジェクトの調査概要～現状と課題～」
 - 1) 人首文庫・佐伯家資料(プロジェクトa)
 - 野坂晃平(えさし郷土文化館)「江刺米里地域と佐伯家資料の特徴」
 - 福島幸宏(慶應義塾大学)「佐伯家資料の意義と情報公開」
 - 質疑応答・議論
 - 2) 近現代政治史資料(プロジェクトb)
 - 伏見岳人(東北大学)「調査概要・資料価値および逐次公開に対する試案」
 - 3) 逐次公開(プロジェクトc・d)
 - 高田良宏(金沢大学)「研究情報の逐次公開」
 - 堀井洋(合同会社AMANE)「三者連携事業における情報公開手法の提案」
 - 質疑応答・議論
 - 4) 安倍家レスキュー(プロジェクトd)
 - 天野真志「安倍家資料レスキューの特徴」
 - 質疑応答・議論
 - 5) 総合討論～奥州市をモデルとした地域資料継承支援事業の展開について～
- ・人文情報学研究会 第1回(2022年12月2日 於：オンライン)
 - (科研費特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」(代表:奥村弘)「B班 地域歴史資料インフラ構築領域」との共催)
 - 後藤真 概要説明, 「研究データマネジメントの現状と歴史資料にまつわる課題」
 - 亀田亮宙 「古文書情報のデータ化とマネジメント—兵庫県のいくつかの事例をもとに」

関野樹（国際日本文化研究センター）「国際日本文化研究センターにおけるデータマネジメント」
総合討論

- ・ シンポジウム” From Field To Table: Methodology and Workflow for Creating Digital Archives of Art and Cultural Resources ” (2022年12月9日 於：オンライン)
(バンドン工科大学との共催)
Moderator: Sakiko Kawabe (National Museum of Japanese History)
Digital Museum Benda, ITB
Collecting digital data of art and art history by CIVAS (Center for Indonesian Visual Art Studies), ITB
Discussion
- ・ 研究会「歴史資料継承の方法論と国際協力」(2023年3月6日 於：オンライン／フクラシア品川クリスタル (東京都品川区))
(科研費特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」(代表：奥村弘)「B班 地域歴史資料インフラ構築領域」との共催)
サレム・カーラ・レネ (レバノン・SBGアートギャラリー)「マダム・アンドレーの思い出」
謝仕淵 (台湾・成功大学)「台湾での大震災と文化財保全・国際連携」
天野真志 (歴博)「地域歴史資料の災害対策をめぐる国内的状況」
ディスカッション (司会：後藤真)

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

阿児 雄之	東京国立博物館学芸企画部博物館情報課情報管理室・	情報管理室長
大向 一輝	東京大学大学院人文社会系研究科・	准教授
加納 靖之	東京大学地震研究所附属地震予知研究センター・	准教授
小風 尚樹	千葉大学人文社会科学系教育研究機構・	助教
関野 樹	国際日本文化研究センター総合情報発信室・	教授
高田 良宏	金沢大学学術メディア創成センター・	准教授
中川奈津子	国立国語研究所・	准教授
中村 覚	東京大学史料編纂所・	助教
原 正一郎	京都大学東南アジア地域研究研究所・	連携教授
山田 太造	東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター・	准教授
吉賀 夏子	大阪大学大学院人文学研究科人文学林・	准教授
菊 凛太郎	与論民俗村・	学芸員
佐藤 琴	山形大学学士課程基盤教育機構・	准教授
高橋 和孝	奥州市教育委員会事務局歴史遺産課企画管理係・	主任学芸員
高橋 そよ	琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科・	准教授
徳竹 剛	福島大学人文社会学部行政政策学類・	准教授
松岡 弘之	岡山大学学術研究院社会文化科学学域・	准教授
三村 昌司	防衛大学校人文社会科学群人間文化学科・	准教授
山内 利秋	九州保健福祉大学薬学部動物生命薬科学科・	准教授
北岡タマ子	人間文化研究機構人間文化創発センター・	特任准教授
○山田 慎也	本館副館長・教授	橋本 雄太 本館研究部・准教授
◎後藤 真	本館研究部・准教授	亀田 克宙 本館研究部・特任助教
三上 喜孝	本館研究部・教授	川邊 咲子 本館研究部・特任助教
小倉 慈司	本館研究部・教授	川村 清志 本館研究部・准教授
工藤 航平	本館研究部・准教授	久留島 浩 本館研究部・特任教授
天野 真志	本館研究部・准教授	高科 真紀 本館研究部・特任助教

(2) 広領域連携型基幹研究プロジェクト
 横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して
 (主導機関：国立歴史民俗博物館，国立民族学博物館)
 フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発
 2022～2027年度
 (研究代表者 川村 清志)

1. 目的

本プロジェクトは、人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」の歴博ユニットとして組織された。本研究会では、地域の知恵や歴史が凝縮された伝統文化を取り入れ、持続可能で多様性にみちた社会のあり方を、保存科学、人類学、民俗学、歴史学、生態学、言語学などの横断的な領域から検証し、社会／文化の創発に積極的に参与することを目指している。

ここで本研究が対象とする地域文化とは、聞き取りや参与観察によって見聞きできる民俗文化だけではなく、文書・画像資料やデジタル資料を含めて同時代において潜在的に文化資源たりうる全ての領域を想定する。それらの文化資源を再発見したり、地域を活性化していこうとする実践と、そこに関わる研究者や学芸員などの営みを対象化しつつ、一連の文化の構築に協働で参画したいと考える。この作業の基盤として、個人や地域社会が有する文化資源のアーカイブ化を目指し、基礎資料の公開と活用への道筋を具体的に描くことを目的としている。

次に現代の文化表象の特質として、地域文化を「文化財」や「文化遺産」へと格付ける言説と社会制度を捉え直す。とりわけ、「世界遺産」や「無形文化遺産」などの世界システムと連動する文化をめぐるポリティクスが、個々の地域社会をどのように再編成していくかに着目する。研究会では、これらの言説空間を文化ナショナリズムや「伝統の創出論」に還元するのではなく、運動の総体を現代における文化の生成過程として客体化しつつ、そこで生まれる地域との往還や個々の主体的な営み、そこに関与する知識人の役割について検証していく。博物館や大学という文化の再編に関わらざるを得ない立場からの創造的な展開を目指していきたい。

第3に現代の地域文化のもう一つの特質として、アートによる地域文化の再表象に注目し、実践的なアーティストとの協働作業を構想したい。アートという「外部の価値観」を持ち込む営みが、地域の文化資源を再発見し、地域の人たちとコラボレーションしていく可能性を検証する。アートをめぐる実践は、文化資源をめぐる言説とは一線を画するようでありながら、地域社会の現場では、しばしば同じ対象をターゲットとして展開したり、観光・開発といった「活用」の場においても相似的な表象を示すことがある。とりわけ、博物館・美術館に所属する立場からも、両者の差異と相同性について改めて論じる必要があるだろう。

2. 今年度の研究計画

2022（令和4）年度

- ① 研究会，3回程度（発表者：毎回，2～3人），8月，10月，12月頃の開催予定
- ② 気仙沼市の共同調査（7月から12月），石川県能登地域の共同調査（6月から2月），沖縄県のアーカイブズ調査
- ③ HP/ML等を開設し，調査研究成果の発信，更新を行い，ユニット相互の連携調整を行う。
- ④ シンポジウム：(1)7月24日「アートと民俗文化研究の節合」年度末，(2)ユニット代表による全体シンポジウムを開催（いずれも歴博において，対面での出席）
- ⑤ 国際シンポジウム「地域文化と博物館」民博にて参加
- ⑥ 日本民俗学会誌『日本民俗学』での小特集

3. 今年度の研究経過

初年度は、オンラインと併用での共同研究会を3回開催し、そのうち一度は民博ユニットとの共同で行った。現地の研究調査としては気仙沼市での民俗資料についての調査、石川県能登地域での現地調査、沖縄県沖縄市を中心としたアーカイブズ調査を行った。とりわけ、気仙沼市とは7月に文化事業についての協定関係を結んだ。

7月24日には、日本民俗学会との共催のもとに「アートと民俗文化研究の節合」を開催した。この成果は後に日本民俗学会の学会誌に掲載されることになる。10月からはユニットのHPを開設し、調査研究成果の発信、更新を行い、ユニット相互の連携調整を進めている。2022年12月16日、17日にかけて、国立民族学博物館にて台湾の桃園市立大溪木芸生態博物館と共同主催の形式で、国際シンポジウム「地域文化と博物館」を開催した。このシンポジウムには川村と高科が参加した。さらに年度末となる3月には機構の研究会の各ユニットから2名ずつが登壇して、

全体シンポジウムを開催した。

4. 今年度の研究成果

書籍・論文

高科 真紀 2022年4月「アーキビストの研究活動と社会实践」『アーキビストとしてはたらく—記録が人と社会をつなぐ』

川村 清志 2023年3月「都合される声とモノ, 共創される「津波文化」—リアス・アーク美術館の震災展示から」『国立歴史民俗博物館研究報告』240

川村 清志 2023年2月「アートと民俗文化研究の節合の試み—奥能登国際芸術祭を事例として—」『日本民俗学』313

口頭発表

川村 清志 2022年7月「地域文化の<保存>と<活用>, そして再創造」, 第920回日本民俗学会談話会年会プレシンポジウム

川邊 咲子 2022年7月「アーティストと市民との協働による民具の“緩やかな保存”の取り組みと展望」 第920回日本民俗学会談話会年会プレシンポジウム

川村 清志 2022年10月「民俗文化からアートへ—現代における保存と活用のアルケミー—」日本民俗学会第74回年会シンポジウム

川村 清志 2022年10月「モノ資料の多様な資源化を目指して—石川県珠洲市における「大蔵ざらえ」から芸術祭への試み」, 共同研究「フィールドサイエンスの統合と地域文化」第2回研究会

高科 真紀 2022年10月「市民活動団体と連携したアーカイブズ調査の実践: 写真家・比嘉康雄資料を事例に」, 共同研究「フィールドサイエンスの統合と地域文化」第2回研究会

川村 清志 2022年11月「七浦のことを再発見, 二人の「きよし」の世界」, 石川県輪島市七浦地区「文化のつどい」

川村 清志 2022年12月「全体構想「課題と目標—フィールドサイエンスの再統合」」, 共同研究「フィールドサイエンスの統合と地域文化」第3回研究会

高科 真紀 2022年12月「『北海道旅行記』(1938年)と関東北医師大会関連の記録」, 共同研究「フィールドサイエンスの統合と地域文化」第3回研究会

川村 清志 2023年3月「地域文化における創発とは何か—フィールドサイエンスの再統合を目指すもの」, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト・キックオフシンポジウム「横断的・融合的な地域文化研究の領域展開」

高科 真紀 2023年3月「写真がつなぐ地域の記憶: 戦後沖縄写真アーカイブズの公開と活用に向けて」, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト・キックオフシンポジウム「横断的・融合的な地域文化研究の領域展開」

書評・その他

川村 清志 2022年9月「書評「原慶太郎・菊池慶子・平吹喜彦編『自然と歴史を活かした震災復興—持続可能性とレジリエンスを高める景観再生—』」『林業経済』887

高科 真紀 2022年10月「島の宝・島の人々 阿波根昌鴻資料展に寄せて(上) 記憶の拠り所となる写真」, 琉球新報

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

館内

- 天野 真志 国立歴史民俗博物館研究部・准教授
- 内田 順子 国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系・教授
- 上野 祥史 国立歴史民俗博物館研究部考古研究系・准教授
- 川邊 咲子 国立歴史民俗博物館研究部・特任助教
- ◎川村 清志 国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系・准教授
- 高科 真紀 国立歴史民俗博物館研究部・外来研究員
- 山田 慎也 国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系・教授

館外

- 磯本 宏紀 徳島県立博物館・人文課
- 内山 大介 福島県立博物館 学芸課

胡 光 愛媛大学法文学部・教授
 大本 敬久 愛媛県立歴史文化博物館・学芸課
 兼城 糸絵 鹿児島大学法文学部・准教授
 萱岡 雅光 リアス・アーク美術館・学芸員
 佐々木重洋 名古屋大学文学部・教授
 島立 理子 千葉中央博物館・企画調整課長
 田井 静明 瀬戸内海歴史民俗資料館・館長
 蓮沼 素子 大仙市総務部総務課アーカイブズ 副主幹
 日高 真吾 国立民族学博物館・教授
 皆川 嘉博 秋田公立美術大学・教授
 山下 裕作 熊本大学文学部・教授
 山内 宏泰 リアス・アーク美術館・館長

(3) 人新世に至る，モノを通じた自然と人間の相互作用に関する研究 (主導機関：総合地球環境学研究所) 同位体による年代・古気候・交流史研究 2022～2027年度 (研究代表者 坂本 稔)

1. 目的

自然の中を生きる人類は、環境中の多岐にわたる資源を利用して生活してきた。資源の中には、食料資源となり身体に刻まれるものと、人間により道具などに加工され利用される資源がある。古代においては、身近な環境から得られた資源を利用し、食物資源や生活に必要な物品を得ていた。その後、交易を通して資源の移動が行われ、より広域から得られる資源を利用するようになった。産業革命を経て、化石燃料という時間軸をまたぐ資源を利用するようになり、現代ではグローバルな空間軸をまたぐ資源を利用している。

本研究では、身体や物質に含まれる元素の濃度および同位体比を分析することで、自然と人間の関わりについて時間軸と空間軸を横断する研究を行い、物質文化から見た現代の地球環境問題につながる人間の資源利用形態の変容について明らかにする。自然における元素の同位体分布は、地質および生態系の動態を理解することが必要である。資源の利用や移動を解析する手法としては、食料資源や水資源を象徴する身体に含まれる軽元素（炭素・窒素・硫黄・水素・酸素など）と、地質由来資源を象徴する身体や器物中に含まれる重元素（ストロンチウム・鉛・ネオジミウム・鉄・マグネシウム・亜鉛など）があるが、これらに含まれる同位体情報を用いて、自然と人間の相互作用を研究することができる。本研究においては、完新世以降の人間のあゆみを元にし、人新世（人類世）と称される現代における資源利用について考え、地球環境問題の根源となる自然と人間の相互作用を扱う新たな人間文化研究のプラットフォームを構築する。

本研究は、総合地球環境学研究所を主導機関とし、国立歴史民俗博物館を機構内参画機関とする。また、東京大学総合研究博物館をはじめとする機構外の機関・部局とも連携して研究にあたる。本研究においては、「テーマ研究」として国立民族学博物館との共同研究も合わせた「古代アンデス研究」を取り上げる。さらに、現在の共同メンバーだけでは想定できない幅広い研究を行うために、公募研究を行う。公募においては機構内を優先するが、機構内にとどまらず、大学共同利用機関法人の役割を果たすために機構外からも受け付ける。

2. 今年度の研究計画

歴博ユニット「同位体による年代・古気候・交流史研究」においては、時間軸に沿った高解像度同位体分析を実施し、緻密な時空間分布を人類史研究に応用する。酸素同位体比年輪年代法を充実させ、較正曲線の整備に充てる。大気中の¹⁴C濃度の地域差と微細変動を解明し、炭素14年代測定の高精度化を実現する。食性および海産資源の見積に必要な安定同位体比分析と各地の陸・海産物の炭素14年代測定を進め、人骨を含む動物資源の年代測定に資する。鉛原料の利用は各時代の文化的・社会的背景の影響が大きいので、鉛同位体比から、モノの動きや活用状況から人間文化のあり方を解明する。

データベースれきは「遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測定データベース」は元報告書の検索を目的としているが、報告書に掲載があれば炭素の安定同位体比、及び奈良文化財研究所の全国遺跡報告総覧に基づく位置情報が入力される。継続的なデータの投入を進め、アイソスケープへの展開やローカルリザーバー効果の評価に活用で

きないか、検討を進める。

3. 今年度の研究経過

並行する諸研究と連動しながら、日本産樹木年輪の年輪計測と酸素同位体比分析、単年輪の炭素14年代測定を継続した。具体的には、三重県桑名市出土ケヤキ、宮城県仙台市中在家南遺跡出土ケヤキ、長野県飯田市出土ヒノキ、三重県津市専修寺ヒノキ根継材、岐阜県瑞浪市大湫神明神社スギ倒木である。

ゲノム解析から様々な出自のヒトが含まれていることが明らかとなった。鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土人骨のストロンチウム同位体分析を目的とした試料採取を行なった。

「遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測定データベース」については、科研費と連動しながら英語化に向けた整備を開始した。また、炭素・窒素分析の結果を反映させるため、レコードの再整備に着手した。

2022年9月10日の文化財科学会第39回大会、ならびに2022年12月22日に総合地球環境学研究所で開催されたキックオフシンポジウムにて、本研究の内容と進捗を紹介した。

4. 今年度の研究成果

単年輪の炭素14年代測定の結果、弥生前末中初および後期、中世、ならびに現代における大気中¹⁴C濃度の挙動を得ることができた。なかでも大湫神明神社スギ倒木の測定により、歴博ではこれまで積極的に測定を行なっていなかった、20世紀前後の詳細な挙動を明らかにすることができた。スギ倒木は昨年度までの調査で樹齢およそ660年であることが判明していて、近世を中心とした高精度の時間軸構築と、降雨量変動に着目した当地の古気候復元が期待される。

5. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者）

歴博ユニット「同位体による年代・古気候・交流史研究」

◎坂本 稔 本館研究部・教授

齋藤 努 本館研究部・教授

○箱崎 真隆 本館研究部・准教授

篠崎 鉄哉 本館研究部・プロジェクト研究員

中塚 武 名古屋大学大学院環境学研究所・教授

工藤雄一郎 学習院女子大学国際文化交流学部・准教授

（4）異分野融合による総合書物学の拡張的研究

（主導機関：国文学研究資料館）

延喜式のデジタル技術による汎用化

2022～2027年度

（研究代表者 小倉 慈司）

1. 目的

多様な情報を有し、「古代の百科全書」とも言える『延喜式』について、国際標準に準拠した写本画像・校訂本文・現代語訳・英訳が連動するデータベース「デジタル延喜式」を作成・発信し、日本古代史のみならず東アジア史や科学技術史等、様々な分野からの『延喜式』利活用を目指す。

本共同研究は、第三期「異分野融合による「総合書物学」の構築」の継続プロジェクトである「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」の歴博ユニットである。同プロジェクトは第四期では特に人文情報学に重点を置いて進めることとなった。そこで本ユニットでは『延喜式』の校訂本文作成・現代語訳・英訳に重点を絞り、TEIによるネット公開を第一の目標に掲げることとする。

構成メンバーは今期は若手中心とし、史料を写本にまで遡って検討したり、新たな史料を発掘する能力を持つ研究者の育成も心がけることにする。あわせて法政大学国際日本学研究所と連携して延喜式関係論文目録の充実も図っていく。『延喜式』をもとにした異分野研究については、東京医療保健大学・東海大学と交流協定を結びつつ、外部資金を獲得して進めていきたい。

なお、校訂本文は全巻のネット公開、現代語訳は4分の1程度、英訳については10巻程度の公開を目標とする。

2. 今年度の研究計画

本文検討・英訳・TEIの分科会を開催し、校訂・本作成、英訳作業を進める。今年度は機構の都合によりプロジェクト発足が遅れたことを考慮し、校訂本文を最低限3巻程度、英訳を1巻程度作成することとする。またネット公開システム「デジタル延喜式」の改修、延喜式関係論文目録データベースのデータ増補を進める。さらに史料学のオンライン講演会を実施し、講演会記録集を刊行する。

3. 今年度の研究経過

- 5月5日 英訳ワークショップ オンライン 参加者12名
- 5月10日 TEI検討会 於歴博 参加者5名
- 5月15日 金漆研究会 於東京大学史料編纂所+オンライン 参加者13名
- 5月17日 TEI検討会 於歴博 参加者5名
- 6月19日 本文検討会 於歴博
- 7月8日 英訳ワークショップ オンライン 参加者13名
- 7月14日 金漆検討会 於荻窪 参加者5名
- 8月18～19日 神宮文庫史料調査 1名
- 8月30日 TEI検討会 オンライン
- 9月21日 基幹研究プロジェクト打ち合わせ オンライン 3名
- 9月23日 史料学講演会 オンライン 講師熊谷公男氏「私の古代史研究と史料学」 参加者55名
- 10月22日 伊勢調査 せんぐう館・神宮徴古館等 参加者13名
- 1月25日 基幹研究プロジェクト打ち合わせ オンライン 参加者4名
- 2月20日 本文検討会 於歴博 参加者5名
- 2月28日 TEI検討会 オンライン 参加者7名
- 3月19日 金漆研究会 於明治大学+オンライン 参加者12名

4. 今年度の研究成果

今年度は本文校訂について巻9・10・21を完成させて『国立歴史民俗博物館研究報告』に投稿し、それとは別に巻39内膳および巻41弾正台について「デジタル延喜式」での公開を開始した(2023年3月31日)。あわせて「デジタル延喜式」のシステム改修や既存データの修正等をおこなった。英訳については巻37および39内膳を完成させ、『国立歴史民俗博物館研究報告』に投稿した。

延喜式関係論文目録については、CiNii Articles が4月18日にCiNii Research に統合されたことにより、データベースの仕様を変更し、既存データの修正をおこなう必要が生じ、新規データの増補は進めているものの、公開には至らなかった。

史料学講演会を9月23日に開催し、3月15日に講演会記録集を刊行した。金漆研究については、幸い科研費挑戦的研究(萌芽)「忘れられた東アジアの古代塗料「金漆」の復元研究」が採択されたため、協力して進めることとした。以下に研究協力者も含めた論文等の主要研究成果を掲げる。

小倉 慈司編, 古代史料学講演会記録集3, 「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」・「延喜式のデジタル技術による汎用化」, 20230315, 59p.

稲田 奈津子|王 海燕|榊 佳子, 黄泉の国との契約書—東アジアの買地券, 勉誠出版, 20230300, ISBN978-4-585-32030-2, 240p.

遠藤 慶太, 人物叢書 仁明天皇, 吉川弘文館, 20221031, ISBN9784642053105, 250p.査読有り

小倉 慈司|西宮 秀紀|吉田 一彦編, 差別の地域史—渡辺村からみた日本社会(シリーズ宗教と差別3), 法蔵館, 20230215, ISBN978-4-8318-5723-1, 276p., 「皮革づくりは穢れているか—差別の始まりを考える」, pp.163-186

神戸 航介, 日本古代財務行政の研究, 吉川弘文館, 20220920, ISBN978-4-642-04669-5, 396p.

三舟 隆之|馬場 基編, 古代寺院の食事を再現する, 吉川弘文館, 20230327, 208p.

加藤 幸治|松本 美虹|小川 宏和編, 民具のデザイン図鑑, 誠文堂新光社, 20221016, ISBN978-4-416-62200-1, 192p.

小倉 慈司|高田 貫太編, REKIHAKU007特集歴史の「匂い」, 国立歴史民俗博物館, 20221026, ISBN978-4-909658-91-3, 111p., 査読有り

西川 明彦, 正倉院のしごと, 中央公論新社, 20230322, ISBN978-4-12-102744-3, 248p.

仁藤 敦史, 東アジアからみた「大化改新」, 吉川弘文館, 20220901, ISBN978-4-642-059558, 224p.

小倉 慈司, 撰関貴族社会における漢籍収蔵の様相, 八木書店, 『日本漢籍受容史』, 20221125, ISBN978-4-

-8406-2260-8, pp.159-181

小倉 慈司, 典籍近世写本の調査から, 文学通信, 『古文書の科学—料紙を複眼的に分析する』, 20230331, ISBN978-4-86766-004-1, pp.178-182

仁藤 敦史, 再論・藤原京の京城と条坊, 八木書店, 『律令制国家の理念と実像』, 20220506, ISSN978-4-8406-2257-8, pp.159-182

石川 智士, 海洋ゴミ問題解決に向けた海洋世論の形成には, 食料安全保障のための超学際研究の推進が重要である, 日本国際フォーラム, 『海洋秩序構築の多面的展開—海洋「世論」の創生と拡大 コメンタリー』, 20230203

稲田 奈津子, 藤原兼通と兼家—執念の兄弟確執—, 吉川弘文館, 『人物で学ぶ日本古代史』 3 平安時代編, 20221210, ISBN9784642068765, pp.193-199

稲田 奈津子, 国際都市 平城京, 清水書院, 『つなぐ世界史』 1 古代・中世, 20230300, pp.※-※, 査読有り

井上正望, 一条天皇と後三条天皇—内裏をめぐる—, 吉川弘文館, 『人物で学ぶ日本古代史』 3 平安時代編, 20221210, ISBN978-4-642-06876-5, pp.252-255

小倉 慈司, 最澄と空海—日本仏教の方向を定めた二人—源高明—『西宮記』を編纂した醍醐皇子, 吉川弘文館, 『人物で学ぶ日本古代史』 3 平安時代編, 20221210, ISBN978-4-642-06876-5, pp.65-75, 171-174

仁藤 敦史, 古代天皇制の成立, 集英社, 『アジア人物史』 2, 20230228, ISBN978-4-08-157102-4, pp.565-628

早川 万年, 天武天皇, 吉川弘文館, 『人物で学ぶ日本古代史』 1 古墳飛鳥時代, 20220810, ISBN978-4-642-06874-1, pp.199-210

三舟 隆之, 舒明天皇と山背大兄王—大生部多—, 吉川弘文館, 『人物で学ぶ日本古代史』 1 古墳飛鳥時代, 20220810, ISBN978-4-642-06874-1, pp.144-150, 186-189

三舟 隆之, 浦島子と役小角—景戒—, 吉川弘文館, 『人物で学ぶ日本古代史』 2 奈良時代編, 20221001, ISBN978-4-642-06875-8, pp.248-251, 260-263

遠藤 慶太, 五・六世紀の渡来人, 雄山閣, 『講座畿内の古代学』 IV 軍事と対外交渉, 20220909, ISBN9784639027706, pp.144-161

CHIN Leakhena, Mina HORI, Tsutomu MIYATA, Hiroshi SAITO, PHEN Bunthoeun, Satoshi ISHIKAWA, Fishery Catch Distributions of Small-Scale Marine Fisheries in Cambodia, 東海大学海洋研究所, 東海大学海洋研究所報, 44, pp.1-23, 査読有り

稲田 奈津子, 京都大学附属図書館所蔵『正倉院東大寺宝篋』について, 東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信, 98, 20221031, ISSN2435-0265, 1-9

三上 喜孝, 日本古代木簡の型式分類と機能的分類, 韓国木簡学会, 木簡と文字, 29, 20221200, pp.61-75, 査読有り

三舟 隆之, 古代戸籍研究の現状と可能性, 歴史科学協議会, 歴史評論, 872, 20221201, ISSN0386-8907, pp.5-12, 査読有り

三舟 隆之, 吉野の宗教的環境—神仙境と山寺—, 奈良県立万葉文化館, 万葉古代学研究年報, 21, 20230300, pp.36-48

山口 えり, 古代の東国における陰陽師, 勉誠出版, 『アジア遊学』 278, 20221200, pp.176-180

Alessandro Poletto, The care of the self in early medieval Japan: scenes of disease and healing from Gyokuyō and Meigetsuki, 南山宗教文化研究所, Japanese Journal of Religious Studies, 49, 20230300, ISSN0304-1042, p.2, 査読有り

Kazumi Wakita, Hisashi Kurokura, Zaida A. Ocho, Reyda I Inolino, Hiroshi Fushimi, Satoshi Ishikawa, Potential signals promoting behavior for coastal conservation: Conformity in small-scale fishing communities in the Philippines., Elsevier, Marine Policy, 146, pp.105-292, 査読有り

鈴木 蒼, 【資料紹介】東山御文庫本『讓位部類記』付翻刻, 宮内庁書陵部, 書陵部紀要, 74, 20230304, ISSN0447-4112, pp.76-87, 査読有り

仁藤 敦史, 殯宮儀礼の主宰と大后—女帝の成立過程を考える—, 国立歴史民俗博物館, 国立歴史民俗博物館研究報告, 235, 20220930, ISSN0286-7400, pp.25-58, 査読有り

仁藤 敦史, 卑弥呼景初2年朝貢説再論, 桜井市纏向学研究センター, 桜井市纏向学研究センター紀要, 10, 20200722, pp.651-658

三上 喜孝, 古代の文字文化とジェンダーに関する覚書—東アジアと地域社会の視点から—, 国立歴史民俗博物館, 国立歴史民俗博物館研究報告, 235, 20220930, ISSN0286-7400, pp.117-124, 査読有り

稲田 奈津子, 文献案内 飯田剛彦「平安時代の東大寺における古器物・古経巻の保存と活用」, 東京大学史料編纂

- 所画像史料解析センター通信, 96, 20220428, ISSN2435-0265, p.30
- 遠藤 慶太, 伊勢と三重—「国」から「郡」へ—, 地方史研究協議会, 地方史研究, 72 (4), 20220801, ISSN0577-7542, pp.4-7
- 小倉 慈司, (国立歴史民俗博物館の愉悦⑨) 一代要記残簡—水戸黄門からの贈り物, ジアース教育新社, 文部科学教育通信, 547, 20230109, ISSN2187-2724, p.2
- 小倉 慈司, 岡田莊司著『古代天皇と神祇の祭祀体系』, 神道宗教学会, 神道宗教, 269, 20230125, ISSN0387-3331, pp.167-174
- 仁藤 敦史, 重見泰著『日本古代都城の形成と王権』, 日本史研究会, 日本史研究, 719, 20220700, ISSN0386-8850, pp.61-67, 査読有り
- 仁藤 敦史, 吉村武彦著『日本古代の政事と社会』, 吉川弘文館, 日本歴史, 892, 20220900, ISSN0386-9164, pp.75-77,
- 三舟 隆之, 古代の人物から何を学べるか, 吉川弘文館, 本郷, 162, 20221101, pp.29-31
- 三輪 仁美, 書評と紹介 佐藤信・小口雅史編『古代史料を読む』上・下, 日本古文書学会, 古文書研究, 93, 20220627, ISBN978-4-585-32403-4, pp.123-125
- 三輪 仁美, 新刊紹介 西本昌弘著『平安前期の政変と皇位継承』, 史学会, 史学雑誌, 131 (12), 20221220, ISBN0018-2478, pp.87-88
- 遠藤 慶太, 行基を必要としたもの, 近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会, 近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会ニューズレター, 17, 20221115, pp.1-2
- 遠藤 慶太, 仁明天皇の時代 音楽史のなかで, 吉川弘文館, 本郷, 163, 20230101, pp.24-26
- 小倉 慈司, 前白木簡は前で申したのか, 大東文化大学書道研究所, 桐墨, 14, 20230320, pp.2-3
- 河合 佐知子, 新刊紹介『高群逸枝 1894-1964—女性誌の開拓者のコスモロジー—』, 史学会, 史学雑誌, 131 (9), 20220900, ISSN0018-2478, pp.100-101
- 河合 佐知子, 暮らしの由来記「温泉文化史の魅力」, 国立歴史民俗博物館, 『REKIHAKU』008, 20230200, ,
- 仁藤 敦史, 「大化改新」と「韓政」, 吉川弘文館, 本郷, 162, 20221101, pp.17-19
- 仁藤 敦史, 額田寺伽藍並条里図, ジアース教育新社, 文部科学教育通信, 540, 20220926, p.1
- 小倉 慈司, 元号(年号)字の決定権, 国立歴史民俗博物館, 『REKIHAKU』006, 20220626, ISBN978-4-909658-81-4, pp.58-59, 査読有り
- 小倉 慈司, 元禄時代の修理の際に作成された東大寺正倉院宝物図, 国立歴史民俗博物館, 『REKIHAKU』008, 20230226, ISBN978-4-909658-96-8, pp.76-79
- 石川 智士, ブルーエコノミーの概念と今後の可能性, 静岡テルサ, 静岡市役所, 静岡・海洋産業シンポジウム2023「海洋産業から見るブルーエコノミー」, 国内会議, 20230309
- 稲田 奈津子, 平城京の国際性, オンライン, 國立臺灣大學日本研究中心, 第九届全国研究生研習營, 国際会議, 20220917
- 河合 佐知子, Communicate Widely and Seek New Research Seeds: Jinbunchi Communicator Roles and Rekihaku Databases, <http://www.uscppjs.org/visitors>, University of Southern California, The Project for Premodern Japan Studies, 国際会議, 20220908
- 河合 佐知子, Uncertain Powers, a Book Talk, <http://www.uscppjs.org/visitors>, University of Southern California, The Project for Premodern Japan Studies, 国際会議, 20220909
- 仁藤 敦史, 磐井の乱と古代国家生成, イヅカコスモスコモン, 飯塚市教育文化振興事業団, 温雅川古代事業推進実行委員会, 2022年度古代連続講座第7回講演会, 国内会議, 20221210
- 三舟 隆之, 駿河・伊豆の古代社会の成立, 沼津市図書館, 沼津市教育委員会他, 令和4年度文化財センター講演会, 国内会議, 20230312
- Alessandro Poletto, Healing through the Buddhist precepts: Disease, pregnancy and ritual efficacy in early medieval Japan, オンライン, Center for Buddhist Studies, University of Naples "L'Orientale", 国際会議, 20220412
- 井上 正望, 古代・中世移行期における神器と天皇—劍璽を中心に—, 同朋大学, 日本宗教史懇話会, 2022年度日本宗教史懇話会サマーセミナー, 国内会議, 20220821
- 井上 正望, 古代・中世移行期における平安京の「内」と「外」, 東京大学, 史学会, 第120回史学会大会, 国内会議, 20221113
- 早川 万年, 「語部は美濃に八人」考, 名古屋大学, 名古屋古代史研究会, 名古屋古代史研究会例会, 国内会議,

20220522

三上 喜孝, 日本古代木簡の型式分類と機能的分類, 韓国・中央大学 (オンライン), 韓国木簡学会, 韓国木簡学会第16回国際学術大会「韓・中・日古代木簡の名称に対する総合的検討」, 国際会議, 20220923

石川 智士, 地域の資源を地域得活かす, 氷見市漁業文化交流センター, 氷見市役所, 農業遺産シンポジウム「日本農業遺産を活用した地域の元気づくり」, 国内会議, 20221122

仁藤 敦史, 古代都市の成立と展開—都城から国府・斎宮へ—, 市川市文化会館, 斎宮歴史博物館・市立市川考古博物館, 伊勢斎宮と古代都市, 国内会議, 20230225

Leakhena CHIN|宮田 勉|齋藤 寛|石川 智士, カンボジア国沿岸小規模漁業に見られる漁具の多様化について, 東京海洋大学, 日本水産学会, 令和5年日本水産学会春季大会, 国内会議, 20230328

和田 知隼|石川 智士, 三重県志摩市のきんこ芋の特徴に関する考察, 同志社大学, 和食文化学会, 令和4年和食文化学会, 国内会議, 20230305

遠藤 慶太, 火山と金峯山と, 奈良県立万葉文化館, 奈良県立万葉文化館, 第19回万葉古代学共公開シンポジウム「神と仏がやどる場所—山と水に寄せる古代信仰—」, 国内会議, 20220827

小川 宏和, 平安時代の鵜飼, かみつけの里博物館, 国立民族学博物館, 令和4年度国立民族学博物館共同研究会, 国内会議, 20221029

小倉 慈司, 市大樹「日本古代文書木簡の展開」へのコメント, オーシャンスイーツ済州ホテル, 慶北大学校人文学術院HK+事業団, 慶北大学校人文学術院HK+事業団第五回国際学術会議, 国際会議, 20230130

小倉 慈司, 『延喜式』から見た堅魚製品, 東京医療保健大学世田谷キャンパス, 東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病 (三舟隆之代表), シンポジウムカツオの古代学, 国内会議, 20230224

三舟 隆之|井上 さやか|竹内 亮他, 吉野の宗教的環境, 奈良県立万葉文化館, 奈良県立万葉文化館, 第19回万葉古代学公開シンポジウム, 国内会議, 20220827

三舟 隆之|馬場 基, 古代堅魚製品の再現実験, 東京医療保健大学世田谷キャンパス, 東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病 (三舟隆之代表), シンポジウムカツオの古代学, 国内会議, 20230225

三舟 隆之|五百藏 良, 鰹色利の保存性, 東京医療保健大学世田谷キャンパス, 東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病 (三舟隆之代表), シンポジウムカツオの古代学, 国内会議, 20230225

遠藤 慶太, 継体・安閑天皇と倭王権, 大神神社, 大神神社, 三輪山セミナー, 国内会議, 20221029

小川 宏和, 平安時代の貢鵜と供御鵜飼, 長良川うかいミュージアム, 長良川うかいミュージアム, 長良川うかいミュージアム市民講座, 国内会議, 20220917

早川 万年, 壬申の乱とその時代, 大津市歴史博物館, 大津市歴史博物館, 壬申の乱1350年記念企画展「大友皇子と壬申の乱」記念講演会, 国内会議, 20221010

早川 万年, 古代の天皇・皇子と西美濃, 養老町民会館, 養老町教育委員会, 西美濃古代皇族の歩み探訪事業シンポジウム, 国内会議, 20230326

三舟 隆之, 西大寺食堂院の食を再現する, 奈良シニア大学, 奈良シニア大学, 奈良シニア大学, 国内会議, 20220509

三舟 隆之, 古代食の復元の試み—土器から分かること—, 鈴鹿市考古博物館, 鈴鹿市考古博物館, 鈴鹿市考古博物館入門講座, 国内会議, 20221008

三舟 隆之, 寺町廃寺と日本霊異記, 広島県立歴史民俗資料館, 広島県立歴史民俗資料館, 令和4年度みよし風土記の丘文化財講座, 国内会議, 20221015

三舟 隆之, 古代の食生活, 広島市立大学, 広島市立大学, 日本文化史 I, 国内会議, 20221118

三舟 隆之, 古代橘樹郡の古墳と寺院・官衙, 川崎市宮前公民館, 川崎市教育委員会, みやまえ歴史研究会, 国内会議, 20230115

三輪 仁美, 藤原詮子の生涯からみる平安時代の宮廷, オンライン, 朝日カルチャーセンターくずは教室, オンライン講座, 20221103

三輪 仁美, 平安時代の宮廷と后妃—藤原定子と藤原彰子を例として—, オンライン, 朝日カルチャーセンターくずは教室, オンライン講座, 20230218

5. 研究組織 (◎は研究代表者 ○は研究副代表者)

井上 正望 本館研究部・科研費支援員
 ◎小倉 慈司 本館研究部・教授
 ○後藤 真 本館研究部・准教授
 河合佐知子 本館研究部・特任助教
 仁藤 敦史 本館研究部・教授
 三上 喜孝 本館研究部・教授
 石川 智士 東海大学海洋学部・教授
 稲田奈津子 東京大学史料編纂所・准教授
 小川 宏和 武蔵野美術大学美術館・図書館民俗資料室・学芸員
 小口 雅史 法政大学文学部・教授
 神戸 航介 宮内庁書陵部編修課・研究員
 小風 尚樹 千葉大学人文社会科学系教育研究機構・助教
 鈴木 蒼 宮内庁書陵部編修課・研究員
 中村 覚 東京大学史料編纂所・助教
 西川 明彦 宮内庁正倉院事務所・調査室員
 早川 万年 岐阜大学教育学部・非常勤講師
 三舟 隆之 東京医療保健大学医療保健学部・教授
 山口 えり 広島市立大学国際学部・准教授
 余語 琢磨 早稲田大学人間科学学術院・准教授
 Joan R.PIGGOTT 南カリフォルニア大学・教授
 Alessandro Poletto セントルイス・ワシントン大学・専任講師
 古田 一史 RA

(5) ネットワーク型基幹研究プロジェクト 歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業 2022～2027年度 (研究代表者 三上 喜孝)

1. 目的

本事業は、機構、東北大学及び神戸大学（以下「連携3 機関」という）が事業の中核となり、日本各地の大学や地域に設立されている歴史資料ネットワーク（以下「資料ネット」という）等と連携して、災害時におけるレスキュー活動を含む歴史文化資料の保存・継承を実施する相互支援体制を構築し、地域の歴史文化資料調査・保存研究活動を軸とした全国広域ネットワークを構築するとともに、歴史文化研究分野における教育・人材育成促進に向けて環境整備を行う。また、これまで連携3 機関が中核となって推進した高度な研究蓄積と多様なネットワークを活かして新たな地域社会の歴史文化研究を推進し、その歴史文化の基盤を、研究者だけでなく地域全体で認識する。併せて、資料保全の実践を通して地域社会の課題を抽出し、多様な資料の持続的な保存・継承・活用に向けた基盤構築を進め、歴史文化の継承と創成を担う研究・教育推進拠点を形成する。ネットワークを活用した研究成果を元に、全国の資料ネット等と連携して自治体や社会との協働・共創を推進し、地域と歴史文化の新たな関係を提起する。さらに、情報発信として展示活動を実施するとともに機構や機構内機関の情報基盤を中核としたデータ連携を促進し、新たな地域研究を担うプラットフォームを構築する。これにより、地域歴史文化の構築研究に資するとともに、資料保全の新たなあり方や、大学共同利用機関法人として、それらの地域文化基盤を研究者と地域で共有する事業へとつなげていく。さらに、研究成果の教育活動への活用を進めるとともに、地域を軸とした成果の発信を推進する。

2. 今年度の研究計画

これまでに各拠点で形成した大学・資料ネット等とのネットワークを基盤とし、地域における歴史文化の基盤を、研究者だけでなく地域全体で再認識する。これにより、地域歴史文化の構築研究に資するとともに、大学共同利用機関法人として、資料保全のあり方や、それらの地域文化基盤を研究者と地域で共有する事業へとつなげていく。さらに、研究成果の教育活動への活用を進めるとともに、地域を軸とした成果の発信を推進する。

令和4年度は、全国の資料ネットとの連携強化に向けて「全国史料ネット研究交流集会」を宮崎県で開催すると

ともに、大学等との連携・協議を進めるための「地域歴史文化大学フォーラム」を開催する。また、歴史文化資料をめぐる国際連携強化に向けて国際シンポジウムを開催し、資料保全に関わる国際交流を推進するとともに、資料保全をとりまく課題抽出や問題解決にむけた各種研究会・ワークショップを開催し、地域歴史文化資料の保存・継承のための基盤整備を進める。

さらに、各拠点が主体となって首都圏・北日本・西日本各地域の歴史文化資料をとりまく諸状況を協議し、大学や博物館、資料ネット等と連携した地域研究・教育基盤の構築にむけた議論を進める。

3. 今年度の研究経過

①研究会・シンポジウム等

全国の資料ネット等と連携基盤を構築・運営するための全国資料ネット研究交流集会（1月）、資料保全を展開する大学等との連携強化をはかるための地域歴史文化大学フォーラム（3月）を実施した。また、防災関係者との連携および防災活動における本事業の役割を検討するために「防災推進国民大会2023」（10月）にポスターを出展した。さらに、9月にプロジェクト研究会をオンラインで開催するとともに、首都圏大学関係者との連携協議を目的とした「歴史文化資料保全首都圏大学協議会」を3月にパルテノン多摩にて実施した。これら研究会・シンポジウムは計5回である。

②ワークショップ等

泉大津市立図書館と連携した公開講座「地域の歴史・文化再発見講座」を実施し（5月、10月、11月、3月）、山形大学と連携して山形文化遺産防災ネットワーク研修会を共催事業として実施した（5月、7月、9月、11月、1月、3月）。さらに、兵庫県立御影高等学校と連携してワークショップを開催した（12月、2月）。以上のワークショップ等は計12回である。

③調査活動

2019年台風19号で被災した川崎市市民ミュージアム（神奈川県川崎市）被災古文書の救出・応急処置作業を支援した。同台風で被害を受けた資料の救済活動を実施する長野市立博物館に対しても応急処置の支援・技術指導をおこない（12月）、同じく栃木県佐野市で発生した被災資料に対しても持続的な応急処置の支援等をおこなった（3月）。また、2020年に東京都青梅市で発生した火災によって被害を受けた焼損資料について、国立文化財機構文化財防災センターと連携して応急処置を実施した（6月、10月）。

④教育活動

福島大学行政政策学類が実施する「コア・アクティブ科目」に協力して授業を実施し、山形大学人文社会科学部課題演習とも連携して共催授業を実施することで、各地の大学教育における資料保存・継承の実務とその意義について解説をおこなった。

○研究会・シンポジウム等の開催

歴史文化NW歴博拠点「共創的資料保存の構築に向けたネットワーク研究拠点」第1回研究会（2022年9月16日 於：オンライン）

防災推進国民大会 2023でのポスター出展（2022年10月22日・23日 於：人と防災未来センター）

第9回全国史料ネット研究交流集会 in 宮崎（2023年1月28日・29日 於：宮日会館・オンライン）

地域歴史文化大学フォーラム（2023年3月18日 於：オンライン）

歴史文化資料保全首都圏大学協議会（2023年3月26日 於：パルテノン・多摩）

4. 今年度の研究成果

1) 研究成果の概要

プロジェクトの初年度にあたる本年度は、共同研究者と研究課題を確認し、各地での資料保存・継承に向けた課題解決および新たな研究・教育活動の展開に向けた調査を中心に進めることができた。さらに、当初の予定通り研究会やシンポジウムを実施するとともに、各大学や博物館・図書館等との連携を通して予定を上回る規模でワークショップを開催し、地域資料の保存・継承を軸に多角的な共創的事業を進めることができています。

2) 主な論文

- 2022年4月 「自治体が地域の歴史資料を受け継ぐ意義とは」, 三村昌司, 『都市問題』113-4, pp.38-45
- 2022年6月 「学生と取り組む文書の保存と補修の実習 —大学学外実習・インターンシップの受け入れを例として」, 下向井祐子, 『広島県立文書館紀要』16, pp.21-64
- 2022年7月 「被災固着文書の開披法試論—宇波西神社文書を題材にして—」, 山口悟史, 『東京大学史料編纂所 画像史料解析センター通信』97, pp.2-8
- 2023年2月 「幕末期の政治変動と思想」, 天野真志, 『歴史評論』875, pp.52-62
- 2023年3月 「社会の変容と諸藩」, 天野真志, 『東北史講義【近世・近現代篇】』筑摩書房, pp.49-63

3) 主な研究会・シンポジウム等

- ・第9回全国史料ネット研究交流集会 in 宮崎 (2023年1月28日・29日 於: 宮日会館・オンライン, 第9回全国史料ネット研究交流集会実行委員会との共同主催, および特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」(代表: 奥村弘) との共催)

【1月28日】

- 木部暢子 (人間文化研究機構) 「主催者挨拶」
- 初木郁郎 (第9回全国史料ネット研究交流集会実行委員会) 「主催者挨拶」
- シンポジウム I 「南海トラフ地震・火山噴火・水害—限られた資源でどう向き合っていくか—」
- ポスターセッション (全国資料ネットの紹介)
- シンポジウム II 「地域社会の現状に向き合う—地域コミュニティ・多様な人材—」
- 緊急報告会～最近の災害によって被害を受けた山形県等における資料レスキューの状況の報告会～

【1月29日】

- シンポジウム III 「資料の所在をいかに把握するか」
- 総合討論
- 高妻洋成 (文化財防災センター) 「閉会挨拶」
- 奥村弘 (神戸大学) 「閉会挨拶」
- ・地域歴史文化大学フォーラム「地域社会との協働・共創を目指して」(2023年3月18日 於: オンライン, 特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」(代表: 奥村弘) との共催)
- 若尾政希 (人間文化研究機構) 「主催者挨拶」
- 小野塚航一 「趣旨説明」
- 天野真志 「歴史文化継承に向けた連携の可能性—歴博拠点の取り組み—」
- 奥村弘 (神戸大学) 「地域の歴史文化を担う市民と専門家の育成をめざして」
- 佐藤大介 (東北大学) 「歴史文化遺産ネットワーク推進事業東北大学拠点の活動と今後」
- 三上喜孝 「コメント」
- ・2022年度歴史文化資料保全首都圏大学協議会「多摩地域における史料保存の現状と課題」(2023年3月26日 於: パルテノン多摩, 中央大学政策文化研究所「地域社会の持続と歴史的資源の保存・活用」チーム (代表: 宮間純一) との共催)
- 若尾政希 (人間文化研究機構) 「開会挨拶」
- 宮間純一 (中央大学) 「趣旨説明」
- 保坂一房 (たましん地域文化財団歴史資料室) 「多摩地域における自治体史編さんと資料保存」
- 橋場万里子 (パルテノン多摩ミュージアム) 「地域資料をいかに継承していくか—地域が直面する代替わりと収蔵問題—」
- 黄川田翔 「東京都における文化財防災体制の現状と課題」
- 「総合討論」(司会・天野真志)

4) ワークショップ

- ・泉大津市立図書館主催「地域の歴史・文化再発見講座2022」(本事業協力 於: 泉大津市立図書館)
- 2022年5月12日 天野真志 「地域資料の保存と継承」
- 2022年10月13日 甲斐由香里 (三重県総合博物館) 「歴史文化資料の取り扱い方について」
- 2022年11月27日 三村昌司 (防衛大学校) 「文書保存・管理の歴史～地域歴史資料を未来につなぐ～」
- ※オンラインとのハイブリッド開催

- 2023年3月9日 工藤航平「図書館のなかの地域資料—朴斎文庫の魅力をもとく—」
 ・山形文化遺産防災ネットワーク2022年度研修会（本事業共催 於：山形大学）
 2022年5月22日 天野真志「被災紙資料の救済方法を学ぶ」講義+ディスカッション・実技
 2022年7月16日 佐藤琴（山形大学）等「被災紙資料の救済方法（実技）襖はがし」,「みんなで考えよう！被災時の山形ネットはどう動く？」
 2022年9月11日 三上喜孝・佐藤琴（山形大学）「対談：地域の歴史文化を守り伝える取り組みとは」
 ワークショップ「[令和2年7月豪雨]と[令和4年8月豪雨]をもとに発災時の対応を考えよう」
 2022年11月20日 天野真志「資料ネットと被災紙資料の救済方法」
 2023年1月22日 「下張り文書に学ぶ紙資料の救済方法」
 2023年3月5日 「下張り文書に学ぶ紙資料の救済方法」

5. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者）

（館外）

- 阿部 浩一 福島大学行政政策学類・教授
 今村 直樹 熊本大学永青文庫研究センター・准教授
 植松 暁彦 山形県埋蔵文化センター・専門調査研究員
 岡田 靖 東京藝術大学大学院美術研究科・准教授
 甲斐由香里 三重県総合博物館・学芸員
 河瀬 裕子 泉大津市立図書館・館長
 黄川田 翔 文化財防災センター・研究員
 小関悠一郎 千葉大学教育学部・准教授
 坂本 達彦 國學院大学栃木短期大学日本文化学科・教授
 作間 亮哉 那須歴史探訪館・学芸員
 佐藤 琴 山形大学附属博物館・准教授
 佐藤 宏之 鹿児島大学法文教育学域・准教授
 下向井祐子 広島県立文書館・文書等整理従事員
 高山 慶子 宇都宮大学共同教育学部・准教授
 中尾真梨子 奈良県立橿原考古学研究所・技師
 西村慎太郎 国文学研究資料館・教授
 東野 将伸 岡山大学社会文化科学学域・講師
 日高 真吾 国立民族学博物館・教授
 平野 哲也 常盤大学人間科学部・教授
 檜皮 瑞樹 千葉大学文学部・准教授
 堀田慎一郎 東海国立大学機構大学文書資料室・特任助教
 堀野 周平 鹿沼市教育委員会事務局文化課・主任主事
 三村 昌司 防衛大学校人文社会科学群・准教授
 宮間 純一 中央大学文学部・教授
 山口 悟史 東京大学史料編纂所・技術専門職員

（館内）

- 天野 真志 本館研究部・准教授（※歴博拠点代表）
 小野塚航一 本館研究部・特任准教授（2022年10月より）
 川邊 咲子 本館研究部・特任助教
 工藤 航平 本館研究部・准教授
 久留島 浩 本館研究部・特任教授
 後藤 真 本館研究部・准教授
 中村 耕作 本館研究部・准教授
 ◎三上 喜孝 本館研究部・教授（※プロジェクト代表）

【機構共創先導プロジェクト】

- (6) 日本関連在外資料調査研究
 外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用
 2022～2025年度
 (研究代表者 日高 薫)

【基幹研究】

- (1) 水をめぐる生活世界—実用と信仰の視点から—
 2020～2022年度
 (研究代表者 関沢 まゆみ)

1. 目的

人と水の関係には、生物学的生存のために人びとが蓄積してきた水利用の技術と歴史があり、一方、くり返し起こる洪水などには人間が勝てない水の世界（自然の驚異、災害）がある。水の精神性（心理的かつ象徴的な意味づけ）の面では、芸術・音楽、癒しなど水をめぐる芸術と信仰がある。このような水と人間の関係史の視野から、生物学的生存のための水（実用としての水）と、心の部分（信仰としての水）とについて研究を行い、人びとの生活と水の関わりについて具体的・実用的な面と、象徴的・信仰（精神）的な面とを合わせた歴史と民俗伝承の実態の解明を目的とする。具体的な課題は以下の3点である。

(1) 日常的な水の確保 上水道普及以前には、飲料水、炊事、洗濯、風呂など家庭生活のなかでどのように水を確保してきたのか。日常的な実用としての水については、近代的な上下水道が完備される以前の水資源の確保の歴史と民俗の把握が重要である。とくに島嶼部においては上水道の普及が昭和40年代以降で、民俗誌にはそのような水の苦勞について断片的な記述があるが、今回は経験者への聞き取りを行なっておく機会と考えている。

(2) 水の信仰・儀礼伝承 実用の水の儀礼化には水への関心の高さと意味づけとがあらわれている。正月の若水汲みや七月七夕の井戸浚え、棚機女の伝承、盆行事などの年中行事や、神社の立地などにみる水の信仰的な意味にあらためて注目する。また、井戸の水神祭祀や村の水源や田の水口の祭祀などをあらためて水と人との関わりという視点で見直すことによって、水の神とは何か、古代以来の歴史文献と日本各地の民俗伝承との両面から分析を行う。とくに水に苦勞した島嶼部においては、上水道が普及してすでに使用されなくなった井戸を今も大切に、信仰の対象としている例が少なくない。この(1)と(2)は併行して考察していく。

(3) 水の確保をめぐる歴史の記憶 青森県十和田市の三本木原開拓、玉川上水、多摩川の二ヶ領用水、琵琶湖疏水等の工事、また富士川の信玄堤や雁堤等々の水害予防など、各地の水に関わる大土木工事について、その記録と記憶が学校教育や地域の祭りのなかで伝えられてきているが、その歴史と伝承の実態に注目する。水資源確保のための大規模土木工事とその記憶については、水資源確保のための歴史的事実がその後どのように記憶され伝承されていくのかという伝承分析の視点を活用する。

これらについて、現地における聞き取り及び文献記録資料類の調査を通して研究を進め、研究期間中に研究会を開催し、成果の公開をはかり、若手研究者育成への貢献をはかることも目的の一つと考えている。

2. 今年度の研究計画

研究会を対面またはオンラインで4回行ない、水の記憶についての発表を補足しながら、『研究報告』（特集号）の構成と論文についての検討を行なう。また、大テーマ「水と人間の日本列島史」の総括に向けての検討を行なう。このほか、令和2年度、3年度に実施できなかった各位の資料調査を行なう。

3. 今年度の研究経過

第8回研究会 8月23日（火） 10：00～16：30（Zoom）

関沢まゆみ「7月と水」

関沢まゆみ「水の記憶と伝承についての情報収集〈作業例〉」

阿利よし乃「井泉の信仰と祖先祭祀—沖縄県中部平安座島調査の中間報告—」

新谷尚紀「水とスサノオ—記憶装置としての神話—」

水の記憶と伝承についての討論

「7月と水」では柳田や折口がとらえていたような、旧暦7月を盆の月として、全体としてとらえてみることの有効性、七夕と盆の行事の「くりかえし」の論理について、そして水の利用が必要不可欠であることなどを指摘した。また、最終年度に取り組む水の記憶と伝承について具体的な事例の検討を行なった。

第9回研究会 10月22日（土） 10：00～16：00（Zoom）

柴崎茂光「北山地域において継承され、変わり続ける流送の技術」

『研究報告』に執筆する原稿についての検討（1）

三上喜孝「ため池の造営伝承とその記録」

阿利よし乃「水の利用と井戸の信仰—沖縄県中部平安座島の事例—」

武井基晃「沖縄の水をめぐる基礎報告」他

和歌山県北山地域における筏流しが、昭和20年代終わり頃から衰退したが、1976年以降、観光筏事業が計画され、筏師の技術の継承、後継者育成も行なわれていることなど調査報告がなされた。また、『研究報告』に掲載する原稿について検討を行なった。

第10回研究会 12月11日（日） 10：00～15：30（Zoom）

大城沙織（筑波大学大学院）「南城市津波古における上水道以前の水の記録—海軍資料と協議録を中心に—」

津波一秋（筑波大学大学院）「水の不在と儀礼の存在—那覇市小禄地区の門中祭祀から—」

沖縄県南城市津波古（旧馬天）の米軍による土地接収と集落移転の時期を含む1946～1963年の協議録の分析から、生活の水の確保の実態、旧集落の井戸は信仰対象であるのに対し戦後の井戸は拝まないという相違など、また那覇市小禄地区のN門中の瀬長拝みについての調査報告がなされた。

第11回研究会 3月25日（日） 10：00～16：00（Zoom）

津金滯乃（國學院大学大学院）「昔話における水中の世界」

新谷尚紀「生と死と水の信仰と儀礼」

阿利よし乃「波照間の御嶽と水」

「昔話における水中の世界」では、水中の世界から宝をもらう昔話の分析から、水の世界の特徴及び水の世界についての民俗伝承の中での心象をめぐる伝承と変遷についての発表がなされた。折口信夫のステ水をめぐる議論からの意見交換が展開されて意義深いものとなった。最後の研究会であり、あらためて水をめぐる民俗と歴史の中の個々の伝承事実の意味を考えることの必要性が確認され共有された。

4. 今年度の研究成果

今年度も、コロナ禍の影響もあって共同での現地調査や資料調査が十分できず、共同研究員各位による調査が中心となった。研究会では、各位が調査してきた情報を共有するかたちでの発表とディスカッションが中心となった。その注目点は前項の各研究会のなかに記している。そのうえで、今年度の研究成果について述べる。

（1）沖縄における水の儀礼とその水の意味

今年度も沖縄の水の確保と儀礼に関して、ゲストスピーカーも含めて研究発表を継続した。そのなかで、特定の井戸の水には、スデル、シデル（蛇の脱皮のように生まれかわる意味）意味が認められることが指摘された。これは、折口信夫が「若水の話」（1927年）、「貴種誕生と産湯の信仰」（1927年）、「水の女」（1937-38年）（いずれも『折口信夫全集』2 中央公論社 1965年所収）のなかで、水をめぐる、蛇の脱皮を連想する生命観や世界観について述べているが、それに通じる。この言葉からも、スジ、セジ（先祖）が生命を継いできた水の意味をあらためて考えることになった。

（2）『研究報告』（特集号）の構成案の検討 『研究報告』の構成案について検討を行ない、目次案を作成した。

5. 全期間の研究成果

本共同研究は、日常的な水の確保、水の信仰・儀礼伝承、水の確保をめぐる歴史の記憶という3つのテーマで行なってきた。「水と人間の日本列島史」という広がりにはA班とB班とをあわせて考察ができるようにB班では沖縄の調査研究についても重視した。

（1）沖縄における水の確保と儀礼

沖縄本島は北東部から南西部へと長く、地形的にみて高地で森林が多く川がある北東部と、石灰岩質で川がない低地の南西部とに分かれるが、その南西部では清水が湧き出るところや井戸が多く存在する。南城市はじめ南西部

地域における上水道普及以前の生活では、井戸や川を利用して体験者の聞き取りができた。また沖縄県立博物館・美術館所蔵の明治期に撮影された古写真（ウォルター・J・クラッターバック〈1898年撮影〉）では天水や井戸水をためる甕が利用されていたことが確認され、戦後1960年代にJ・H・カー撮影の写真でも民家では屋根から樋で天水をひいて甕にためた水を利用していた様子などが確認できた。

また、沖縄の村々では井戸や湧水への信仰と儀礼が根強く現在も伝承されていることがわかった。沖縄にはすでに使用されなくなった井戸も大切に保存され、旧正月に村人が井戸を拝む儀礼を行なうなど、信仰の対象として強い伝承力を維持している。生活と水のもつ意味について、単に物理的な確保だけではない人びとの生活と水との関係が注目された。

さらに、水の記憶という点では、阿利氏による、石垣島白保の明和の大津波（明和8年〈1771〉）で被害を受けたもののその復旧の際、井戸を発見した家が今もその真謝井戸（マサジャー）と呼ばれる井戸の祭祀において一定の役割を果たしているという報告や、大城氏による沖縄県南城市津波古（旧馬天）は近世における集落移転と米軍による土地の接収による2度の移転を経験しているが、旧集落の井戸は信仰対象であるのに対し、移転後の集落に新たにつくられた井戸は拝まないという相違、津波氏による那覇市小祿地区の門中祭祀においてはやはり旧集落の基地内にある井戸には行けないが、旧来の「井戸」の祭祀は継続していることが報告された。これらの調査報告から、元の集落の井戸へのこだわりの強さとその信仰の儀礼化が特徴として指摘できる。また、このことは洗骨の水は産湯に使った井戸の水を汲んでくるといふ伝承にも関係するものといえる。

研究会の最終回では、生と死と水の信仰と儀礼をテーマにした。そのなかで、折口信夫が注目した「シデル」「ステル」の概念の検討がなされ、そのなかには蛇の脱皮を連想する生命観や世界観があり、信仰と儀礼の中の水には、永遠に若さを保つ水（永遠の水）の意味があるという指摘がなされた。そして、その儀礼の水はスジ、セジ（先祖）が生命を継いできた水でなければならないという、意義深い議論が展開された。

（2）水の信仰・儀礼伝承

聖地と水 A・B両班の合同研究会（2020年2月13日、2021年3月27日）を行ない、それまでのA班における水と祭祀をめぐる考古学、古代史からの研究発表を受けて、民俗学からの発表を行ない、学際協業の議論を深めることができた。古墳・王の神聖化・水利の関係と、水源（湧水）祭祀の伝承、水の視点からみた神社の立地と祭祀など、水をめぐる祭祀の形の変遷についての考古学、歴史学、民俗学の学際的追跡の視点が得られた。そして具体的には、ニソの杜のような水源祭祀、日吉神社摂社の樹下宮本殿の御神座の下の霊泉や四天王寺の亀の井のように社寺と湧水・井泉の立地の関係、さらに波照間の御嶽と水の祭祀など、水の視点から聖地や神事祭祀を見直すための調査を行なった。

映像「久礼八幡宮秋季例大祭 御神穀祭」(52分)の製作 2021年度に神社祭祀と水について、高知県中土佐町久礼の氏神である久礼八幡宮で新月の旧暦8月1日から15日の満月の夜まで半月間にわたって行なわれる御神穀祭の調査と映像製作を行なった。頭屋から神社に御神穀（おみこく）と呼ばれるその年に収穫された稲からとれる米で炊かれた飯と搗かれた餅が奉納されて、毎年決まった川から水を汲んできて伊（イチ）と呼ばれる巫女の少女によって一夜酒が作られ、神前に供えられるのが特徴である。清めの水、酒の水、そして川上に位置する大坂組の役割と水神祭祀などの観点から祭祀の記録と分析を行なった。DVDは中土佐町役場に寄贈し、地域の社会教育や文化財教育の資料として活用されている。

（3）水の確保をめぐる歴史の記憶

水の記憶については、奈良県と大阪府の境に位置する金剛山から奈良県側の吐田郷に水を引いた伝説的な上田角之進の事例、常陸国風土記の箭括麻多智の伝承、讃岐の満濃池の歴史と伝承など、水の確保と土木工事をめぐる人物の記念・顕彰から神話まで幅広い伝承のされ方がみられることについて、考古学や歴史学や民俗学の観点から情報交換を行なった。しかしながら、当初計画していた新渡戸稲造の祖父傳と三本木原開拓（稲生川開設）と太素祭などの現地調査ができなかったこともあり、これまでの調査事例をあらためて歴史の記憶と伝承という視点で見直すにとどまったため、これは今後のとりくむべき課題となった。

（4）その他

若手研究者育成への貢献

オンラインを活用し、大学院生の自由参加と特別共同利用研究員を含むゲストスピーカーとしての研究発表（5名）を積極的に行なった。

期間中の主な成果公開

関沢まゆみ「若狭のニソの杜の祭りと水源」『国学院雑誌』121—8 2020年 pp.1-13

新谷尚紀「河童 柳田國男・折口信夫・石田英一郎の河童についての考察」『遠野物語と柳田國男』吉川弘文館2022年、pp.80-102

口頭発表 阿利よし乃「水の利用と信仰—沖縄県うるま市平安座島の事例—」第74回日本民俗学会年会 2022年10月2日 於：熊本大学（要旨集 pp.80）

映像「久礼八幡宮秋季例大祭 御神穀祭」（52分）の製作 2022年3月

研究成果の公開予定

- ・ A・B両ブランチの大テーマである「水と人間の日本列島史」のまとめとして、松木代表と一般書の出版について検討を行なった。A・B両ブランチの研究から、水と権力、水と異界、水と記憶などをキーワードに、考古学と歴史学と民俗学を中心とした学際協業の成果をまとめることとした。今後、図書の刊行も予定している。
- ・『研究報告』（特集号）の発表・公開を行なう（2025年度予定）。

6. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

阿利よし乃 沖縄国際大学総合文化学部・講師

神谷 智明 琉球大学法文学部・准教授

新谷 尚紀 国立歴史民俗博物館名誉教授

武井 基晃 筑波大学人文社会系・准教授

柴崎 茂光 東京大学大学院農学生命科学研究科・准教授

○三上 喜孝 本館研究部・教授

◎関沢まゆみ 本館研究部・教授

（2）交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化—その成立・展開過程— 2022～2024年度 （研究代表者 鈴木 琢也）

1. 目的

古代北海道に展開したオホーツク文化（5～9世紀）・擦文文化（8～12世紀）は、本州の古代国家あるいはサハリン、千島列島、大陸などの諸文化との交流のなかで様々な影響を受けながら独自の文化を形成してきた。本研究では二つの文化が周辺国家・諸文化との多様な交流、さらにはその背景となる環境や社会との関わりのなかで、どのような文化的影響を相互に与え合いながら変容をとげ、アイヌの文化へと移行していくのかということ、すなわちアイヌの文化への移行過程を交流及び環境や社会変化という視点から再構築することを目的とする。

オホーツク文化・擦文文化の実態を記す同時代の文献史料は極めて少ない。そこで、本研究では考古学的なモノ資料の分析をふまえて、人・モノの移動や交流の実態を把握し、文献史料の検討と合わせてその実像を再構築する。具体的には、（1）本州からオホーツク文化・擦文文化に搬入された鉄製品、須恵器、鈿帯金具、銭貨等、その対価として本州にもたらされた毛皮類、海産物等に関する考古資料・文献史料の分析・検討をもとに、本州の古代国家・東北地方北部と、オホーツク文化・擦文文化との相互交流の様相を明らかにする。（2）北からの視点としてサハリンや大陸などからオホーツク文化・擦文文化にもたらされた青銅製品、軟玉、ガラス玉等を検討し、文献史料の検討も合わせて、北方諸文化との交流及び隋・唐、渤海などの大陸諸国家が両文化に及ぼした影響を明らかにする。そして、このような交流の展開と、オホーツク文化・擦文文化における集落動態や文化要素の変化などとの関係を検討し、多様な交流に促された二つの文化の変容を追究する。（3）考古学と文献史学からの検討を両輪としつつ、アイヌの文化についての研究視点を加え、アイヌの文化のなかにオホーツク文化・擦文文化の交流のあり方や文化要素などがどのように受け継がれたのかということを追究することによりアイヌの文化への移行過程について検討を加える。また、（4）年代研究や環境復元に酸素同位体比年輪年代法を導入し、その検討の精度を高めるとともに、その研究基盤を構築し、環境がオホーツク文化・擦文文化の社会や交流、文化変容、アイヌの文化への移行過程に及ぼした影響を分析する。

このように、本研究ではオホーツク文化・擦文文化をめぐる南・北交流の様相と、その交流を契機とした社会変化や文化変容の実態を学際的な研究手法により分析し、アイヌの文化への移行過程を追究する。そして、本州から大陸に及ぶ広域的な北東アジア交流史のなかにオホーツク文化・擦文文化の歴史的な展開、アイヌの文化への移行過程を位置づけることを目的とする。

2. 今年度の研究計画

本プロジェクトでは考古学、文献史学、環境の3分野から研究を実施し、年3～4回の研究会でその研究成果の

共有を図り、それらを総合化して研究を進める。考古学では北海道自治体の研究者をゲストスピーカーとして適宜加える。

- ①基礎作業として、本州の古代国家・東北地方北部とオホーツク文化・擦文文化との関係を明らかにするため土器編年を確認し年代軸を共有する。その年代軸をもとにオホーツク文化・擦文文化の遺跡分布動態や社会を復元する。
- ②オホーツク文化に搬入された本州産・大陸産製品の調査・集成作業を実施する。
- ③『続日本紀』、『延喜式』、『類聚三代格』など古代史料に記された北方産交易品を整理するとともに、その流通の実態を本州の古代国家による北方政策の展開をふまえ再検討する。
- ④これまでに得られた北日本産樹木の年輪酸素同位体比データを用いて、5～12世紀のオホーツク文化・擦文文化の年代を再検討するとともに環境復元を行う。

3. 今年度の研究経過

令和4年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響はあったが、巡検を含めた研究会を4回開催することができた。また、資料調査は3回実施した。ほぼ今年度計画の①～④に対応した研究報告がなされた。

第1回研究会 2022年7月3日～4日 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

鈴木 琢也「研究計画について」

箱崎 真隆「新年代法『酸素同位体比年輪年代法』の北日本における研究状況」

蓑島 栄紀「アイヌ文化概念の形成と変遷」

鈴木 琢也「擦文文化に搬入された本州産製品からみた交流の様相」

榑田 朋広「擦文文化の集落群構成・動態と地域間交流」

第2回研究会 2022年10月29日～30日 枝幸町オホーツクミュージアムえさし

高島 孝宗「オホーツク文化における本州系遺物の流入状況について」

熊木 俊朗「オホーツク文化の遺跡動態に関する整理と課題」

白杵 勲「オホーツク文化に搬入された大陸産製品と北方諸文化との関係について」

- ・枝幸町目梨泊遺跡出土資料の調査

- ・目梨泊遺跡をはじめとした枝幸町内の遺跡巡検

第3回研究会 2022年12月8日～9日 厚真町教育委員会軽舞調査整理事務所

手塚 薫「アイヌの民族・歴史考古学の現状の整理と課題」

乾 哲也「厚真町に搬入された中世初期の本州産・大陸産製品について」

奈良 智法「厚真町における擦文文化からアイヌ文化の墓の変遷について」

- ・厚真町厚幌ダム関連遺跡の巡検

- ・厚幌ダム関連遺跡群出土遺物の資料調査

第4回研究会 2023年3月11日 国立歴史民俗博物館

熊木 俊朗「オホーツク土器の年代と編年対比」

榑田 朋広「擦文土器の広域編年研究の現状と課題」

齋藤 淳「東北部出土の擦文(系)土器」

第1回資料調査 2022年8月23日～26日

「利尻島・礼文島におけるオホーツク文化の資料調査」

- ・利尻町立博物館・利尻富士町教育委員会・礼文町郷土資料館・利尻島郷土資料館においてオホーツク文化の資料調査。

- ・利尻富士町役場遺跡(利尻富士町)、浜中2遺跡・船泊遺跡・香深井遺跡(礼文町)の巡検。

第2回資料調査 2023年2月11日～13日

「オホーツク海沿岸地域における環境条件とオホーツク文化・擦文文化の資料調査」

- ・紋別市立博物館、枝幸町オホーツクミュージアムえさしにおいて資料調査

- ・北海道立オホーツク流水科学センターにおいて環境条件、とくに流水にかかわる調査。

- ・枝幸町目梨泊遺跡巡検。

第3回資料調査 2023年3月1日～2日

「道北・道央・道南におけるアイヌ文化と日本海交流にかかわる調査」

- ・小樽市立総合博物館、北海道大学においてアイヌの文化にかかわる調査。

- ・北海道大学アイヌ先住民研究センターにおいて、アイヌ史の枠組み等の検討

4. 今年度の研究成果

本年度の研究では、アイヌ史の視点からみた現行の北海道時代区分の問題点を指摘し、アイヌや地域に主体をおく「アイヌ史における古代」といった時代区分、歴史叙述について提起した(蓑島 2022)。本研究では、交流及び環境や社会変化という視点から、オホーツク文化、擦文文化の歴史的な展開、アイヌの文化への移行過程を再構築し、それぞれの文化の枠組みについても検討することを目的の一つとしているが、このような文化の変容や社会変革を、地域に主体をおく歴史叙述のなかにどのように位置づけていくかという課題を示すことができた。

また、北海道に搬入された本州産製品(須恵器、鉄製品など)の流通の様相をもとに、擦文文化集団と古代国家、東北地方諸勢力、東北地方土師器文化集団との交流の実態を明らかにし、その段階的な交流の展開を背景とした擦文文化の成立、拡散、変容という社会変化の過程を提起した(鈴木 2022)。

枝幸郡枝幸町で開催した研究会(第2回研究会)では、目梨泊遺跡から出土したオホーツク文化にかかわる資料を調査し、とくに金銅装大刀を詳細に検討した。目梨泊遺跡からは金銅装大刀をはじめ蕨手刀、土師器など本州系の遺物がまとまって出土しており、この搬入ルートが課題となった。さらにオホーツク文化の堅穴住居を検討し、その動態についても明らかにした。目梨泊遺跡では本州系の遺物だけではなく、大陸系の帯金具等が出土している。大陸の文化との関係について整理をした。交流・交易というが、具体的にオホーツク文化の側から、本州や大陸に何が渡ったのかが課題となった。目梨泊遺跡がオホーツク文化後半、東からオホーツク海沿岸を北上する最前線と位置づけた。また、オホーツク海沿岸を特徴づける環境の問題、具体的には流水等、オホーツク文化を考えるうえで基本となる環境条件を確認した。

厚幌ダム関連遺跡群から出土した資料は、擦文文化からアイヌの文化への移行期を端的に示す資料であることが遺構、遺物の上から確認できた。擦文文化とその後のアイヌの文化を連続したものとして捉え、近世のアイヌの文化の個々の要素が、いまだまとまったものではないが、出現してくる過程の研究が重要であることをあらためて認識できた。「アイヌ史」として捉えたときは、これらは一つながりのものであり、「考古学上のアイヌ文化」の成立という考古学の用語法の問題点が提示できた。厚幌ダム関連遺跡群でみつかるとともに、遺構、遺物が、現在は厚真町でしか見つかっていないが、広く北海道の各地においてみつかるとともに、可能性に期待したい。

オホーツク文化、擦文文化の土器編年を点検し、現段階におけるそれぞれの土器編年の問題点、それぞれの土器の共伴例を提示できた。また、オホーツク文化から擦文文化、擦文文化からオホーツク文化への影響を土器を素材に具体的に検討できた。さらに、擦文文化の東北地方北部への広がりについても検討した。擦文文化の土器の広がりということだけでは、東北地方でも津軽半島から日本海側に主に分布し、太平洋側に分布が少ないことがわかった。交流、交易を考えるうえで重要であろう。

本年度は、文献史学からの研究をあまり進めることができなかった。酸素同位体比年輪年代研究も可能性を示しただけで具体的な分析はできなかった。次年度以降の課題であろう。

具体的な成果物は下記のとおり。

蓑島栄紀 2022「古代アイヌ文化論」『陸奥と渡島』(角川選書)

鈴木琢也 2022「北海道へ渡った須恵器と秋田」『第11回後三年合戦沼柵公開講座(特別講演)』(横手市教育委員会)

5. 研究組織 (◎は研究代表者、○は研究副代表者)

- ◎鈴木 琢也 北海道博物館・学芸主幹
- 榊田 朋広 札幌市埋蔵文化財センター・文化財調査員
- 笹田 朋孝 愛媛大学法文学部・准教授
- 高島 孝宗 枝幸町オホーツクミュージアムえさし・館長
- 熊木 俊朗 東京大学大学院人文社会系研究科・教授
- 白杵 勲 札幌学院大学人文学部・教授
- 伊藤 武士 秋田市立秋田城歴史資料館・事務長
- 小谷地 肇 おいらせ阿光防古墳館・館長
- 亀丸由紀子 北海道博物館・学芸員
- 蓑島 栄紀 北海道大学アイヌ・先住民研究センター・准教授
- 手塚 薫 北海学園大学人文学部・教授
- 林部 均 本館研究部・教授
- 内田 順子 本館研究部・教授
- 三上 喜孝 本館研究部・教授

箱崎 真隆 本館研究部・准教授

(3) 東アジアからみた関東古墳時代開始の歴史像
2022～2024年度
(研究代表者 佐々木 憲一)

(4) 先史から近代における日朝交流史像の再構築—航海・港市・交流に生きた人びとの視点から—
2022～2024年度
(研究代表者 松田 睦彦)

1. 目的

近年、歴史認識を端緒とした日本と韓国との政治的対立が激化している。そこでの議論は、近代以降の日本による朝鮮半島の植民地支配を、日本列島と朝鮮半島との史的関係性を象徴的に示すものとみなし、国家あるいは民族を単位とした両者の葛藤が継続的に存在してきたかのような印象を与えるものである。しかし、これまで歴史学が明らかにしてきた列島と半島との関係は、そうした単純なものではない。

たとえば、弥生時代に入ると朝鮮半島各地から渡ってきた人びとによって九州北部に水田稲作や金属器が伝えられ、交流が本格化する。古墳時代に倭や古代朝鮮の諸社会（高句麗、新羅、百濟、馬韓等）が成立すると海上交通に長けた集団が交流を担い、5世紀には朝鮮半島西・南海岸で「倭系古墳」が営まれる。また、7世紀末からの日羅間の外交を契機に、9世紀には日本海沿岸に到着した新羅商人の自律的な動きが活発化する。古代末から中世初頭には高麗王朝下の朝鮮半島と九州北部・壱岐・対馬の地方官衙との交流に加えて私的な交易も行われており、これが「前期倭寇」へと接続する。14世紀に朝鮮王朝が成立すると倭寇問題は収束に向かうが、日本列島から朝鮮半島を目指す人が増加する。近世には、外国との私的な往来が禁止されるが、密貿易や密漁は行われていたと考えられ、近代に入ると外交交渉と軌を一にしながら、あるいはそれに先駆けて漁民等が朝鮮半島を目指すことになる。

すなわち、国家の成立以前から多くの人びとが対馬海峡（朝鮮海峡）を渡っており、国家の成立以降も、国家の枠にとらわれない人びと、あるいは、国家の動きと連動しながら独自の交流を試みた人びとが多く存在したことが明らかとなっているのである。もちろん、国家による公式な交流や侵略等の葛藤が日本列島と朝鮮半島、それぞれに与えた文化的・社会的影響は大きい。ただ、その陰でこれまで等閑視されてきた名もなき人びとによる交流の影響には計り知れないものがある。本研究が目指すのはこうした人びとによって紡がれた日朝交流の歴史であり、その通史的な把握である。

以上の観点から、本研究では弥生時代から近代に至るまでの日本列島と朝鮮半島との交流の歴史を、これまで考古学・文献史学・民俗学等の個別分野において積みあげられてきた研究成果の接合を図ることによって、通史的に明らかにすることを目的とする。とくに、本研究では国家や民族を単位とした交流ではなく、みづから海を渡った人びと、あるいは、そうした人びとと直接交流を持った人びとを対象とし、通史的観点からその交流の実態を描き出す。具体的には、日本列島と朝鮮半島との間を往来した人びとの交流の目的、造船や航海の技術、航路や寄港地、やり取りされた文化や技術について、時代ごとの変動や持続の様相を強く意識しながら通史的に明らかにする。

従来、日朝交流史に関する研究の成果は、時代や方法論で区切られた個別分野で発表され、その中で共有されてきたため、日本列島と朝鮮半島それぞれに生きた人びとの交流が通史的に描き出され、検討されることはなかった。本研究は、先史から近現代までを対象とする研究者を多く擁する歴博の特徴を活かすと同時に、これまで歴博が築いてきた韓国の研究機関や研究者とのネットワークを最大限活用することで、これまで細分化されていた日朝関係史を接合して総合的に把握することで、新たな日朝関係史研究のあり方を学界および社会に提示することを目指している。また、従来の日韓の歴史学における時代区分にとらわれることなく、日朝交流史独自の時代区分の設定も試みる。

2. 今年度の研究計画

異なる時代、分野のこれまでの研究成果を共有するための研究会を3回開催する。このうち、1回は日本、1回は韓国、1回はオンラインでの開催とする。対面による研究会では日朝交流にかかわる遺跡や地域の巡見も行う。巡見は、日本では瀬戸内海を、韓国では巨済島・鎮海湾沿岸部を予定している。なお、コロナ禍による渡航制限が続く場合はオンラインによる開催のみとする。

3. 今年度の研究経過

令和4年6月25日に第1回研究会をオンライン方式で開催した。最初に研究代表者の松田から共同研究員の紹介と共同研究の趣旨説明を行い、その後、各共同研究員よりこれまで取り組んできた研究の紹介と、本共同研究における研究構想についての報告が行われた。また、松田から「小さな島の近代から考える日朝関係史」と題する発表が行われた。

11月25日から28日の日程で韓国慶尚南道の南海岸における調査を実施した。金海市では、金海大成洞古墳博物館、国立金海博物館、盆山城、蓮山洞古墳群を、巨済市では永登浦倭城、長木古墳、巨済鵝洲洞1485番地遺蹟、長承浦を見学した。

令和5年3月22日から25日の日程で、古くより朝鮮半島との交流の舞台となった瀬戸内海における調査を実施した。岡山県では瀬戸内市牛窓の本蓮寺等の朝鮮通信使関連遺跡や、備前市日生の加子浦歴史文化館における朝鮮海出漁に関する展示等を見学した。また、香川県では高松市沖に浮かぶ女木島で女木丸山古墳を見学したほか、その出土遺物を高松市歴史資料館で見学した。

4. 今年度の研究成果

第1回目の研究会では、研究代表者による趣旨説明を行うことで、本共同研究の目標をあらためて共有することができた。また、各共同研究員によるこれまで取り組んできた研究の紹介が行われたことにより、本共同研究の目的である通時的な日朝交流史の把握に向けた準備も行うことができた。

11月の韓国での調査では、慶尚南道の南海岸における日朝の交流の歴史を、伽耶から近代という長い時代幅の遺跡や遺物、そして景観をとおして理解することができた。また、3月の日本での調査では、古墳時代および近世、近代における交流について、古墳や発掘遺物、朝鮮通信使の旧跡、朝鮮海出漁母村の展示等をとおして理解を深めた。

以上のような研究会や現地調査は、時代と研究手法を異にする日韓のメンバーが相互の研究を理解し、みずからの研究に反映させるための基礎的な作業となった。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- イ・チャンヒ 釜山大学校・副教授
- イ・ヨンチョル 大韓文化財研究院・院長
- オ・チャンヒョン 木浦大学校・助教授
- キム・ジョンスン 羅州市文化財チーム長
- ゴン・ヒョクチュ 民族文化遺産研究院・院長
- 荒木 和憲 九州大学・准教授
- 久留島 浩 本館研究部・特任教授
- 高田 貫太 本館研究部・教授
- 藤尾慎一郎 本館研究部・教授
- ◎松田 陸彦 本館研究部・准教授
- 三上 喜孝 本館研究部・教授

【基盤研究】

（5）日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築 2020～2022年度

（研究代表者 青木 隆浩）

1. 目的

くらしの植物苑は、1995年に開苑して、植物という生きた資料と本館展示との関わりを意識してきたが、これまで苑内の資料を全面的に意識した共同研究を立ち上げたことがなかった。1999年の「伝統の朝顔」展から始まった「季節の伝統植物」展では、九州大学の仁田坂英二氏や恵泉女学園大学名誉教授の箱田直紀氏、台東区立中央図書館の平野恵氏、日本大学の水田大輝氏など第一線の研究者から協力していただいて、最先端の研究成果を反映する展示を開催してきたが、常設展示に関しては歴博で植物苑の運営を開苑後しばらく担っていた辻誠一郎氏が東京大学に転出してから、ほぼ手付かずの状態である。

くらしの植物苑の解説プレートのいくつかは、すでに文字がほとんど読めなくなるほどに劣化しており、かつ植物の枯死や最近の研究成果を反映できていないことから、現状の植栽と合っていない状況でもある。そこで、まずはくらしの植物苑の開苑目的に基づいて、人と植物の関係史をあらためて検証し、その成果を解説プレートの改善に活かして、常設展示のリニューアルに結び付けていきたいというのが、本共同研究課題における最大の目的である。

そのために強く意識していることは、植物の利用や品種の維持に対する認識が、研究分野や時代によって大きく異なるということである。そこで、本共同研究課題では、できるだけ分野横断的であることと、時代によって植物利用のあり方を重視することに重点をおきたいと考えている。

具体的な作業としては、植物苑に植栽されている品種のリストに基づいて、これまで各分野で蓄積してきた研究成果を突き合わせていきたい。植物に関するデータベースがいくつか公開されているので、それを用いながら、植物の利用法について分野横断的な検証をおこなう。

そのうえで、人と植物の関係に基づいた解説プレートの新たな作成を検討する。現状の解説プレートは劣化が進んでいるので、いずれにしても交換が必要である。この解説プレートの作成を踏まえながら、来苑者が目的に合わせて歩けるような導線を、コンパクトなガイドブックと苑内地図の作成によって紹介したい。

また、くらしの植物苑であえて植栽していないイネや小麦などの農耕植物をどのように紹介していくか検討する。農耕植物の多くは、植物苑の土地条件によって植栽できていない。イネについては、バケツ栽培などを検討している。そして、人と植物の関係史をみていくには、本館展示とも関連した解説方法を検討する必要がある。

さらに、ヒョウタンやウリを加工した道具類や工芸品の保存と植物苑外での展示を検討していく。これによって、モノ資料と植物苑での生きた資料との関連が強化できると考えている。

2. 今年度の研究計画

これまで春と夏に研究会を開催していなかったため、令和4年度にはまずこの時期にそれぞれ研究会を開催する。また、3回目の研究会は、特別企画「季節の伝統植物」の会期外にあえて開催する。

植栽の状況確認については、未完成の部分に重点をおいて進めていきたい。現在のくらしの植物苑における植栽状況についてデータを蓄積することは、本研究会を遂行するうえで最も基本的な情報となる。それによって、現在のくらしの植物苑に足りない部分が見えてくると考えている。図譜についても引き続き調査を進めていく。これによって歴史学や民俗学、美術史学、植物学などの学際的な研究が可能になると考える。

このような基礎データの収集をもとに、共同研究員の報告によって、それぞれの専門分野である考古学、植生史学、中世史学、近世史学、近代史学、植物材料学、美術史学、雑草学、林学、分析科学といった観点から研究会全体としてどのような研究成果を出せるのか共通理解を深めていきたい。

3. 今年度の研究経過

2022年5月5日 くらしの植物苑の現状と今後についての意見を聴取したレポートの作成

2022年5月29日 第1回研究会

発表：西田 治文「自然史資料と博物館について」

平野 恵「杏雨書屋『天保の本草学—緒鞭会に見る学びのかたち』を展示して」

平野 哲也「江戸時代下野国の米作を取りまく諸環境」

2022年8月6・7日 第2回研究会

発表：工藤雄一郎「先史時代の植物利用とくらしの植物苑」

柴崎 茂光「特用林産物の利用について」

荒木 和憲「鍋島茂義の植物学」

青木 隆浩「『くらしの植物苑』のこれまでと今後の課題」

協議：くらしの植物苑改善に向けて

(意見聴取レポートからの課題・改善案の抽出)

2022年11月23日 第3回研究会

発表：岩淵 令治「江戸の園芸文化の伝播と展開」

協議：くらしの植物苑改善に向けて 2回目

2023年2月26日 第4回研究会

発表：澤田 和人「ジャポニスムの花—藤についての一試論」

協議：くらしの植物苑の巡見および植栽に関して

4. 今年度の研究成果

今年度は、くらしの植物苑の改善に向けた協議と、植物文化史に関わる研究発表との二つを主軸にして、計4回の研究会を開催した。

改善に向けた協議では、それに先立ち、共同研究者から現状と今後についての意見を聴取した。解説プレート、植物苑の構成、生育状況、畑、特別企画、栽培スタッフに関して問題点や要望が寄せられ、それらを基にして、第2回から第4回の研究会では、研究組織としての意見をまとめるために協議を重ねていった。

協議においては、植物の管理・維持について、植物へのナンバリングの必要性があげられた。また、生育状況を確認し、とくに大きく成長しすぎた植物については、定期的に手入れができるような管理体制を整備することの重要性が指摘された。なお、地盤の問題上、あまりにも高木になると倒れる恐れがあるため、材木利用（林業）は展示テーマから除外し、蔬菜や果樹を含め、広義の園芸に限定した展示にすべきという意見も出されている。

解説プレートについては、解説等にアクセスできるQRコードを示したプレートに差し替えることが提案された。外国人への対応のためにも、和名だけでなく学名を入れることが必須とされた。解説は植物を紹介するリーフレットのかたちで蓄積していき、やがてはガイドブックとしてまとめる案も出た。これを踏まえて、次年度から配布できるようにリーフレットを作成することとなった。

植物苑の構成については、現状のゾーニングが植物利用の実態に即していないことが大きな課題となった。しかしながら、それぞれの植物には利用法が複数あり明確に分けることが困難であるため、解説などソフト面で補うことが現実的との意見があがった。

次に、研究発表であるが、先史時代の植物利用、近世の園芸（本草学・花卉栽培・稲作）、近代の文化交流、現代の林業、博物館学の見地から、共同研究者に加え、組織外の協力者（平野哲也）により口頭発表がなされた。本館の展示と植物苑をつなぐ手がかりを得ること、および、分野横断的な議論を深めることを目的としている。最終年度となる本年度に集中して行ったため、改善に向けた検討には、発表内容を十分に活かされなかったことは否めない。それでも、いくつかの植物については、本館展示との関連性や、時代や地域による利用の在り方の相違について認識を新たにすることができた。

5. 全期間の研究成果

本共同研究は、くらしの植物苑の老朽化や不備等を改善すべく、リニューアルを見越して課題を設定したものである。その性格上、研究会は植物苑を実際に巡見しつつ行うことが必須となる。しかしながら、2020年度と2021年度は、新型コロナウイルス感染症の感染防止や研究代表者の体調不良により、共同研究を満足に推進することが叶わなかった。その代わりに、館内の共同研究者により、基礎データの整理に注力した。すなわち、植栽されている植物をリスト化し、植栽マップとの照合を行った。同時に、解説プレートについても一覧を作成した。結果、枯死等の現状が把握され、解説プレートにおいては、物理的な劣化だけでなく、学名の有無などの記載事項が必ずしも統一されておらず、学界の最新分類法に従った名称変更もなされていないといった問題があることが明確となった。また、本館の展示との連動を視野に入れて、既存の「近世・近代園芸コレクション」の充実をはかり、「日本植物図説 草部イ編」(H-1599-23)、「有用植物図説」(H-1599-24)、「草木性譜・有毒草木図説」(H-1599-25)の資料購入を行った。

このような研究の基礎となる作業を踏まえて、「4. 今年度の研究成果」で記したように、植物の管理・維持、解説プレート、植物苑の構成について検討を重ね、問題と対応策について一定の見解を導いた。すでに解説リーフレットの作成は軌道にのり、倒壊の危険性が高い損傷が進んだ構造物の撤去も行ったが、今後、植物苑のリニューアルが本格的に計画されたとき、そこで得られた知見は大いに役立つものとする。前述のように、研究期間中には、研究発表と植物苑および本館の展示とをつなぐための議論を十分にはつくせなかった。総合化には至らず個別の事例研究にとどまったものの、分野や時代を横断することで関連付けが強化できる示唆を得ている。

6. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- 辻 誠一郎 東京大学名誉教授
- 岩淵 令治 学習院女子大学国際文化交流学部・教授
- 工藤雄一郎 学習院女子大学国際文化交流学部・准教授
- 菅根 幸裕 千葉経済大学経済学部・教授
- 西田 治文 中央大学理工学部・教授

- 平野 恵 台東区立中央図書館・専門員
 三浦 励一 龍谷大学農学部・准教授
 黒河内葉子 東京大学大学院農学生命科学研究科・助教
 荒木 和憲 九州大学大学院人文科学研究院・准教授
 柴崎 茂光 東京大学大学院農学生命科学研究科・准教授
 日高 薫 本館研究部・教授
 村木 二郎 本館研究部・准教授
 島津 美子 本館研究部・准教授
 ○澤田 和人 本館研究部・准教授
 ◎青木 隆浩 本館研究部・准教授

(6) 家内における死者祭祀・祭具の現在とその歴史的検討：変容するモノ・家族・社会 2020～2022年度 (研究代表者 土居 浩)

1. 目的

本研究の目的は、現在も進行しつつある家内における死者祭祀の変容、ひいては家族観・死生観の変容について、従来の歴史像を再検討しつつ、新たな歴史像を提示することである。そのため、主に物質文化（モノ）へ着目した検討に取り組む。時代としては近世から現代までを射程に入れており、中軸とするのは家内に安置された仏壇（および位牌）である。仏壇は、日常的な先祖祭祀・死者祭祀の場として、人々の間に広く浸透しており、遺体・遺骨の収蔵施設である墓とは異なる性格を有する装置として、生活空間内で重要な役割を果たしてきた。近年、改めて仏壇や位牌に注目する研究が、さまざまな研究領域で単発的に散見されており、相互の知見を架橋し総合的に検討を行う。

2. 今年度の研究計画

2022年度は最終年度であり、「仏壇祭祀の展開」班、「仏壇祭祀の変容」班、「祖先祭祀の系譜」班、それぞれの立場から研究を深めていくだけでなく、各課題を相互に検討し、新たな成果としてとりまとめるものである。とくに感染状況を見据えつつも、計画されていた仏壇産地でのフィールドワークを実施し、総括に向け、調査データも含めてとりまとめていく。

まず「仏壇祭祀の展開」班は、仏壇と仏具の資料の検討による、歴史的変遷をとらえていく。とくに厨子型仏壇と戸棚式、押入式の簡易仏壇から、仏壇産業への展開および、新宗教の発展と仏壇の普及についても検討することで、現代の仏壇の状況を明らかにする。また位牌や仏具の展開についても、位牌祭祀の地域的多様性や仏具の形態の変化なども、考古学、民俗学など諸分野が連携して検討して統合的な歴史像の構築を行う。

「仏壇祭祀の変容」班は、仏壇じまいなどの状況を、移転による世代継承や、高齢者施設における仏壇祭祀の状況の調査を継続し、現代の動態を明らかにする。また仏壇リメイクや、手元供養など新たな展開にも留意する。

「祖先祭祀の系譜」班は、本共同研究によって明らかとなった仏壇祭祀の展開と変容について、関連諸研究との連携と融合を行い、死の文化の新たな位置づけを果たしていく。

3. 今年度の研究経過

2022年度も引き続き新型コロナウイルス感染症の蔓延に対応するため、研究会を前期はZoomでのリモートで開催していたが、社会全体としてやや落ち着きを取り戻した後期には感染状況に留意しつつ、対面とリモートのハイブリッドによって開催することができた。同様に調査出張も、後期には福岡県八女市における八女福岡仏壇の調査および東京での全国仏壇展示会の調査に取り組んだ。また例年に引き続き、仏壇に関する業界紙やカタログ等の資料購入もおこなった。

なお研究会に付随して行われる各種研究の打ち合わせや意見交換に代替するため、研究代表者・副代表者間のZoomによる事前打ち合わせを班員にも公開し、班員誰もが日時の都合がつけば参加可能とした。

4. 今年度の研究成果

2022年度末から開催された特集展示「亡き人と暮らす：位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗」では、本研究成果

の中間報告の意味合いも兼ね、「仏壇のかたち」「位牌の多様性と仏具」「手元供養の誕生と仏壇の行方」に整理して、仏壇に限定されない家内祭祀の実態を表現することができた。展示に対して市民・研究者はもとより、複数の業界関係者からも直接・間接の反応があった。

「仏壇祭祀の展開」班では、物質資料の検討から、仏壇・位牌・仏具の地域性を明らかにすることができた。また文献資料の検討から、近世には仏壇に資産的価値があったこと、その価値を利用した商家の取引があったことなどの実態が明らかになった。

「仏壇祭祀の変容」班は、旧来の仏壇をリメイクして世代継承している実態や、手元供養などの新たな展開が明らかになった。

「先祖祭祀の系譜」班は、生活改善運動や先祖祭祀の展開における仏壇の位置づけが多様であることが把握できた。こうした以上のような成果をもとに、報告書の作成をおこなっていくこととなった。

5. 全期間の研究成果

本研究では、まず仏壇や位牌などの研究史整理を踏まえ、班員の共通認識とした。従来、仏壇の起源についての研究がほとんどであること。実際に仏壇が庶民に浸透していったとされる近世以降の展開や、位牌等の仏具の使用状況に関してはあまり検討されていないこと。つまり近世・近代・現代における仏壇の具体的展開を解明することが研究として不可欠であるとの共通認識を得た。

そこで、仏壇の具体的展開について、物質資料に基づく地域性の検討、絵画資料に基づく近世における仏壇あるいは位牌棚の検討、文献資料に基づく近世における動産としての仏壇の資産価値の検討などが試みられ、多様な実態が明らかになった。特に位牌の地域性については、近年まで関東・関西で異なっていた形態が、生産流通の全国化により差異が消滅することが明らかになった。ミクロレベルのモノグラフ的成果としては、浄土真宗における仏壇祭祀と盆行事との関連や、民間宗教者による仏壇継承の実態が明らかにされた。また仏壇へ対する当時の眼差しも加味した考察にも取り組み、先祖祭祀論における仏壇と墓との関連性や、生活改善運動における住宅改善と仏壇の位置づけなど、当時の議論の一端が判明した。

現代における変容の実態としては、仏壇じまいや仏壇リメイクによる仏壇継承のありようとどまらず、手元供養やデジタル時代における死者の記憶と追悼のあり方などまで拡大して検討がなされた。このことは、現在そして将来における死の文化を考える上でも寄与は大きい。

以上の成果は、まず一部を特集展示「亡き人と暮らす：位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗」において公開した。また葬送儀礼コレクションとして多様な資料が収集されただけでなく、二〇二四年度には研究報告として刊行予定である。

6. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎土居 浩	ものづくり大学・教授	瓜生 大輔	東京大学・助教
大場 あや	大正大学・講師	朽木 量	千葉商科大学・教授
問芝 志保	東北大学・准教授	徳野 崇行	駒澤大学・准教授
細田 亮	はもれびクリニック・院長	村上 晶	駒澤大学・准教授
宮澤 安紀	國學院大学・研究員	○山田 慎也	本館研究部・教授
村上 紀夫	奈良大学・教授		

(7) 定期市からみた地域の生活文化の歴史と多様性に関する研究

2020～2022年度

(研究代表者 島立 理子)

1. 目的

日本各地では、資本主義経済のグローバル化や大都市への人口一極集中によって、地域社会の疲弊がおこっている。今、地域社会では、豊かな生活世界を持続的に維持する方策が求められている。その解決策は、地域のなかに自立的な生活文化（経済的、社会的、文化的な循環）をもち、地域ごとの多様性を維持することだと考える。その役割を果たしてきた1つが、市・定期市（地域の人びとが中心になりモノを売買し維持・発展させてきた場）だと予測している。

本研究では、人文系、自然史系を含む異なる専門分野の研究者が連携し、①市・定期市に通底する原理と、国と地域ごとの差異を、地域の歴史を絡めながら明らかにする。具体的な調査地として、千葉県（勝浦等）、新潟県（長岡市、新潟市）、台湾（台北市内）の3地域を設定し、各地の市と地域社会を比較する。そして、②市を持続的に

活用するのに必要な基盤を考察するために、市・定期市の運営、販売商品の内容と流通ルート、売り手と買い手の利用形態の基本的メカニズムを明らかにしつつ、市でモノを売り買いする個人に焦点をあて、個人と市との関係を明らかにする。さらに、③総合的かつ学際的な方法論を編み出すことを目的とし、市を映像として記録するだけでなく、調査者の市における調査方法そのものも映像で記録し、調査の過程を可視化することによって、新たなフィールド調査の方法を編み出す。

2. 今年度の研究計画

新型コロナウイルスの感染状況が令和3年度と大きく変わらない場合は、千葉県勝浦朝市を中心に調査・研究を実施する。

勝浦朝市については、①朝市についての基礎データの収集、②出店者と利用者との売り買いのやりとり調査、②写真・雑誌・新聞等の勝浦朝市の記述調査、③出店者の山・畑の利用調査の4つの観点から調査を実施している。令和4年度も4つの観点による調査を継続し、初年度と2年目に実施できなかった部分を補う必要がある。また、勝浦朝市の特徴を明らかにするため、新型コロナウイルスの感染状況を顧慮しながら、新潟等、他地域における定期市の調査を実施して研究報告の執筆に向けた準備をする。また、研究の成果を地域に還元する方法を検討する。

3. 今年度の研究経過

勝浦と新潟の比較のための調査が新型コロナウイルス感染症の影響等で計画通り実施できなかったため、国内の定期市をある程度数調査し比較していくという調査へ移行した。そして以下の研究会と調査を踏まえて複合的に分析し、「市」の果たす役割の変化と変化しないものなど、今後の展望も含めて分析を進めた。

【研究会】

- 10月4日（火）10時～12時、オンライン開催、4名参加
- 「今年度の調査実績/調査のまとめと今後の展望」島立理子
- 「調査報告と今後の展望」川村清志
- 「収集データについてと調査中気づいたこと」小田島高之

【現地調査】

- 千葉県勝浦朝市（4月24日：2名参加、5月29日：1名参加、8月12日：2名参加、9月22日：3名参加）
- 長崎県佐世保市の早岐茶市（5月8日：3名参加）
- 千葉県船橋市港の朝市（5月21日：3名参加）
- 新潟県加茂市の六斎市（6月19日：3名参加）
- 新潟県新潟市の葛塚朝市（8月25日：2名参加）
- 新潟県新潟市の新津一・六市（8月26日：2名参加）
- 秋田県南秋田郡の五城目朝市（10月7日：2名参加）
- 千葉県市川市の葛飾ニューボロイチ（10月8日：2名参加）
- 石川県輪島市の朝市（10月23日・1月7日：2名参加）
- 高知県高知市の土佐の朝市（11月19日～20日：3名参加）
- 秋田県増田町の朝市（12月1日～2日：2名参加）
- 山形県山形市の初市（1月9日～10日：2名参加）

4. 今年度の研究成果

- ①初年度に構築した朝市の運営組織との協力関係により、2年目に引き続き出店状況や商品を記録した数年分の紙資料の提供を受けてデジタル化と分析を進めることができた。
- ②勝浦と新潟の比較のための調査が新型コロナウイルス感染症の影響等で計画通り実施できなかったため、国内の定期市をある程度数調査し比較していくという調査へ移行した。その結果、以下のことが明らかになった。
 - 各地の定期市を調査してみると、それぞれ特徴があり、伝統的な市は規模の縮小が著しいことがわかった（例：勝浦朝市、新津の朝市など）。
 - そのような中で、市の生き残りをかけて新たな取り組みをしている市も見受けられる（例：勝浦朝市、五城目定期市、呼子朝市、葛塚朝市）。
 - 一方で、新しい朝市が生まれ、人々で賑わっている（例：船橋港の朝市）。
 - モノがあふれ、人と人の関係が希薄になってきている現在において、売り手、買い手ともに、モノを介したコ

コミュニケーションを求めていることがわかった。

- ③一般向けの研究成果の還元として、研究成果をとりまとめたブックレット『定期市を歩く—定期市からみた生活文化の歴史と多様性に関する研究—』まとめた。

5. 全期間の研究成果

- ①千葉県立中央博物館所蔵の関連写真コレクション（林辰雄氏・吉野章郎氏撮影、合計3,055点）のデジタル化を進め、勝浦朝市の運営組織の協力のもと、勝浦朝市に関わる写真30点を選択して、かつうら商店（勝浦市観光協会のアンテナショップ）にて写真パネル展示「教えてください 朝市のこと」（2021年3月11日～23日、好評につき5月25日まで延長。主催：国立歴史民俗博物館・千葉県立中央博物館、協力：一般社団法人 勝浦市観光協会、後援：勝浦市）を開催した。展示を見た人が撮影場所や思い出などを付箋で掲示できるような工夫をした。
- ②初年度の写真パネル展示の際、勝浦朝市関係者から提供をうけた勝浦朝市に関する写真のほか、千葉県立中央博物館が所蔵する勝浦の生活文化に関する写真から30点選択し、第2回目の写真パネル展示「教えてください 勝浦と朝市のこと」を開催して（会期：2021年7月15日（木）～8月31日（火）、主催：一般社団法人 勝浦市観光協会、国立歴史民俗博物館、千葉県立中央博物館）した。
- ③勝浦朝市の運営組織との協力関係の構築により、出店状況や商品を記録した数年分の紙資料（計892枚）の提供を受け、共同研究2年目～3年目にデジタル化を行い分析を進めることができた。
- ④当初の計画では、勝浦・新潟・台湾を比較研究する計画だったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、日本国内の定期市をある程度の数、調査して比較する計画に変更した。それにより明らかになったことは上述の「4. 今年度の研究成果」に示したほか、調査の成果としてブックレット『定期市を歩く—定期市からみた生活文化の歴史と多様性に関する研究—』をまとめた。

6. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- 梅崎 昌裕 東京大学大学院医学系研究科 国際保健学専攻 人類生態学講座・教授
 大久保 悟 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構・農業環境変動研究センター・ユニット長
 黄 貞燕 國立臺北藝術大學 博物館研究所・副教授兼所長
 小田島高之 千葉県立中央博物館・生態・環境研究部長
 柴崎 茂光 東京大学大学院農学生命科学研究科 森林科学専攻森林資源環境科学講座・准教授
 西内 李佳 千葉県立中央博物館・生態学・環境研究科・研究員
 水野 大樹 千葉県立中央博物館・企画調整課・副主査
 川村 清志 本館研部・准教授
 ○内田 順子 本館研部・教授
 ◎島立 理子 千葉県立中央博物館・企画調整課長

（8）秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究

2021～2023年度

（研究代表者 下田 誠）

1. 目的

本研究は、中国秦漢時期の文字使用をめぐる人間活動を対象として、歴史資料の研究資源化・高度情報化を目的とする学際的研究である。東アジア歴史空間でひろく共有された、文書行政による社会運営システムの源流を探究する試みである。

中国では、戦国時期から秦漢時期にかけて官僚制の形成に伴い文書行政が発達した。それを支えたのは書写材料としての木簡・竹簡（あわせて簡牘と呼ぶ）と印である。秦漢時期の中国では、皇帝以下地方の下級役人まで、諸官が印を文書行政に使用していた。中国古代史の解明では、出土数や情報量の多い簡牘に注目が集まり、出土数の限られる封泥への注目は少ない。しかし、当時の中国社会を支えた文書行政システムを総体としてとらえるためには、簡牘と印・封泥を含めて、文字を使用するさまざまな局面での人々の行為・所作をトータルに復元する必要がある。歴史総合展示第1室「先史・古代」で竹簡と共に筆や削刀、印や封泥を展示するように、こうした視点で秦漢時代社会をとらえることが本研究の目的である。

日本では、漢と交渉した弥生時代以降、木簡を使用した7世紀後半にも、封泥は存在していない。簡牘の日中比較研究はさかんであるが、存在しない封泥への関心は薄い。古代日本の交渉対象、あるいは行政システムの源流と

して中国を評価するには、日本に直接結びつくもの、日本にも存在するものだけでは不十分であり、本研究が取組む「総体としての文字使用環境」と比較してこそ、弥生時代の日中交渉や日本古代の簡牘システムを相対的に評価することが可能になる。本研究は封泥を中心にして、秦漢時代の文字使用をめぐる人間の活動や身体所作をトータルに復元することを、第1の目的とする。

印と封泥は、秦漢国家の管理・運営のシステムを象徴するモノである。本研究では、戦国末秦・統一秦期の封泥を対象として、封泥を用いた新たな情報・物資伝達システムの確立と実態を検討する。秦封泥の解明は、文書行政システムの端緒を明らかにし、その研究意義は大きい。同封泥に対する歴史学的分析、考古学的分析、理化学的分析を統合することによって、文書行政システムが帝国中国の全領域で確立してゆくプロセスを解明する。これが本研究の第2の目的である。

本研究は「文字使用」のツールにかかる議論を集約し「文字を使う環境」を総合的に復元・検討し、「文字使用をめぐる学際的研究」のモデルを提示する。それは、日本をはじめ、簡牘を利用した東アジア各地の古代史を評価する上でも有益な視点が提示できると考える。

2. 今年度の研究計画

本研究は、秦封泥の形態情報の精査と理化学的分析の展開と、秦漢時代の封泥の歴史学的評価をもって推進する。日本国内所蔵の秦封泥の精査をおこない、形態・文字情報を検討することと（封泥形態論）、封泥を中心として文字使用環境を体系的に復元すること（封泥システム論）の二つの方向性で推進する。

資料の基礎分析は、観峰館所蔵の秦封泥を中心に進める。年度前半は、前年度より借用した資料を対象に、館内での調査・分析及び東北大でのX-CTスキャン装置を利用した調査をおこなう。年度後半は、同資料を返却して新たに資料を借用し、同様の調査・分析を行う予定である。

封泥形態論については、使用痕跡情報をもとに、押印所作の復元と類型化を進める。令和5年度に予定している再現文化財製作工房と連携した模擬実験の展開に向け、理解モデルを検証する準備を進める。また、封泥の材質分析及び封泥匣の材質推定をおこない、利用素材の視点でも封泥の評価をおこなう。可能な範囲で、蛍光X線分析及び電子顕微鏡を利用した材質分析をおこなう。

封泥システム論では、封泥を利用した社会システムを復元することに主眼を置く。1年目には共同研究員のこれまでの研究成果とそれとのかかわりから秦封泥への着眼点を共有してきたが、文字使用の場での簡牘と封泥との関係、封泥出土遺蹟（地点）の評価、出土資料としての刀筆・簡牘・印章・封泥との相互関係、封泥（印章）文字情報に基づいた歴史地理環境の復元といった課題に順次、論点を深めていく。

3回の研究会を通じて、新規取得情報を共有し、論点ごとに検討を進める予定である。

3. 今年度の研究経過

○第1回研究会（2022年6月24日 オンライン開催）

鶴間和幸「秦始皇帝の時代の県の考証—県丞印封泥・簡牘・陶紋資料より—」

下田 誠「秦封泥研究の近年の進展と課題—その中間報告—」

○X-CT装置を利用した分析（2022年7月11～13日、25～27日、8月2～4日 於東北大学）

分析・方法論の模索を目的として、東北大学学術資源公開センター（総合学術博物館）にて、高分解脳CTスキャンシステムを利用し、秦漢封泥の調査をおこなった。

○第2回研究会（2022年11月6・7日 於歴博／オンライン併用）

松村 一徳「秦封泥出土地点を読み解く」

瀬川 敬也「観峰館蔵封泥に関する所見Ⅱ」

上野 祥史「内部透過情報からみた封泥の検討」

青木 俊介「漢代の令・長印断代に関する一考察」

高村 武幸「秦漢官府の公文書処理件数と時間帯—官印使用の時間の検討—」

初山 明「封じることと送ること—秦封泥と検との関係についての試論—」

観峰館所蔵資料の検討

○第3回研究会（2022年3月25日 於歴博／オンライン併用）

箱崎 真隆・上野 祥史「封泥の木質情報（1）」

島津 美子・上野 祥史「理化学分析を複合した封泥のライフヒストリー復元（1）」

谷 豊信「秦封泥から漢封泥へ（中間報告）」

4. 今年度の研究成果

形態論とシステム論を両輪として、「文字使用環境」の体系的検討視点の確立がおこなえた。封泥という共通の音資料を対象としつつ、議論は4つの方向で相互に関連をもちつつ進行した。第1は印面や印字に着目した検討で、鶴間報告や下田報告では、行政系統や歴史地理空間の復元、あるいは物資流通の一面への接近が図られ、歴史地理情報に对照した封泥資料の活用が展望された。第2は封泥の形態に関する検討で、松村報告、瀬川報告、上野報告、谷報告がそれに該当するが、検討は二つの方向性を以て進行した。一つは、松村報告や谷報告でなされた印字や封泥の形態から時間指標を抽出する分類・編年の検討であり、今一つは、瀬川報告や上野報告でなされた封泥の諸痕跡から押印所作を復元する取組みである。第3は、封泥の形態と関連した、理化学分析であり、箱崎・上野報告や島津・上野報告では、封泥に残る圧痕から使用された木質系の材の推定や、鉱物・土質の視点での分析が実践された。第4は、捺印の所作を集約してとらえるもので、青木報告、高村報告、初山報告では、出土文字資料と典籍文献をもとに、幅広い社会階層を対象にした捺印の所作が多角的に復元・展望された。

第1の論点では、鶴間報告が、史書と簡牘、封泥、陶文資料とを対照し、秦代に実在した県の推定を試みた。体系的記述を欠き、実態の不明な秦代の郡県について、同時代の各種文字資料を交差させて、秦代の歴史地理空間の実態へと接近した。下田報告は、河北北部・遼寧西部と山東南部・江蘇の二つの空間を対象に、秦代の県の所在比定に取組んだ。

第2の論点では、下田報告が封泥の研究史を回顧し、本研究での取組みを学史的に位置づけようと試みた。分析視点が深化し、検討項目が変容する過程を客観的にとらえた。松村報告は、出土資料の一括性をふまえ、封泥文字の形態分類をおこない、戦国秦から前漢前半までを数期に区分する文字編年を提起した。瀬川報告は、観峰館蔵の封泥を対象に、遺存形状の共通性に着眼し、受領後の所作に注目した。受領後の封泥の扱いに注目することの重要性を指摘する。上野報告では、観峰館蔵の封泥に対するX-CTスキャン装置を利用した調査を報告し、内部透過情報に基づいて、物品の梱包や封泥の固定にかかわる所作の分類や復元に取り組んだ。また、封泥の復元実験を報告し、内部透過情報(X-CT画像)を利用した実物資料との対比をおこなった。谷報告では、東京国立博物館が所蔵する封泥の内部透過情報(X-CT画像)をふまえ、秦漢時代を通じた封泥の変遷について予察をおこなった。田字格の終焉時期及び漢代以後の封泥の構造的特徴を提起し、観峰館蔵封泥への比較評価視点を整えた。

第3の論点では、箱崎・上野報告が、封泥裏面に転写された木質の痕跡に注目し、繊維情報に基づいて、樹種や利用部位の推定をこころみ、内部透過情報(X-CT画像)を利用して付け札の形状を復元し、木材の加工、利用という視点で、封泥を検討する素地を整えた。島津・上野報告は、内部透過情報(X-CT画像)に基づき、封泥の土質情報の検討をおこない、封泥を添える物品の形状をも検討した。土(泥)の準備、物品への塗布、土(泥)の成形と、捺印(押印)という一連のプロセスを、理化学的所見を交えて復元することに取組んだ。

第4の論点では、青木報告が、令長印の封泥が秦封泥に少ないことへ注目し、簡牘での表記や印章の出土資料を対照して、令長印が登場する時期を予見した。高村報告は、公文書の発信における官印捺印の主体者、捺印の実態を解明すべく、簡牘資料にみる捺印の時間帯、公文書の発送による捺印の頻度を整理した。初山報告は、文書や物品の通送において、封緘や捺印が進行するプロセスを簡牘資料の記述と出土資料を対照して検討し、封泥(封緘・捺印)に伴う検・署・徴の考証をおこなった。

各報告を通じて、個別の論点は深化しており、かつ視座を横断・連結した検討も進行している。なお、第2回研究会にて、観峰館蔵の封泥を実見し、相互に討議できたことの意義は大きい。共同研究員が資料や知見を共有したことは、各分担課題への還元だけでなく、それぞれに新たな分析視点を創出させる機会ともなった。形態論とシステム論を交差した、秦漢時代の文字使用をめぐる環境の体系的な復元は、着実に実現しつつあるとみている。

5. 全期間の研究成果

今年度は第2年度であり、各分担課題の実践と深化、議論の共有という当該年度に予定しているC初の目的は概ね果たせた。また、X-CT装置を利用した内部情報を含めた封泥の理化学分析は、対象資料の大半が今年度のうちに調査を実施することができ、その情報を活用した研究も展開することができた。

2023年度は、議論・検討の深化、研究成果の集約と公開を中心に展開する予定であり、研究は概ね予定通りに進行していると認識している。

6. 研究組織 (◎は研究代表者、○は研究副代表者)

青木 俊介 (清泉女子大学)
島津 美子 (本館研究部)
瀬川 敬也 (観峰館)

- 高村 武幸（明治大学文学部）
 谷 豊信（東京国立博物館）
 鶴間 和幸（学習院大学文学部）
 箱崎 真隆（本館研究部）
 松村 一徳（シールロード研究所）
 粕山 明（東洋文庫）
 ◎下田 誠（東京学芸大学次世代教育研究センター）
 ○上野 祥史（本館研究部）
 （五十音順）

（9）映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究—制作とアーカイブスの実践的方法論の検討 2021～2023年度 （研究代表者 村上 忠喜）

1. 目的

本研究の全体構想は、ここ20年あまりの間に全国で作成されてきた民俗文化財記録映像の成果を検証することを通して、「民俗を記録する」という営為、換言すれば「映像による民俗誌作成」とは何かを検討することを第一の目的とする。

民俗文化財の記録映像の方法論の検討は、関西の民俗文化財担当者や東京文化財研究所などが中心となって進められ、①普及啓発、②伝承支援、③民俗文化財を含む地域総体の記録の、大きく3つの目的に沿って作成すべきであるという結論に達し、その方法論が検討されてきた。しかしながらこの3つの中で方法的な検討がほぼ手付かずのまま放置されているのが、③民俗文化財を含む地域総体の記録のあり方の検討である。

そこで本共同研究において③に関しての検討を進めることで、ここ20年ほどかけて進められてきた民俗文化財記録映像を総合的に活用し、その成果の共有と議論の場を創出し、映像を使った新しい民俗誌を叙述する試みの検討を行う。同時に、世界的にも先端的であることは間違いない日本の民俗文化の記録映像作成の方法等を、海外の研究者や担当者と共有する場を最終年次に設けて、民俗学の国際化に貢献することを企画する。

具体的な手法としては、本研究会開始後のなるべく早い時期に、歴博内に、各地で作成された民俗文化財記録映像のアーカイブ・公開サイトを立ちあげるところからはじめる予定である。このサイトは、これはこれまで歴博が培ってきた全国の博物館との協力体制、関係性に加えて、文化財行政部局の民俗担当部門で働く行政内研究者との関係性の構築に資することは間違いない。

2. 今年度の研究計画

- （1）年間3回から4回の研究会を実施する
- （2）9月には本研究の大きなテーマとなる「HD型の映像記録」について、これまでの実施事例に基づいた報告を基盤とした総合的なシンポジウムを開催する。
- （3）歴博の民俗研究映像を事例として現地調査を実施する。

3. 今年度の研究経過

- ①2022年7月6日（水）「黒島民俗誌」再検証研究会 参加人数：17名（内11名オンライン）趣旨説明等：川村清志／民俗誌映像視聴「黒島民俗誌」（監督、篠原徹、菅豊1992年製作）コメント：梅屋潔、川村清志
- ②2022年9月10日（土）11日（日）両日とも9：00-17：30 両日にわたりHD型の映像記録作成の当事者8名を招いての研究会を開催し、それぞれに本研究会メンバーがコメントを加え、最後にディスカッションを行い、HD型の映像記録作成の評価・課題について理解を進めた（参加人数：28名（内4名オンライン））。

4. 今年度の研究成果

- ・2022年7月6日、篠原徹（国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学名誉教授、滋賀県立琵琶湖博物館前館長）が1990年代に3年間の調査に基づき撮影された沖縄県黒島の民俗誌映像とその背景を語ってもらい、研究者による民俗誌映像の作成について議論を交わした。この日は、副代表の川村が主催する科学研究費による研究会と合同で行い、本研究会共同研究員の梅屋潔によるコメントをへて、映像の課題と可能性について討論を行なった。

また、内田順子からは、本作品の撮影過程で撮られた膨大な未編集映像の存在が紹介され、継続的な検討を行うこととした。

- ・2022年9月10日（土）11日（日）の両日、HD型の映像記録作成の当事者8名を招いての研究会を開催し、それぞれに本研究会メンバーがコメントを加え、最後にディスカッションを行い、HD型の映像記録作成の評価・課題について理解を進めた。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

館外

今石みぎわ 東京文化財研究所・主任研究員
 梅屋 潔 神戸大学大学院国際文化学研究科教授
 久保田裕道 東京文化財研究所・無形民俗文化財研究室長
 小林 稔 國學院大學研究開発推進機構・教授
 関 孝夫 上尾市教育委員会学校教育部・参事兼次長
 東城 義則 立命館大学OIC総合研究機構・客員研究員
 俵木 悟 成城大学文芸学部・教授
 政岡 伸洋 東北学院大学文学部・教授
 ◎村上 忠喜 京都産業大学文化学部・教授
 森本 仙介 奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課・主査

館内

内田 順子 国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系・教授
 ○川村 清志 国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系・准教授
 後藤 真 国立歴史民俗博物館研究部研究部・准教授

(10) 近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究 2022～2024年度 (研究代表者 田中 祐介)

1. 目的

本研究では近世末期から近代にかけての日本およびアジア隣国で綴られた日記、手紙、作文、自伝などの個人文書（エゴ・ドキュメント）を題材に、有名無名の人々の書き綴る営みから歴史を描く可能性を探り、その方法論を練磨するとともに、発展的な研究を見据えた学際的・国際的な体制の基盤を構築することを目的とする。

近年、個人文書の総称であるエゴ・ドキュメントの名称を冠した研究が登場し、構築主義的な「自己」の語りの分析を通じて歴史を理解する機運が高まっている。本研究では先行研究の知見を踏まえながら、①個人文書の「自己語り」の内容（史料としての側面）、②「自己語り」の生成過程や習慣化・制度化（行為としての側面）、③綴る媒体の生産・流通・消費および商品化による多様性（モノとしての側面）の三点の視座から個人文書にアプローチする。

近代日本の「自己語り」の制度を浮き彫りにするためには、その成立過程や伝播の様態を考察する作業が不可欠である。本研究では、近世から近代への移行期に綴られた個人文書の分析を通じて、近代との連続および断絶を検証する。加えて視野を東アジアに広げ、朝鮮、台湾や旧満洲国の事例と比較するとともに、植民地時代に支配者の言語を用い、時に複数言語で綴る「自己語り」の意味を問う。

上述の主題を追求するために、本研究では歴史学および文学研究の方法論を中核に、教育史学、思想史学、メディア史学、社会学、文化人類学の知見も援用した学際的な研究体制を整備する。加えて個人文書研究を推進する韓国・台湾の研究機関と連携し、将来的な協働を推進するための国際的な研究体制の基盤を構築する。連携を図る中で、国内外のエゴ・ドキュメント研究および個人文書のアーカイブ化の進展に関する情報を共有し、継続的に更新できるようなネットワークングをおこなう。総括的に言えば、歴史の中の個人を見つめると同時に、個人が紡ぐ歴史の姿に迫ることを通じて、書記文化史の観点から日本を基軸として東アジアの近代経験を問い直すことが本研究の最大の狙いである。

2. 今年度の研究計画

共同研究員、研究協力者とともに、活動母体となる研究会を組織し、各々の関心に基づく研究発表をおこなう。

以後は3～4か月に一度の頻度で開催し、報告と討議を通じて、本研究の主題に基づく新たな研究成果を共有する。発表会場は国立歴史民俗博物館を基本とするが、主題により、「近代日本の日記文化と自己表象」研究会との共催とする。研究会活動と並行し、国立歴史民俗博物館が所蔵する日記資料（例：戦時下の少女の日記）の翻刻および読み解きを進める。加えて、本計画の遂行に関わる国内機関の個人文書を調査蒐集し、翻刻と読解を進める新たな小班を設け、研究活動を促進する一助とする。加えて国際的な連携をはかるべく、個人資料の蒐集に取り組み韓国・台湾の研究機関を訪問し、シンポジウムの開催等を通じて学術交流を深める。

3. 今年度の研究経過

令和4年6月5日(日)の13:00より18:00まで、第1回研究会をオンライン開催(Zoom利用)し、計13名が参加した。研究報告は2本であり、田中祐介(明治学院大学専任講師・国立歴史民俗博物館客員准教授)による「『日記文化』研究をエゴ・ドキュメント研究に接続する」では、田中が従来取り組んできた『日記文化』研究を踏まえ、日記より広義の「エゴ・ドキュメント」を分析するための研究視座が提示されるとともに、個人文書の総称である「エゴ・ドキュメント」の語の妥当性と留意点に関する分析がなされた。三上喜孝(国立歴史民俗博物館教授)による「サイパンで戦死した日本兵の手帳をめぐって」では、断片化された文字情報を含む資料から、何をどう手がかりにすれば内容理解を深め、書き手について知ることができるかについて報告がなされた。初回研究会であったため、各自の自己紹介や今後の研究計画に関する協議をおこなった。

9月15日(木)の10:30より18:00まで、国立歴史民俗博物館の第二研修室にて、第2回研究会をハイブリッド開催した。対面参加が6名、オンライン参加が9名(うち、プロジェクト外からの参加2名)、計15名にての開催となった。研究報告は3本であり、柿本真代(京都華頂大学准教授)による「明治期の子どもの日記—商品化と流通」では、子供用の日記帳出版の展開が後づけされるとともに、紙面の枠組みや掃討された利用法が分析された。樋浦郷子(国立歴史民俗博物館准教授)による「植民地期朝鮮における一地方の初等後教育実態—「載寧商業学校」生徒の日記を読む—」では、教育機関の選択肢がない植民地下の地域において、生徒がどう日記を綴ったかという問いが探求された。研究協力者として招聘した高森順子(阪神大震災を記録しつづける会)事務局長・国際芸術祭「あいち2022」ラーニングコーディネーター)による「『誤配』を呼び込むメディアとしての手記集—「阪神大震災を記録しつづける会」25年の実践を紐解く—」では、「阪神大震災を記録しつづける会」の事務局長として災害経験に基づく手記集発行の活動を長年継続してきた高森氏の活動概要が紹介されるとともに、反省的な自己語りにより過去を再構成する手記という表現形式の特徴について分析がなされた。3本の研究報告のうち、韓国への調査出張の実現時期について意見が交わされた。

第3回研究会を、「近代日本の日記文化と自己表象」研究会との共催で、2022年12月10日に明治学院大学で開催した。この回は、東アジアのエゴドキュメント研究の現状をテーマとし、金貞雲「1799年の伝染病の大流行と個人の記憶 柳懿陸(1785~1833)の『河窩日録』を中心に」(通訳:魯洙彬),王羽萌(RA)「中国におけるエゴ・ドキュメントの研究動向について」の2本の報告を得た。

2023年2月21日(火)~24日(金)に、韓国において資料調査を行った。参加者は、金貞雲、宋恵媛、橋本繁、樋浦郷子、横山百合子、田中祐介で、調査先は、安東市の韓国国学振興院と、醴泉博物館である。いずれも朝鮮時代の日記資料を閲覧し、意見交換を行った。

第4回研究会を、2023年2月27日に行った。吉岡拓「明治初年生まれの子供の日記について」、宋恵媛「エゴドキュメントの可能性: 在日朝鮮人一世女性の場合」の2本の報告を得た。

4. 今年度の研究成果

- ・田中祐介編『無数のひとりが紡ぐ歴史: 日記文化から近現代日本を照射する』(文学通信, 2022年6月)
- ・和田敦彦編『職業作家の生活と出版環境 日記資料から研究方法を拓く』(文学通信, 2022年6月)に、共同研究員の田中祐介、河内聡子が執筆。

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

柿本 真代 京都華頂大学・准教授
 河内 聡子 東北工業大学・講師
 高 媛 駒澤大学・教授
 金 貞雲 韓国国立慶北大学校・専任研究員
 宋 恵媛 大阪公立大学・准教授
 徳山 倫子 京都大学・研究員

- 橋本 繁 韓国国立慶北大学校・HK研究教授
 吉岡 拓 明治学院大学・准教授
 横山百合子 国立歴史民俗博物館・名誉教授
 ◎田中 祐介 明治学院大学・専任講師
 樋浦 郷子 国立歴史民俗博物館・准教授
 ○三上 喜孝 国立歴史民俗博物館・教授

(11) 中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究 2022～2024年度 (研究代表者 田中 大喜)

1. 目的

本研究は、中世の文献資料上に「宿」・「津」・「湊」・「泊」といった言葉で現れる、地域社会において恒常的な物流が行われた集散地を都市と把握し、その存立と機能のあり方を具体的に明らかにすることを目的とする。地方に成立したこれらの中小都市は、相互に結びつくことで流通ネットワークを形成し、12～15世紀においては荘園領主が集住する京都や鎌倉への求心的な流通構造をともなう荘園制という社会体制を、16世紀においては地域国家の様相を呈した大名の領国体制を下支えした。したがって、地方の中小都市は中世社会のなかで一貫して大きな位置を占めていたといえ、その存立と機能の究明は中世社会の実態と構造の解明にも直結する重要な課題となる。

都市は単独では存立できない。規模や役割の異なる都市が水陸の交通路によって結びつけられ、単独の都市としては不足する機能を相互に補完する形で、都市のネットワークを形成することで存立しえたのである。そこで本研究では、地域社会に形成された都市ネットワークの実態を追究することで、地方都市の存立の様相を究明する。その際、留意すべきは、そこには近郊の村落も組み込まれたという事実である。

そもそも都市自体、村落と未分化だったと指摘されている。すなわち、地方都市の住人には近郊村落の百姓を兼ねる者がいた。また、地方都市は、近郊村落の百姓にとって交易の場であるとともに、労働力の提供＝稼ぎの場、情報収集の場、そして逃亡（抵抗）の場でもあった。先行研究が明らかにしてきた、このような都市と村落との有機的な結びつき＝共存・補完関係にも留意して、地方都市の存立の様相を究明する。そして、この作業を通して、地域社会における都市の機能についても、民衆の生活実態と関わらせながら明らかにする。

なお、地方都市の多くは、その地域の領主層の開発によって成立し、その交易機能は領主権力による「平和」保障のもとで維持された。地方都市の存立と持続には領主の介在も不可欠だったのであり、都市と領主権力との関係も本研究の重要な課題となる。戦国期になると、領主（大名）は先行する地方都市に寄生する形で城下を形成することが知られており、この課題は戦国期城下も射程に入れて進めたい。

本研究では、以上の課題を、文献・考古両資料と先行研究の蓄積に恵まれた東国と西国の具体的な地域の事例に即して追究する。すなわち、東国では上野国世良田宿を、西国では安芸国沼田市をフィールドに設定し、①中世の文献・考古両資料の精査による基礎データの収集・分析、②近世・近代資料（地誌・絵図等）の精査と現地調査による地理的景観の復元および領主拠点との関係の分析を行い、①・②の成果の総合化によって目的にアプローチする。

2. 今年度の研究計画

(1) 研究会

- ①国立歴史民俗博物館で研究会を開催し、本研究の目的と計画を田中が説明する。また、中世都市研究の現状と課題について三枝が、都市と領主権力に関する論点について中島が報告する。
- ②広島県三原市で研究会を開催し、本研究参加者全員で沼田市故地を踏査する。また、沼田市とこれを開発した小早川氏に関わる研究の到達点について鈴木が報告する。

(2) 調査

- ①天野・荒木・田中が担当者となって沼田市に関わる中世・近世・近代の文献資料を収集・精査する。
- ②松田・田中・土山が担当者となって①の情報を手がかりに現地調査を実施し、沼田市の地理的景観の復元および領主拠点との関係の分析に必要な情報を収集する。
- ③小野・佐々木・鈴木・村木・池谷初恵（研究協力者・中世考古学）が担当者となって、沼田市と沼田荘内集落および小早川氏城館の出土遺物を調査し、基礎データを収集する。

3. 今年度の研究経過

(1) 研究会

- ①第1回研究会（国立歴史民俗博物館，8月24日）
 - 田中 大喜「共同研究の課題と計画」
 - 土山 祐之「地域総合調査の成果保管・公開と意義」
 - 鈴木 康之「安芸国沼田荘について—近年の調査研究から—」
 - 村木 二郎「沼田荘と『兵庫北関入船納帳』」
- ②第2回研究会（広島県福山市・尾道市・三原市，11月4日～6日）
 - 三枝 暁子「中世都市史研究の成果と課題—地方都市の位置づけをめぐる—」
 - 尾道・生口島・沼田荘故地の踏査
- ③第3回研究会（国立歴史民俗博物館，3月14日）
 - 神野 祐太（研究協力者・日本彫刻史）「三原の仏像と仮面—土肥氏関係寺院を中心に—」
 - 土山 祐之「沼田荘開発過程についての一試論—水利灌漑・聞き取り調査成果から—」

(2) 調査

- ①第1回現地調査（7月5日～7日，広島県三原市）
 - 沼田荘故地の巡見と調査打ち合わせ
- ②第2回現地調査（9月8日～10日，広島県三原市）
 - 沼田荘沼田本郷故地の水利調査と聞き取り調査
- ③第1回出土遺物調査（9月13日～15日，広島県立歴史博物館）
 - 草戸千軒町遺跡の出土遺物調査
- ④第3回現地調査（9月29日～10月1日，広島県三原市）
 - 沼田荘沼田本郷故地の水利調査と聞き取り調査
- ⑤第4回現地調査（12月8日～10日，広島県三原市）
 - 沼田荘沼田本郷・真良郷故地の水利調査と聞き取り調査
- ⑥第2回出土遺物調査（12月10日～12日，広島県立歴史博物館）
 - 草戸千軒町遺跡の出土遺物調査
- ⑦第5回現地調査（1月19日～21日，広島県三原市）
 - 沼田荘沼田本郷・真良郷故地の水利調査と聞き取り調査
- ⑧第6回現地調査（3月8日～10日）
 - 沼田荘沼田本郷・船木郷故地の水利調査と聞き取り調査，橋神社文書の調査
- ⑧第7回現地調査（3月18日～20日，広島県三原市）
 - 沼田荘船木郷故地の水利調査と聞き取り調査，橋神社文書の調査，米山寺・橋神社所蔵仏神像の調査
- ⑩第3回出土遺物調査（3月19日～21日，広島県立歴史博物館）
 - 草戸千軒町遺跡の出土遺物調査

4. 今年度の研究成果

今年度を実施した現地調査の中間報告会として，2023年3月19日に本郷生涯学習センター多目的ホールにて，市民を対象としたシンポジウム「中世沼田荘を解き明かす—現地調査中間報告—」を三原市教育委員会とともに開催し，調査成果の市民への還元を行った。内容は以下の通りである。

- 時元 省二（三原市教育委員会）「沼田荘の遺跡—城・館・市場—」
- 神野 祐太「三原の仏像と仮面—土肥氏関連寺院を中心に—」
- 土山 祐之「現代の水利灌漑から中世景観を探る」
- 田中 大喜「沼田小早川氏の本拠を探る」

5. 研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

- 荒木 和憲 九州大学大学院人文科学研究院・准教授
- 小野 正敏 本館・名誉教授
- 佐々木健策 小田原市文化財課・係長
- 鈴木 康之 県立広島大学地域創生学部・教授
- 中島 圭一 慶應義塾大学文学部・教授

- 三枝 暁子 東京大学大学院人文社会系研究科・准教授
 天野 真志 本館研究部・准教授
 土山 祐之 本館研究部・プロジェクト研究員
 松田 陸彦 本館研究部・准教授
 ○村木 二郎 本館研究部・准教授
 ◎田中 大喜 本館研究部・准教授

(12) 『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究 2020～2022年度 (研究代表者 家永 遵嗣)

1. 目的

本研究の目的は、国立歴史民俗博物館所蔵『広橋家旧蔵記録文書典籍類』の全体像を歴代当主の伝記を軸として整理して提示するとともに、包含史料それぞれの価値を提示し、本史料群を用いた研究の多様化と活発化を促すことにある。具体的には、当該史料群に含まれる日記・公務関係文書・先例調査文献を、歴代当主それぞれの経歴と結びつけて位置づけ、その全体像をイエの歴史として整理して提示する。さらに、近年試みられている業務書類や故実研究典籍についての研究方法を適用し、これら史料群の内容とその価値を解明・紹介することを通じて、本史料群を用いた研究の多様化と活発化を促す。また、近代における史料の整理・補修によって当該史料群の現状が如何に形成されたのか、についても示す。あわせて、広橋家に関する史料に関わる研究文献を調査し、研究文献目録を作成して活用の一助とする。

2. 今年度の研究計画

史料架蔵機関の公開状況が改善すること、共同研究員の調査出張が可能になることが、プロジェクト業務の本格的な展開にとって重要な条件になる。とはいえ、共同研究員は当該史料群の調査についての長年の実績を有しており、研究交流による視野の拡張や観点の発見により大きな成果が得られると見込まれる。

今年度も引き続き、歴代各当主の伝記的研究と、各代において注目すべき個別史料、朝廷財務など特定分野についての通史的研究という観点で、共同研究員およびプロジェクト外の研究者を招待して研究報告を進める。これらの方々に『研究報告』への寄稿を依頼していく予定である。『研究報告』が歴代の伝記を通観する手引きとなり、注目すべき研究分野や注目すべき史料を研究するための糸口・手がかりになるように推進していく。

コロナ禍の状況が改善しつつあるので、この状況が続くようならば、対面形式の研究会などを通じて研究交流を進め、調査活動の条件が整い次第、調査活動に取り組むことを予定したい。今年度末に開催予定の特集展示・フォーラムについて具体的な計画を策定し、2024年度に『研究報告』特集号の編集刊行を実現する準備を進めていく。

3. 今年度の研究経過

新型コロナウイルスの感染拡大予防の観点から、今年度も集団による館内外の史料調査の実施を控え、下記の4回の研究会を開催するにとどまった。なお、研究会は対面とオンラインの併用で開催した。

①第7回研究会（2022年7月31日）

- 小川剛生（研究協力者）「北朝の政務と名家の廷臣一貞和2年の広橋仲光一」
 甲斐玄洋「藤原頼資と鎌倉前期の朝廷」
 田中奈保「北朝の改元と勘解由小路兼綱」

②第8回研究会（2022年10月23日）

特集展示の内容検討

③第9回研究会（2022年12月3日）

特集展示の内容検討

④第10回研究会（2023年3月21日）

- 特集展示の見学
 研究報告・特集展示の書籍化の検討

4. 今年度の研究成果

- ①家永 遵嗣「箱根湯本早雲寺の開山以天宗清と鎌倉五山建長寺」(『学習院大学文学部研究年報』69輯, 2023年)
- ②遠藤珠紀・金子拓・宮崎肇「『宣教脚記』天正三年記紙背文書(一)」(『早稲田大学図書館紀要』70号, 2023年)
- ③遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎「綱光公記—宝徳三年四月～六月記—」(『東京大学史料編纂所研究紀要』33号, 2023年)
- ④遠藤珠紀・金子拓・高橋敏子・志賀節子「賀茂別雷神社領関係文書I」(『東京大学史料編纂所研究紀要』33号, 2023年)
- ⑤尾上陽介「陽明文庫所蔵『僧綱補任』について」(『禁裏・公家文庫研究』9輯, 2023年)
- ⑥尾上陽介「『基熙公記』の原本について」(『禁裏・公家文庫研究』9輯, 2023年)
- ⑦尾上陽介「陽明文庫所蔵史料による料紙研究の可能性」(渋谷綾子・天野真志編『古文書の科学』文学通信社, 2023年)
- ⑧高橋秀樹「中世漢文日記の刊行と史料学」(『歴史評論』874号, 2022年)
- ⑨田中大喜「『兼仲卿曆記』自正安二年正月二十二日至三月二十九日」(『日本歴史』894号, 2022年)
- ⑩田中大喜「国立歴史民俗博物館の愉悦⑤『兼仲卿曆記』『兼仲卿記』」(『文部科学省教育通信』543号, 2022年)
- ⑪久水俊和・大田壮一郎・松井直人「室町殿任大臣大饗・移徙関係史料について—旧京都府立総合資料館収蔵中世文書の翻刻と紹介(3)—」(『京都学・歴史館紀要』6号, 2023年)
- ⑫久水俊和「足利将軍の参詣—信仰・遊覧・威圧—」(『歴史研究』706号, 2022年)
- ⑬特集展示「中世公家の〈公務〉と生活—広橋家記録の世界—」(国立歴史民俗博物館, 2023年)

5. 全期間の研究成果

本研究では、国立歴史民俗博物館所蔵の『広橋家旧蔵記録文書典籍類』はもちろんのこと、他機関所蔵の広橋家関係史料も広く調査することを予定していたが、研究期間がコロナ禍と重なってしまったため、この実施が叶わなかった。しかし、わずかながらでも『広橋家旧蔵記録文書典籍類』の調査は行うことができ、また都合10回の研究会を対面・オンライン併用で開くことができたことで、「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』の全体像を歴代当主の伝記を軸として整理して提示する」という本研究の目的はおおよそ達成することができた。

この研究成果をベースにして、2023年3月7日～5月7日に特集展示「中世公家の〈公務〉と生活—広橋家記録の世界—」を開催した。あわせて、4月15日には同タイトルの歴博フォーラムを催し、研究成果の社会還元を果たした。なお、本特集展示は出版社から書籍化の打診を受け、商業出版を予定している。

本研究の全体的な成果については『研究報告』特集号にまとめ、学界に問うことになる。研究期間中、広橋家に関係する史料に関わる研究文献の調査を進め、研究文献目録を作成することができた。この目録も『研究報告』特集号に掲載することで、今後の『広橋家旧蔵記録文書典籍類』の活用の一助となることが期待される。

6. 研究組織 (◎は研究代表者、○は研究副代表者)

- ◎家永 遵嗣 学習院大学文学部・教授
- 榎原 雅治 東京大学史料編纂所・教授
- 遠藤 珠紀 東京大学史料編纂所・准教授
- 小倉 慈司 本館研究部・教授
- 尾上 陽介 東京大学史料編纂所・教授
- 甲斐 玄洋 佐伯市歴史資料館・学芸員
- 末柄 豊 東京大学史料編纂所・教授
- 瀬戸 祐規 神戸松蔭女子大学・非常勤講師
- 高橋 秀樹 國學院大学文学部・教授
- 田中 奈保 鎌倉女子学院中学校高等学校・教諭
- 田中 大喜 本館研究部・准教授
- 田村 航 明治学院大学・非常勤講師
- 久水 俊和 追手門学院大学文学部・准教授
- 廣田 浩治 静岡市文化振興財団事務局・係長
- 湯川 敏治 学識経験者

(13) 高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究—額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に— 2021～2023年度 (研究代表者 下村 周太郎)

1. 目的

本館が所蔵する「額田寺伽藍並条里図」および「栄山寺寺領文書」は、奈良・平安時代の寺院および寺領荘園に関する同時代史料として知られ、前者は国宝、後者は重要文化財に指定されている。本研究ではデジタル技術も活用することで、両史料に関する研究基盤の構築・高度化を図るとともに、古代史・中世史双方の研究者が参画することで、古代～中世における寺院・寺領荘園の総合的・多角的の研究の推進を目指す。

前者は現在の奈良県大和郡山口市に所在する額田寺（現・額安寺）の境内地および周辺の寺領を、麻布に彩色で描いた絵図で、天平宝字年間（757～765）の作成とされる。奈良時代の寺院や寺領を描出する史料として極めて貴重であり、史料の乏しい当該期の寺院史・荘園史研究において積極的に活用されるべきである反面、退色や朽損が進んでおり、保護・保全への適切な配慮も求められるものである。そこで、本研究ではデジタル撮影により得られた高精細画像の公開を推進するとともに、高精細画像を活用しながら、現物では視認が困難化している記載内容の検討、絵図に用いられた顔料や麻布の自然科学的分析、記載内容と現地景観との突合による歴史的景観の遡及的復元などに取り組む。

後者は現在の奈良県五條市に所在する栄山寺の平安期の寺領に関する史料で、特に11～12世紀（摂関・院政期）のいわゆる王朝国家段階における古代荘園から中世荘園への転換状況を示すものとして著名である。中でも、条里の坪ごとに租税の免否を確定するためになされた栄山寺と国司とのやり取りに関する一連の史料（栄山寺牒）は、古代中世移行期の荘園史研究における基本史料となっている。ただし、やはり経年の劣化が進んでおり、文字の判読に困難な箇所も生じており、特に細字の注記や朱書きなどについては改めて厳密に解説・確定していく必要がある。また、錯簡ないし断簡が疑われている史料もあり、接続関係についての慎重な検討も望まれる。本研究では、前者と同様に、デジタル撮影により得られた高精細画像の公開を推進するとともに、高精細画像を活用しながら、記載された文字・数字の分析とデータ化および記載内容と現地景観との突合による歴史的景観の遡及的復元などに取り組む。

前者は奈良時代の絵図史料、後者は平安時代の文書史料という別はあるが、いずれも古代～中世における寺院および寺領荘園の実態にアプローチしうる稀有な史料である。文化財としての適切な保存と研究資源としての積極的な活用の両立という観点から、デジタル技術を駆使した高度情報化研究による研究基盤の構築を図り、その上で古代史・中世史双方の研究者が参画し、古代から中世における寺院・寺領荘園の変容過程を断絶・連続の両面から追究することで、寺院史・荘園史研究の新段階を招来したい。

2. 今年度の研究計画

「額田寺伽藍並条里図」および「栄山寺寺領文書」について、昨年度に引き続き基礎的なデータの把握を行う。高精細デジタル画像の活用や原本の熟覧調査などに基づきながら記載されている文字の解説・確定とカード化や、接続関係の確認・復元を行い、得られた知見をデジタルデータ化する。「額田寺伽藍並条里図」については、印影の存在・位置を確定するとともに、顔料や墨、料紙や麻布についても科学的な分析の可能性を検討する。記載内容の確定にあたっては、現在の地形や地名との突合が有効であることから、現地調査も実施する。

3. 今年度の研究経過

2022年8月19日（金）、当館にて栄山寺寺領文書の熟覧調査を行い、重ね書き箇所の文字の確認などを行い、五條市史など既存の刊本の校訂を進めた。

12月16日（金）、当館にて栄山寺寺領文書の熟覧調査を行い、重ね書き箇所の文字の確認などを行い、五條市史など既存の刊本の校訂を進めた。

12月17日（土）、ハイブリッド形式で研究会を開催し（対面会場は早稲田大学戸山キャンパス）、島津美子「対象資料の基礎情報に関わる調査」および公家怜亮「2021～22年度「古代荘園と在地社会についての高度情報化研究」データ作成進捗状況」の2報告を得た。前者では「額田寺伽藍並条里図」の麻布の状態に関する詳細な観察結果などが報告された。また、後者では栄山寺寺領文書の記載内容に関するデータ化作業の進捗状況が報告され、今後の方針について意見交換が行われた。

2022年12月25・26日（日・月）、古代から中世にかけて栄山寺の寺領が展開していた奈良県五條市において現地

調査を実施した。初日は旧大和国宇智郡河南三条を中心に、二日目は同佐味条・重坂条を中心に現地を踏査し、条里遺構や水利を調査した。

2023年2月10日（金）、ハイブリッド形式で研究会を開催し（対面会場は当館）、三河雅弘「額田寺伽藍並条里図の作成と班田図の整備」および赤松秀亮氏から「大和国栄山寺周辺の歴史的景観」の2報告を得た。前者では「額田寺伽藍並条里図」を歴史的に位置づけるための論点が提示された。後者ではGISや地籍図を活用することで従来の条里復元に見直しを迫る知見が示された。

2月27日（月）、当館にて栄山寺寺領文書の熟覧調査を行い、重ね書き箇所などの文字の確認などを行い、五條市史など既存の刊本の校訂を進めた。

4. 今年度の研究成果

「額田寺伽藍並条里」の型紙に付着した糸片を使用した炭素14年代測定法による分析を行い、サンプルの四つがいずれも八世紀第三四半世紀よりも以前であることが示され、高い精度で四千年号期の作成であることが示唆された。また、同図の左右端の高解像度の顕微鏡による調査により、布の織り方および印影の調査をおこなった結果、印影が左端にはみ出していることが確認でき、本来は左右に展開していた可能性が指摘できた。

「栄山寺文書」については、印影の集成と分類をデジタル的な手法でおこない、いくつかの大和倉印の類型を確認することができた。条里復原については、吉野川南岸に展開する河南三条を調査し、現地地形と照合することができた。最終年度にむけて『五條市史』資料編では積文の正確な史料組みがなされていないことから、文書に忠実な積文組みの素案を作成した。

5. 全期間の研究成果

仁藤 敦史『藤原仲麻呂』中公新書、2021年6月刊

仁藤 敦史「額田寺伽藍並条里図」『文部科学教育通信』540, p1, 2022年9月刊

6. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

赤松 秀亮 別府大学文学部・講師

坂本 亮太 和歌山県立博物館・学芸員

高木 徳郎 早稲田大学教育・総合科学学術院・教授

服部 光真 元興寺文化財研究所・研究員

山崎 竜洋 五條市教育委員会事務局・学芸員

◎下村周太郎 早稲田大学文学学術院・准教授

鈴木 景二 富山大学学術研究部人文科学系・教授

山口 英男 東京大学史料編纂所・教授

鷲森 浩幸 帝塚山大学文学部・教授

三河 雅弘 専修大学文学部・准教授

服部 一隆 明治大学兼任講師

中島 皓輝 明治大学博士課程) RA)

○仁藤 敦史 本館研究部・教授

三上 喜孝 本館研究部・教授

鳥津 美子 本館研究部・准教授

後藤 真 本館研究部・准教授

(14) 歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築—沖繩地域の映像を中心に 2022～2024年度 (研究代表者 春日 聡)

1. 目的

本研究は、歴博が1988年以来実施してきた研究映像制作の成果および共同研究「歴博研究映像の制作・保存・活用—苧麻文化の映像記録化を中心に」(2019～2021年度、研究代表：春日聡。以下、「前共同研究」とする)の成果に基づき、①歴博研究映像のアーカイブ映像を新規のテーマで研究活用するほか、②前共同研究において実施した福地唯方8ミリフィルムコレクション（以下、福地コレクションとする）のデジタル復元を推進し、③これらの映

像を活用しながら現地調査・撮影等を実施して新たな映像記録を蓄積するとともに、④これらの成果を、上映・展示での活用のほか、オンラインでの提供など、総合的な利活用を推進することを目的とする。

2. 今年度の研究計画

【共同研究会】3回実施する。前共同研究で制作した宮古島の芋麻文化についての研究映像を検討し、成果を国外に発信するため、日本語テキストを検討して英語テキスト作成を準備する。また、過去の歴博研究映像から、沖縄の民俗文化・歴史をテーマとする『黒島民俗誌』（1993年）、『沖縄・糸満の門中行事』（1996年）、『沖縄の焼物』（2000年）の成果（完成作品・撮影素材）を用いて、沖縄地域の民俗宗教行事・生活文化における植物利用の視点から映像を分析・整理する。さらに、前共同研究および本共同研究でデジタル化した福地コレクションについて、デジタル化の方法・得られた映像データについて報告し、デジタル復元および研究成果のまとめ方を検討する。

【現地調査】上記研究会において整理した沖縄各地の植物利用に関する映像および福地コレクションのデジタル復元の映像に基づき、現地調査を実施する。

【研究成果の公開】前共同研究で制作した宮古島の芋麻文化に関する研究映像を、歴博映像フォーラムを開催して公開するほか、令和5年度の映像フォーラムを計画する。また、歴博研究映像のオンラインでの提供を試行し、課題を整理する。

3. 今年度の研究経過

【研究会】

第1回：9月4日13時～16時、オンライン開催、7名参加

本共同研究の研究資料である①歴博研究映像『黒島民俗誌』・『沖縄・糸満の門中行事』・『沖縄の焼物』の完成版と撮影素材、②「福地フィルム」を共同研究員で共有し、研究会前に事前に視聴して、第1回目の共同研究においてそれぞれの研究計画について検討した。

第2回：11月26日・27日、8名参加

26日は那覇市壺屋焼博物館を訪問し、歴博研究映像『沖縄の焼物』に関する調査・研究打ち合わせを実施した。那覇市壺屋焼博物館の比嘉立広氏の案内で同館の展示や周辺の壺屋焼関連の施設（登窯、工房）を巡検した。また、歴博が製作した研究映像『沖縄の焼物』を提供し、映像や展示を介した今後の研究協力について打ち合わせた。また、本共同研究メンバーの外間政明氏の案内で、沖縄の陶芸の歴史に関連する人物の墓を巡検した。翌27日は、沖縄県立博物館・美術館の大湾ゆかり氏の案内で、沖縄の陶芸史に関連する常設展示や開催中の企画展示「琉球-美とその背景」を巡検したほか、同博物館が過去に製作した展示映像から、本共同研究の研究資料の候補となる映像資料を視聴し、今後の研究の計画について打ち合わせを実施した。

第3回：3月18日（13時～16時30分）・19日（9時30分～13時）

歴博映像フォーラム「ブーンミの島—沖縄県宮古諸島の芋麻文化」（3月18日）の開催と連動して翌19日に研究会を開催し、歴博研究映像『ブーンミの島』について意見交換し、課題について検討したほか、①歴博研究映像『沖縄・糸満の門中行事』に関する調査の報告（山田慎也）、②同『黒島民俗誌』に関する調査の報告（川村清志）により、翌年度の研究計画を検討した。

【研究打ち合わせ】

①1月21日（歴博にて、歴博研究映像『ブーンミの島』のブラッシュアップについて、3名参加）

②2月16日（オンライン開催、歴博研究映像『ブーンミの島』のブラッシュアップについて、3名参加）

【調査】

歴博研究映像『ブーンミの島』に関連する調査（宮古島市：1月24日～25日、2月20日～2月24日、3月2日）

歴博研究映像『沖縄・糸満の門中行事』に関連する調査（糸満市：1月21日～23日）

4. 今年度の研究成果

①沖縄県の民俗文化に関する歴博研究映像を対象として、民俗宗教行事・生活文化における植物利用を中心的なテーマとして分析し、アーカイブ映像としての活用をはかるための観点整理を進めた。

- ・沖縄県の民俗宗教行事における植物利用を「よそおう」「そなえる」「まじなう」という観点から整理する
- ・沖縄、宮古、八重山の生活文化を植生の相違という観点から考える
- ・人間の認識としての植物のあり方に着目して考える
- ・植物を供える容器の地域的多様性への着目
- ・食文化や儀礼食など

- ②歴博研究映像『ブーンミの島』を歴博映像フォーラムで一般公開するにあたり、本共同研究において課題を整理してブラッシュアップをはかることができた。
- ③歴博研究映像『黒島民俗誌』・『沖縄・糸満の門中行事』・『沖縄の焼物』に基づいた現地調査を実施し、撮影・制作された当時と現在を比較する対象について検討し、方向性を決めることができた。

5. 研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

- ◎春日 聡 多摩美術大学・非常勤講師
 分藤 大翼 信州大学全学教育機構・准教授
 外間 正明 那覇市市民文化部・文化財課・担当副参事
 大湾ゆかり 沖縄県立博物館・美術館・主任学芸員
- 内田 順子 本館研究部・教授
 川村 清志 本館研究部・准教授
 澤田 和人 本館研究部・准教授
 山田 慎也 本館研究部・教授

【共同利用型共同研究】

館蔵資料利用型

(15) 『越前島津家文書』の分析と関連史料の収集を通じた室町幕府奉公衆の編成過程と活動実態の研究 2022年度 （研究代表者 矢嶋 翔）

1. 目的

本研究は国立歴史民俗博物館所蔵「越前島津家文書」を利用し、室町幕府奉公衆播磨島津氏の鎌倉期～室町期における政治・軍事活動の把握と本領支配の実態解明を試み、そこから室町幕府の奉公衆の編成過程について考察することを目的とする。

本研究ではまず「越前島津家文書」に収まる古文書・系図の原本調査を実施し、料紙・筆跡・花押等にいたる細かな分析を行う。そして、この原本調査で得た成果を基に播磨島津氏の所領（旧領・恩賞地）分布図や南北朝期の軍事活動を示す地図などを作成する。合わせて関連史料の収集も行い、播磨島津氏の在京活動や本領下揖保庄に関する情報を年表化する。さらに上記の成果を基にして、室町幕府奉公衆播磨島津氏に関する史料・文献の総合目録の作成を試みる。これらの成果を公表できれば、今後の「越前島津家文書」の活用方法の深化に貢献するほか、奉公衆研究の資源を広く提供できると考える。

2. 今年度の研究計画

- (1) 「越前島津家文書」の原本調査と関連史料の収集・読解を実施する。まず、刊行されている「越前島津家文書」の積文を読解することから始め、夏に原本調査を実施する。
- (2) 秋に、播磨島津氏と同様に室町幕府の当参奉公人と思われる田代氏の家伝文書、国立歴史民俗博物館所蔵「広橋家本田代文書」の原本調査を実施する。
- (3) 秋から冬にかけて、山科家の古記録について検討する。

3. 今年度の研究経過

今回の研究では、夏に「越前島津家文書」を、冬に「山内首藤家文書」の原本調査をそれぞれ実施した。その日程と調査内容は以下の通りである。

①「越前島津家文書」の原本調査（場所は国立歴史民俗博物館、2022年9月14・15日）

「越前島津家文書」は播磨国下揖保庄を本拠とし、南北朝の内乱期には当参奉公人、室町期には奉公衆として活動していた播磨島津氏の武家文書である。計60点ほどの古文書と系図が卷子本に装幀された状態で現存している。特に南北朝の内乱期の軍忠状や軍勢催促状、恩賞宛行状、一揆契約状、下揖保庄相伝系図などを中心に収めており、同史料は奉公衆研究だけでなく、南北朝期の武家領主の本領支配の一面などを知る手がかりを提供してくれる。

本研究では2日間かけて「越前島津家文書」すべての写真撮影を実施し、全体の内容の把握のほか、筆跡・花押の形態、果ては文書に使用されている料紙にいたるまで詳細に検討した。なお、この調査は共同研究者の田中大喜氏の同席のもとで行った。

②「山内家文書」の原本調査（山口県文書館，2022年11月17・18日）

当初の計画では、公家の山科家の古記録などの検討を通した室町期における播磨島津氏の在地支配の把握と、国立歴史民俗博物館所蔵「広橋家本田代文書」の原本調査を予定していた。しかし、原本調査の内容を変更し（変更理由は後述）、山口県文書館が所蔵する「山内家文書」（「山内首藤家文書」）内の山内首藤通継関係文書と山内首藤系図の原本調査を実施した。この調査では、2日間かけて写真撮影と分析作業を行った。参加者は矢嶋のみである。

4. 今年度の研究成果

「越前島津家文書」の研究を通した成果は以下の通りである。

- (1) 「越前島津家文書」の原本調査と関連史料の収集・読解を実施した。まず、刊行されている「越前島津家文書」の積文を読解することから始め、夏に原本調査を実施した。積文の読解の中で、特に南北朝の内乱期に播磨島津氏が在京して足利將軍家に近侍していたことを示す文書に注目した。この播磨島津氏の在京活動に関しては、「越前島津家文書」以外に『笠懸記』・『師守記』・『朽木家文書』・『花營三代記』等の他史料からも確認が取れる。そのため、南北朝の内乱期から室町・戦国期までの室町幕府奉公衆播磨島津氏の在京活動を抽出し、さらに室町期の各番帳を分析することで南北朝～室町期における播磨島津氏の將軍家への近侍状況を把握することができた。
- (2) (1)の原本調査と積文読解と合わせて、播磨島津氏の鎌倉～室町期における軍事的活動の地図・年表を作成した。この成果を通して、南北朝の内乱期に列島を縦断して播磨島津氏が軍事・政治的に活動していたことを具体的に明らかにできた。特に南北朝期における足利將軍家の親征との関連性に注目し、將軍親征図の作成も行った。以上の成果は室町幕府軍事制度史研究に新たな視点を提供することができるものと予想する。
- (3) 室町期の山科家の古記録を活用して、室町期の播磨島津氏の所領経営と活動実態をまとめることができた。また鎌倉～室町期における播磨島津氏の所領（旧領・恩賞地）分布図も作成した。
- (4) 上述(1)～(3)の検討を通して、播磨島津氏の原本調査や翻刻作業等を通して得た情報、かつ関係史料や文献を網羅的に収集して得た成果を基に、播磨島津氏の史料・文献に関する総合目録の作成を試みた。この総合目録作業は現在も進行中であるが、これらは播磨島津氏研究のみならず、室町幕府奉公衆の一形態や中世武家文書研究の深化をもたらすものと考えられる。

また、「越前島津家文書」の総合目録を作成する中で、「越前島津家文書」に関する前田徹「赤松円心の花押と関係文書の筆跡」（『中世後期播磨の国人と赤松氏』清文堂出版，2020年）の重要な指摘に接した。前田氏は赤松円心の花押と関係文書の筆跡検討を行っており、その中で「越前島津家文書」内の4通の建武年間の軍忠状がリアルタイムで作成されたものではなく、播磨島津氏の暦応2年の本領訴訟の際に日付を遡る形で作成され直されたものであることを明らかにしている。この指摘をふまえ、播磨島津氏の將軍家への近侍が暦応2年の訴訟以降から活発になっていることに注目し、この訴訟が播磨島津氏の当參奉公人化そして奉公衆編成へとつながるきっかけとなったのではないかと見立てをたてた。

また、前田氏が指摘した暦応2年の訴訟は「内乱の恩賞として本領が闕所地として味方に分配されてしまう」という南北朝期に類出する訴訟問題であるが、これに関して、山内首藤通継に関する古文書の中にも、「越前島津家文書」と同様に「リアルタイムで作成されたものではなく、訴訟のために日付を遡る形で作成され直された」讓状を見つけることができた。この前田氏が指摘した播磨島津氏の事例や山内首藤家通継の事例を考察することによって、南北朝期における内乱と訴訟の関係性や幕府への訴訟手続きについて、これまで指摘されてこなかった成果が得られると考えた。そのため当初の研究計画を変更し、「山内家文書」の通継関係文書の原本調査を実施することにした。

本研究の成果は以上の通りである。なお、当初の計画では国立歴史民俗博物館所蔵の「広橋家本田代文書」と山科家関係史料の原本調査と検討も実施する予定であったが、研究代表者の力量不足でこちらの調査は見送ることとなった。今後はこの2つの調査も実施していきたい。

最後に以上の成果については、「越前島津家文書」の検討を『地方史研究』、「山内家文書」の検討成果を『古文書研究』に投稿することを計画している。

5. 研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎矢嶋 翔 中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期課程

○田中 大喜 国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系准教授

(16) 博物館収蔵庫および周辺空間の温熱環境と空調制御に関する調査 2022年度 (研究代表者 伊庭 千恵美)

1. 目的

博物館収蔵室などの施設では歴史資料や文化財資料が保管・活用されているため、一般的なオフィスや住宅等と比較し、厳格な温湿度管理が求められている。これらの建物では、外気の影響を低減する工夫として、窓の日射遮蔽や、熱的緩衝のための二重壁構造などをもつ施設が造られてきた。現在では、多くの収蔵施設において空調設備が用いられているが、建物構造とのミスマッチ（収蔵室の断熱・気密性、二重壁構造における温湿度制御点の不適切な配置、収蔵室以外の室での換気設備による圧力バランスの乱れ）、経年による設備の劣化や施設内の室の用途変更、運用コスト削減のための空調の間欠運転、モニタリングのための機器や環境管理に関する専門家の不足などにより、適切な温湿度管理が行われていない場合がある。

国立歴史民俗博物館の収蔵庫では空調設備の専門家による常時空調運転がなされており、収蔵資料の種類によっても温湿度の設定を変えるなど、精緻な環境管理がなされていると考えられる。しかしながら、建物は竣工から40年以上が経過しており、近年の収蔵資料の保存環境に関する考え方との齟齬も生じ始めているものと考えられる。本研究では、収蔵庫のみでなく、収蔵資料を移動させる空間も含め、現状の温湿度環境を把握することで、求められる保存環境に合致しているかなどを検証する。また、大規模収蔵庫における設定温湿度と、それに伴う収蔵庫内の空気の流れを把握することで、収蔵資料に適切な保存環境が整備できているかを検討する。さらに、温湿度データの収集および解析により、今後の保存環境整備の具体的対策に結び付けていくことを目的とする。

2. 今年度の研究計画

収蔵庫および周辺空間の温湿度測定は、ロガー付き小型温湿度計を用いて行う。収蔵庫は複数の階層に分かれているが、いくつかの階層を選択し、前室、エレベータホールなどを含めて測定箇所を定める。資料が収蔵されている空間においては、空調吹出し・吸込み口や天井裏、室内における上下方向など、各室内における場所による温湿度の分布が把握できるよう設置箇所を選定する。また、収蔵庫外においては、資料を移動・調査すると考えられる廊下や仮収蔵庫、調査室等の温湿度を測定する。

空調設備の運転状況を調査する。各階層の収蔵室の空調吹出し風速や風向を、風速計と吹き流しを用いて確認する。各収蔵室および周辺空間における水染みの有無、空調フィルタの汚れ具合、天井裏ダクトの断熱状況などを確認する。また、空調運転の詳細な状況を把握するため、空調機からの送風温湿度設定、空調機への冷温水温度設定、設定温度の変更時期等を管理者にヒアリングする。

現状の収蔵環境において、資料にひずみが生じているのかの模擬資料を用いて調査する。具体的には、50年以上を経過した木材に、温湿度計とひずみゲージを貼付し、温湿度とひずみの関係を把握する。

3. 今年度の研究経過

地下1階収蔵室は南側の二面の外部がドライエリアで外気に接し、地下2階収蔵室は壁四面が地盤と接する。内装は、地下1階・地上1階は天井、床、壁が木製の二重壁構造となっているが、地下2階は天井のみ懐空間があり、壁、床はコンクリート塗装仕上げとなっている。空調吹出し口は天井に、吸込み口は床付近にそれぞれ配置されている。収蔵庫内は中央監視設備により24時間厳密に空調制御がなされており、地下1階・2階、地上1階収蔵室内の目標相対湿度は年間を通じて60%RHに設定され、目標温度は夏季モードで22℃、冬季モードで17℃である。これらを踏まえ、温湿度の設定値が同じである地下2階、地下1階・地上1階の計測を重点的に行うこととし、収蔵庫および資料が移動する可能性のある、前室、エレベータホールなどの周辺空間ならびに外気の温湿度測定のため、合計35箇所に温湿度計を設置した。測定間隔は年間を通じて10分間隔で行った。

収蔵庫内の空調制御用の温湿度検出は、室内の各方位の壁（計4か所、床上約1.5m）に設置された制御用温湿度計の値を平均して用いている。そこで、本調査では、高さ方向の違いや、室中心部と隅部の分布に着目し、温湿度計を配置した。空調の影響や漏気の影響も確認するため、空調吹き出し口や天井裏空間にも設置した。

空調運転の調査については、複数の収蔵室の空調吹き出し風速や風向を、風速計と吹き流しを用いて確認した。また、各収蔵室および周辺空間における水染みの有無、空調フィルタの汚れ具合、天井裏ダクト状況などを目視で確認した。また、空調の運用状況の詳細について管理者にヒアリングを行った。

模擬資料のひずみ調査では、収蔵庫内の温度が変化する期間に、模擬資料（木箱）にひずみゲージを貼付し、温度変化が試料の変形に与える影響について基礎的な情報を得た。

4. 今年度の研究成果

収蔵室内の温湿度はほぼ目標値通りに推移しており、十分に制御されている状態であった。予備調査に際し、地下2階収蔵室の空調吹出し口で、フィルタ上に白い汚れと止め金具の錆が散見され、過去に結露した可能性が考えられた。夏季モードでは22℃60%RH（露点温度約14℃）の設定であり、吹出し口の風速を抑制するために吹出し温度を低くすることで結露が生じた可能性を考え、盛夏期に再度吹出し口のフィルタの湿り具合を確認した。しかし、外気温湿度が高い日であるにも関わらず、フィルタに結露は見られず、吹出し口直下の温湿度も22℃49～55%RHと室内に近い状態であったため、少なくとも現在の空調運用においては、結露は生じていないといえる。

また、空調空気の浄化は機械室に設置された空調機本体で行われており、吹出し口のフェルト状のフィルタは風向を調整するために設けられたと推察される。仮にフィルタ上で確認された白い汚れがカビであった場合、内部の作業員の健康にも影響があると考えられるため、早急なメンテナンスが必要といえる。ただし、地下2階だけでも吹出口の数は84か所あり、すべてのメンテナンスを定期的に行うことは管理者にとっての負担も大きい。地下1階や地上1階のように天井高が非常に大きい収蔵室では、大きな梯子等でないと吹出し口に届かない場所も多い。

さらに、地上1階収蔵室の天井裏を調査したところ、吹出し口に通じるダクトが1か所落下していた。接続されているはずの吹出し口の直下で風速の測定を行ったところ、他の吹出し口より明らかに小さかった。夏季モードである6～8月における天井裏と収蔵庫内の温度について、地下2階と地上1階において比較を行うと、地下2階では天井裏>室温である一方、1階では天井裏<室温となっていた。つまり、冷房の冷気が本来空調スペースではない天井裏に吹出されており、エネルギーの損失につながっている。天井裏の点検が行いにくいことが発見の遅れにつながったといえる。今後の収蔵庫の設計においては、吹出し口・吸込み口のメンテナンスのしやすさを考慮することも重要である。

前室は資料を収蔵庫から移動する際に必ず通る場所であり、収蔵庫内と同じ系統の空調の吹出し口が1箇所ある。夏季・秋季を通じて前室の温度はほぼ一定で平日のみ僅かな変化が確認され、人の出入りや照明が原因として考えられる。収蔵室に比べ相対湿度の変動はやや大きく、外気の絶対湿度が高い時期には60%を超えることがあり、10月以降は55%程度で推移した。

温湿度がともに高い時期には、廊下の相対湿度が日中は70%、夜間は80%前後となっていた。資料が日中に移動すると仮定すると、資料の曝される環境が、収蔵庫内での夏季相対湿度実測値の57%から廊下の70%に急激に変化する。相対湿度の急激な変化は資料の吸放湿を促すため、資料が伸縮し、劣化につながる可能性が示唆された。

また、収蔵物から廊下へ移動する際の表面結露の可能性について検討した。地下2階収蔵室の資料の表面温度が室内の最も低温となった21.8℃に等しいとした場合、廊下の日中の露点温度が最高で22.28℃となるため、結露する可能性があるといえる。実際は収蔵庫から廊下までの間に徐々に表面温度が上がる可能性があるが、特に夏季は周辺空間の温湿度制御についても留意する必要がある。

さらに、収蔵庫前室に隣接するエレベータホールには外気とつながる排気口があり、エレベータホールの絶対湿度の変化からも外気の影響を受けていることを確認した。前室や収蔵庫の扉は経年劣化により気密性が保たれない状況であった。これらのことから、収蔵室へ意図しない外気の侵入が生じる可能性が示唆された。

室内の温湿度変化が収蔵物の変形に与える影響を検討する基礎情報として、土器を収蔵する木箱（昭和時代）を木材の模擬資料に見立て、ひずみの測定を行った。2つの木箱で、それぞれ木目方向と木目に直交する方向にひずみゲージを貼りつけ、1分間隔で測定を行った。冬季モード移行期に約1か月かけて室温が2℃程度低下しているが、ひずみはほとんど変化せず、明確な関係は見られなかった。湿度変化についても、この時期の室内相対湿度変化は±2%程度であり、吸放湿に伴う膨張・収縮もそれほど大きくならなかったものと考えられる。

保存環境の管理については、試行錯誤している博物館・美術館が多い中、課題を抱えていても公表されることが少なく、その問題が研究者間でも共有されにくいという現状がある。本調査のような事例を積み重ね、その結果を公表することで、他の施設においても参考となる知見が得られると考えられる。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎伊庭千恵美 京都大学大学院工学研究科・准教授

○島津 美子 本館研究部・准教授

(17) 藤貞幹の古瓦譜の制作過程に関する実験考古学的研究 2022年度 (研究代表者 村野 正景)

1. 目的

本研究では、国立歴史民俗博物館所蔵の『古瓦譜』および関連資料を分析対象とした。目的は、江戸時代の「考古学」的営みの実態を分析して、日本考古学の発生にかかる系譜研究、つまり学史研究に新たなデータを提供することにある。具体的題材として、本研究では、江戸時代の学者・藤貞幹（1732-1797）が作成した『古瓦譜』を扱った。

日本考古学は、近代西欧科学の導入により成立したと教科書的に理解されている。そこに異論はないが、それを遡る江戸時代の「考古学」は評価が十分でないと考えられる。とりわけ古瓦研究に対して顕著である。当該研究の鼻祖である藤貞幹の『古瓦譜』は、単なる瓦片を歴史研究の資料へと価値転換したと高評価がある。ところが高橋健自や上原真人が一部の掲載品を「偽作」「捏造」と断定し、貞幹は捏造行為をエスカレートさせていったと解釈したため、その負の評価は貞幹の研究自体の評価へと転化しなれば定説化した。しかし実は彼らは『古瓦譜』の編年をせず解釈しており実証に欠ける。また上原が「捏造」の根拠という瓦図像の「二重採拓法」（二重に採拓して瓦を捏造する手法）自体、貞幹の工夫や技術、考証過程を単純化しすぎており検討の余地がある。つまり、『古瓦譜』制作、とりわけ古瓦の図像が実際はいかに考証・復元され制作されたかを再検討する必要がある。

そこで申請者は、歴博蔵の『古瓦譜』と『聆涛閣集古帖』の「瓦帖」を主な対象として、そのほか多数の貞幹『古瓦譜』と比較し、資料の時期的位置づけを明らかにした上で、掲載される拓本・図類の詳細な制作手法研究をおこなうことを計画した。とくに瓦図像の制作技術（拓本手順、加筆の仕方など）を細かく分析・分類し、そこから析出・想定した技術について実験的研究をおこない、それをもとに貞幹がおこなった古瓦の復元や考証作業の過程を明らかにすることを目指した。こうした実証的データは、これまでの「定説」を検証し、異なる評価も生むと考えた。

2. 今年度の研究計画

研究は以下のように進めるよう計画した。

1. 研究開始後、できるだけ早期に、歴博蔵の『古瓦譜』（および『仏刹古瓦譜』）の高精細画像取得をおこなう（2022年度4月～6月）。歴博蔵の『古瓦譜』には、天沼俊一、田中稔、宇野信四郎各氏旧蔵本がある。宇野本は貞幹本と異なるとみられるから参考資料として扱う。『聆涛閣集古帖』はすでに公開された画像データを用いる。
2. 画像取得と同時に並行で、『古瓦譜』類の詳細な観察をおこなう（2022年度4月～6月頃）。
3. 次に、観察および画像データをもとに、これまで収集した他の『古瓦譜』類データと比較し、清野謙次や藪中五百樹による編年案を参照しながら、編年作業をおこなう（6月～9月頃）。
4. さらに『古瓦譜』類掲載瓦の図像の制作手法を分析・分類し、その具体的な手法を想定する（6月～8月頃）。
5. その想定に基づいて、実際に採拓するなどの実験をおこない、想定を検証をおこなう（9月～11月頃）。木製や土製の模型を作成して、拓本するなどの実験方法を考えた。なお、こうした実験考古学的作業では、実験結果と『古瓦譜』実物の比較がその都度必要になると想定している。
6. なお歴博蔵の宇野氏旧蔵瓦に林若樹氏旧蔵瓦を含む。林氏は、藤貞幹愛玩の「滋賀宮花頭瓦研」元所蔵者として知られる。一つの可能性だが、宇野氏旧蔵瓦に貞幹旧蔵品が含まれているかもしれない。刊行物や歴博データベースを参照しつつ、細かな破片類の観察により、『古瓦譜』類の拓本対象となった実物が発見できるかもしれない。
7. 最後に主に1～5までで明らかにし得た情報から（6の可能性も残しつつ）、貞幹の古瓦の復元・考証作業について編年的・技術論的にまとめる。

3. 今年度の研究経過

研究はほぼ計画通りに進めることができた。歴博蔵『古瓦譜』の撮影は歴博にて進めていただき、以下の調査で館蔵の実物を全て実見できた。

2022年4月27-28日 歴博にて館蔵古瓦譜の調査

2022年8月30-31日 歴博にて館蔵古瓦の調査

制作実験は申請者の勤務する京都文化博物館にておこない、木版を専門とされる桐月沙樹氏（京都市立芸術大学）に協力をいただいた。

4. 今年度の研究成果

本研究では、江戸時代の学者・藤貞幹が作成した『古瓦譜』関連資料をとりあげ、その制作過程を明らかにするための研究をおこなった。主な研究対象としたのは、全国に現存する28冊中、筆者の確認できた20冊の『古瓦譜』（歴博蔵品を含む）、そして『聆涛閣集古帖』の瓦帖（以下、瓦帖）である。

とくに瓦帖はこれまでの『古瓦譜』研究の対象から外れていたため、重点的に比較検討し、その結果、『古瓦譜』編纂最初期の大府立中之島図書館所蔵のそれと非常に類似性が高く、また続く時期の国立国会図書館所蔵本とも一定の共通性を持つことなどが明らかとなった。そのため瓦帖は『古瓦譜』の制作初期段階と次の時期との間をつなぐものと位置付けられた。

さらに仔細に拓影を比較すると、『古瓦譜』は時期が新しくなるにつれ、文字瓦の文字が明確な個体へと変更し、また不鮮明で文字と判断できないような箇所は一度掲載していても、それを考え直して削除するといった改訂の行為が明らかになった。自らの仮説を検討し、棄却することも厭わない態度がうかがえる。

また本研究では、瓦図像の制作方法を実験的に検討した。とくに「解釈瓦」として特徴の多い「大学」銘瓦を重点的に検討した。手法としては、歴博のKhirin掲載の高精細画像等を用いてデジタル化したデータによる木版作成、木彫美術家による木版作成等を実施し、それらを複数種の拓本方法で採拓したり、筆を用いて描画したりといったやり方である。その結果、現在一般的な肉墨使用方法ではなく、墨汁使用法の可能性等がうかがわがってきた。また技術的に解決すべき諸点が他にも確認でき、次年度以降に取り組むべき課題が明確となった。

なお、研究計画6で期待した藤貞幹の旧蔵瓦と確定できる瓦は、少なくとも文字瓦については館蔵資料にみられないことを確認した。

以上の研究成果の一部は歴博企画展示「いにしえが、好きっ！—近世好古図録の文化誌—」にて公開した。また2023年度の京都文化博物館総合展示「日本考古学の鼻祖 藤貞幹」で公開予定である。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- ◎村野 正景 京都府京都文化博物館 学芸員
- 村木 二郎 本館研究部考古研究系 准教授

(18) 裸潜水漁撈用具の地域差と伝播—長崎県と神奈川県を事例に 2022年度 (研究代表者 瀬川 渉)

1. 目的

本研究の目的は、資料の収集範囲が全国に及ぶ館蔵コレクション「裸潜水漁撈及び蛸漁関係用具」の情報を整理し、館外各地のコレクションとの比較をおこなうことで、地域による差異と類似の生じる要因を、海洋環境の相違と漁撈用具の伝播という視点から明らかにするものである。具体的には長崎県と神奈川県のアマが使用したイソガネと潜水用メガネに注目する。全国各地の漁撈習俗を調査した田辺悟氏（本コレクションの収集者の一人と目される）の『日本蟹人伝統の研究』では、イソガネは地域差が出やすい民具であるとされ、潜水用メガネは伝播や発達の過程が分かる民具であるとされている。イソガネは地域の海底の地形に合わせた形態になるためであり、潜水用メガネは明治中期以降に広まったもので「フタツメガネ」から「ヒトツメガネ」へと発達の過程がはっきりしているためである。『民間伝承』17巻8号での野間吉夫氏の報告によると、福岡県宗像市鐘崎のアマが長崎県や山口県、石川県などに移住して技術や漁撈用具を伝えたとされている。また、先述の田辺氏の研究では、短銃型イソガネが九州西北岸から山口県の日本海側に分布していることが分かっている。宗像市には国の登録有形民俗文化財「玄界灘の漁撈用具及び船大工用具」があり、こうした資料群と館蔵「裸潜水漁撈及び蛸漁関係用具」の比較により、福岡県と長崎県とのイソガネの形態の伝播を考察することが可能となる。さらに、神奈川県を長崎県との比較対象とすることで、田辺氏が指摘した環境による影響が裸潜水漁撈の地域差を生み出すということについても検証することができる。裸潜水漁撈の主な捕採物であるアワビは、岩礁にしか生息しない。岩礁の深い棚や洞穴中のアワビを捕採する場合にはイソガネの全長が長くなり、反りや先端部の大きさも地形に合わせたものになる。また、アワビは水温や塩分濃度などの影響を受ける海藻類を食べて成長するため、その生育も漁撈に関係する。もちろん、水温が低くなれば裸潜水ができなくなるため、長崎県と神奈川県では漁期が異なる点にも留意する必要がある。本研究では、漁具使用地での聞き取り調査と海底地形図の活用とによって、異なる海洋環境下においてあらわれる漁具の形態の相違を明らかにする。研究代表者の所属機関に所蔵される国指定重要有形民俗文化財「三浦半島の漁撈用具」も積極的に活用したい。

2. 今年度の研究計画

本研究は、館蔵「裸潜水漁撈及び蛸漁関係用具」のなかで収集地が長崎県と神奈川県の上ガネと潜水用メガネを研究代表者が撮影・実測する。また、田辺氏などの各先行研究や報告書のほか、館外コレクションも参照して資料の位置づけを明らかにする。さらに各地の海底地形図等も参照し、海底地形が漁撈用具の形態・材質に与えた影響、伝播や発達の過程とその受容についても検討する。具体的には、今年度前半で館蔵・館外コレクション、今年度後半で長崎県内の博物館等が所蔵する上ガネ・潜水用メガネを撮影・実測し、長崎県内での聞き取り調査を実施する。資料の撮影・実測や聞き取り調査から得られた知見を総合し、福岡県から長崎県への伝播の様相と、長崎県と神奈川県における差異や類似点等を明らかにする。

3. 今年度の研究経過

館蔵コレクション「裸潜水漁撈及び蛸漁関係用具」のなかで長崎県と神奈川県の上ガネと潜水用メガネを中心に実測・撮影した。また、館外コレクションである国指定重要有形民俗文化財「三浦半島の漁撈用具」、国指定重要有形民俗文化財「瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具」、国登録有形民俗文化財「玄界灘の漁撈用具及び船大工用具」の上ガネと潜水用メガネ、対馬市教育委員会所蔵の上ガネと潜水用メガネ、壱岐市教育委員会所蔵の上ガネと潜水用メガネの実測と撮影も実施した。あわせて、福岡県宗像市鐘崎、長崎県対馬市厳原、長崎県壱岐市八幡で上ガネと潜水用メガネについての聞き取り調査を実施した。

4. 今年度の研究成果

田辺悟氏による先行研究では、上ガネの先端部（岩とアワビの間に差し込む部分）の反り具合は地域により差があるとされている。しかし、福岡県宗像市鐘崎、長崎県対馬市厳原、長崎県壱岐市八幡での聞き取り調査では、地域差というよりも、アマ個人の潜る深さや得意とする（他のアマには秘密の）漁場の地形に合わせたものであることが分かった。また、長崎県の上ガネの特徴とされる短銃型の上ガネは現在使われておらず、ウニを捕った岩穴のガンガゼを掻きだしたりもできるF-13-12に近い形状に変わっていることが分かった。短銃型の上ガネが使われなくなった理由として、アワビの水揚げ量減少が挙げられる。対馬市厳原での聞き取り調査の結果、アワビの水揚げ量が減少し、いままで探さなかった岩穴まで手を伸ばすようになり、岩穴にいるガンガゼを取り除いてからアワビを捕る場合が多くなったからと考えられる。以上の内容を館蔵コレクションに当てはめると、F-13-16、同17、同21、同24は反りが少ないため、深いところを潜るアマが使っていた可能性がある。また、F-13-12、同16は短銃型の後に出て来た上ガネの可能性もある。さらに、F-13-24、同26は短銃型ではあるが、全体が細くなっており短銃型からF-13-12、同16へと変化する過渡期のものである可能性がある。壱岐市八幡での聞き取り調査では、短銃型がなくなった理由としてウェットスーツの登場が挙げられた。短銃型は腰紐にぶら下げるのに適した形状であったが、ウェットスーツではぶら下げることができなくなったためである。同じく壱岐市では鍛冶屋への聞き取り調査も実施し、以下の成果が得られた。オオガネ（短銃型上ガネ）は、直径5cmほど長さ20cmほどの鉄のパイプを熱し、叩いて作った。先端部分は、薄いので熱が冷めたあとでも叩いて形を整えられた。オオガネは、現在の感覚で1万円、コガネ（手のひらに収まる上ガネ）は5千円くらいで製作しており、オオガネとコガネの間のサイズも製作していた。反りや重さ・長さは、アマの注文に応じて製作した。地域差というよりも個人差で反りを入れていた。自分が得意とする場所に合った反りや長さだと考えられ、深く潜る人ほど重いものを好んだ。

神奈川県の上ガネは上ガネの最先端部が急角度で反りが入っているものが多かった。また、神奈川県は紐を通す穴が開いているものがほとんどであることも長崎県にはあまり見られない特徴である。深くまで潜るアマは岩に引っかかるようなものは身につけないため、神奈川県よりも長崎県のアマのほうがより深くまで潜っていた可能性がある。

壱岐市八幡での聞き取り調査では、ランプ屋（船舶用）が潜水用メガネを製作していたことがわかった。また、潜水用メガネを作るには顔の型を作らなければならないので完成まで時間を要する。そのためメガネを大切に保管するメガネ箱を大工に作ってもらうこともあった。さらに、海中から船上に上がる際に自分よりも先に潜水用メガネを船に上げるアマもいたという。対馬市教育委員会所蔵の潜水用メガネには木製のフタツメガネがあり、これは奄美大島で使用されていたものと同種である。それについて詳細な資料情報は得られなかったが、アマの移住や出稼ぎにより伝播したものである可能性がある。神奈川県の潜水用メガネのなかで特徴的とされているヨーパチメガネは、館蔵・館外コレクションともに長崎県に同種のものは見られなかった。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎瀬川 渉 横須賀市自然・人文博物館 学芸員

○松田 陸彦 本館研究部 准教授

(19) 高松宮家伝来禁裏本『日本紀略』の書誌学的研究 2022年度 (研究代表者 三輪 仁美)

1. 目的

本研究は、高松宮家伝来禁裏本『日本紀略』(H-600-1668)の史料性格の考察を目的とする。現在、新訂増補国史大系により活字化されている『日本紀略』は、神代から後一条天皇に至るまでを編年体で記した史書である。本書の前半部分(神代～光孝天皇)は概ね六国史からの抄録であるが、現行の六国史に見えない記事を収録している。後半部分(宇多天皇～後一条天皇)は「宇多天皇御記」や「外記日記」等の記録類により編述され、古代史研究において基礎史料として活用されている。しかし、記録類や諸写本に見える書名は一定ではなく、本書の編纂過程、成立年代、編者については不明な点が多い。また、現在通行の本文である新訂増補国史大系は底本の文字が必ずしも採用されず、校訂者により文意の通りやすい字句への訂正がなされているなどの問題がある。近年の研究では、新訂増補国史大系において前半部分の底本、後半部分の対校本とされている宮内庁書陵部所蔵久邇宮家旧蔵本は、ほぼ完本ではあるものの、必ずしも善本とはいえないことが指摘されている。全巻を完備した『日本紀略』の古写本は現時点で発見されておらず、近世写本によりテキストを提示せざるを得ないが、近世写本の系統や性格については十分に検討がなされているとはいえない状況にある。

高松宮家伝来禁裏本『日本紀略』は、後西天皇の蔵書であったことが確認される良質な写本であり、東山御文庫勅封御物との関係や、写本系統への位置付けを検討する必要がある。そこで本研究では、高松宮家伝来禁裏本『日本紀略』の書誌的特徴を検討する。

2. 今年度の研究計画

高松宮家伝来禁裏本『日本紀略』を研究の中核に据え、以下の2点について調査・検討する。

①高松宮家伝来禁裏本『日本紀略』の原本調査、現行の本文との異同の確認

本館で本史料を熟覧し、画像では見過ごす可能性が高い擦り消しや重ね書き、朱書き、書誌情報(法量、丁数、頭書の有無など)を確認する。新訂増補国史大系との本文の異同については、「館蔵高松宮家伝来禁裏本データベース」で公開されている画像も用いて、一字一句を比較する。

②『日本紀略』諸写本の原本調査、紙焼写真の蒐集

高松宮家伝来禁裏本が『日本紀略』の写本系統の全体像の中にどのように位置付けられるのかを検討するため、現存する『日本紀略』の写本の原本調査を行う。記録類や諸写本に見られる書名は一定ではないが、全国の研究機関や図書館等の目録を手がかりに写本の所蔵状況を把握する。

3. 今年度の研究経過

上記の研究計画に基づき、概ね順調に研究を遂行した。ただし、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、多くの所蔵機関や図書館の利用が制限されたため、計画していた原本調査の一部についてはやむを得ず断念せざるを得ない事態となった。幸いにも、本館の熟覧調査は可能であったため、高松宮家伝来禁裏本『日本紀略』や平田篤胤関係資料『日本紀略』(H-1615-9-4-96)の原本調査に注力した。併せて、宮内庁書陵部図書寮文庫・東京大学史料編纂所・東京大学総合図書館・国立公文書館・国立国会図書館において原本調査を実施した。宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵中院通村書写本については紙焼写真を入手し、「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」や「国立公文書館デジタルアーカイブ」等も活用して、諸写本と高松宮家伝来禁裏本との比較検討を行った。高松宮家伝来禁裏本と密接な関係を持つと推測される東山御文庫勅封御物については、東京大学史料編纂所図書室でデジタル画像を閲覧した。

また、学会にて研究の中間報告ないし成果報告を計画していたが、適切なタイミングでオンライン開催の学会に参加する機会が得られなかった。

4. 今年度の研究成果

本研究により得られた成果の概要は、次のとおりである。

まず、高松宮家伝来禁裏本『日本紀略』（以下、「本史料」と呼称する）が高松宮邸内の書庫に収納されるに至るまでの経緯を検討した。1923年、有栖川宮威仁親王妃慰子の薨去後、高松宮宣仁親王は皇子御殿から麴町区三年町（現千代田区永田町）の有栖川宮邸に移る。次いで1927年、芝区高輪西台（現港区高輪一丁目）の高輪仮御殿（現高輪皇族邸）に移居する。1931年に本館が竣工しており、それ以降に高松宮邸内の「書庫」に有栖川宮家より継承した書籍等が収納されたとみられる。本史料が禁裏もしくは仙洞御所から有栖川宮家への移譲が行われた時期は、①1732年の霊元法皇崩御以後、形見分けとして有栖川宮家第5代当主職仁親王（霊元天皇皇子）にもたらされた可能性、②霊元法皇存世中に職仁親王へ譲渡された可能性、③1685年の後西上皇崩御後、形見分けとして有栖川宮家第3代当主幸仁親王（後西天皇皇子）にもたらされた可能性、などが推測されている。このうち③については、後西上皇が文庫を整理した際に作成され、後西上皇より蔵書の移譲を受けた霊元天皇が再整理を行った際にも使用された『御本御目録』（東山御文庫勅封御物）に「扶桑略記 十一冊」と見え、霊元天皇の筆跡による不足目録とも称すべき一紙に書き上げられた書目には含まれていないことから、本史料は後西上皇が霊元天皇へ進上した書籍の一つであったと考える。また、霊元法皇から職仁親王に贈与された書籍の目録と推測される高松宮家伝来禁裏本『記録目録』（H-600-991）には、該当する書名を見出すことはできない。『記録目録』の作成契機は②霊元天皇存世中の賜与であった可能性が指摘されており、そうであるとすれば、目録に掲記されていない本書は、①霊元天皇崩御後の形見分けの中に含まれていたと考えられる。

次に、本史料の原本調査を実施し、書写年代と写本系統に関して検討した。本史料の書写年代に関して、これまでは2冊目（朱雀天皇紀）に「元和第七菊廿五夜書写之去三四日建筆加朱点之次一校了／水原黄門郎」（／は改行を示す）との奥書があることから、中院通村により1621年に書写されたと推測されてきた。しかし、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の一本に中院通村の書写と目される写本があり、本史料と同一の奥書が見える。宮内庁書陵部により頒布を受けた紙焼写真を用いて中院本と本史料を比較したところ、字配りや誤字・脱字等の入り方がほぼ一致することを確認した。また、中院本の3冊目（村上天皇紀下）は錯簡を持つ（錯簡部分を切断し、正しいと推測される箇所）に挟み込むが、本書では正しく配列されていることも顧慮すると、本史料は通村自身により書写されたものというよりは、中院本を整理して書き直した写本（あるいは、それをさらに転写した写本）ということになる。写本系統については、本史料の1冊目（醍醐天皇紀）に「本云／弘長二年三月九日書写校了」という本奥書があり、1262年に書写された写本を祖本とすることが窺われる。この本奥書は中院本や、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵葉室家旧蔵本、同藤波家旧蔵本、東京大学総合図書館所蔵南葵文庫旧蔵本など、醍醐天皇紀から後一条天皇紀を有する写本の多くに見られ、本書と共通する祖本の存在が窺われる。葉室本の13冊目末尾に「本云／右自醍醐至後一条院之記於相州鎌倉／求出之経年月今日終書写功畢／弘長三（癸亥）十二月三日 信盛」とあること、本書7冊目（一条天皇紀上）の冒頭と末尾に「金澤文庫」の印影が模写されていることから、かつて弘長2年奥書本は金澤文庫に存在した写本を書写したものであり、金澤文庫本が本書をはじめとする諸写本の共通の祖本であると考えられる。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、『日本紀略』の原本調査は全体に及ばず、写本系統の全体像を把握し解明することができなかった。また、葉室本の1冊目に、「此記旧本ツタヘテ相州鎌倉ニアリシヲ水戸黄門伝聞テ新写セシム于時題号不詳ルヲ弘文院一覽ノ時日本記略ト名ツク後人亦シタカツテ九代実録ト号云々」と、『日本紀略』という書名が江戸時代に命名されたという説を十分に検証するには至らず、現行『日本紀略』の成立に関して課題を残した。今後も調査・研究を継続し、可及的速やかに成果と課題を学術論文として公表したい。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎三輪 仁美（元宮内庁書陵部研究員）

○小倉 慈司（本館研究部・教授）

分析機器・設備利用型

(20) 鉛同位体比分析による中世～近世のガラスの生産と流通に関する研究 2022年度 (研究代表者 村串 まどか)

1. 目的

中世から近世のガラスには、カリ鉛ガラス ($K_2O-PbO-SiO_2$) やカリ石灰ガラス ($K_2O-CaO-SiO_2$) が知られる。これらの鉛同位体比分析の研究例として、福岡県の博多遺跡群や北海道の擦文末期からアイヌ文化初期の遺跡からの出土資料を対象とした事例が報告されている。前者では、博多遺跡群のカリ鉛ガラスは、朝鮮半島産・国内鉱山

産から国内鉱山産へ原料利用が変わった可能性が、後者では、カリ鉛ガラスは国内鉱山産、カリ石灰ガラスは日本列島外産の可能性が指摘されている。このように鉛同位体比分析によって得られた成果は、日本国内のガラスの生産や流通を理解するための重要な情報といえる。

中世から近世のガラスを対象とした研究は、化学組成分析を中心に研究例が増えつつあるが、カリ鉛ガラスかカリ石灰ガラスかを判別し、大まかな流通の議論にとどまっている。例えばカリ鉛ガラスの場合、日本国内だけでなく中国でも生産されていたものであり、化学組成分析によってカリ鉛ガラスであることがわかって、それが中国産なのか日本国内産なのかはわからない。一方、鉛同位体比分析で得られる原料採取地域の情報は、より具体的な生産地域の推定に有効なものである。本研究では、主に中世から近世のガラスを対象とし、鉛同位体比分析から当時の日本のガラス生産や流通の一端を明らかにすることを目的とする。特に近世のガラスを対象とした鉛同位体比分析の事例は多くないことから、重要な成果が得られることが期待される。

2. 今年度の研究計画

本研究の対象資料として、以下の2つを想定した。

①北海道松前町の表採ガラス（時期詳細は不明、近世と想定）

北海道・松前町にはかつて松前藩が置かれ、北方に向けた近世日本の対外交渉地として位置づけられていた。松前城下から15点のガラス玉が出土しているほか、武家屋敷跡などから計200点近くのガラス玉・棒・破片が表採されている。申請時点で3割程度の資料に対して化学組成分析を実施済みであり、いずれも少量の鉛を含むカリ石灰ガラスであった。先述の先行研究から中世のカリ石灰ガラスは日本列島外産の可能性が指摘されているが、より新しい時代を対象とした研究はあまりなく、生産地域を含めて当該資料の来歴について不明な点が多い。当時、ガラスはロシア極東やサハリン島などでも広く流通していたことがわかっているため、鉛同位体比分析により原料産地を調べることによって、北方と対外交渉を行っていた松前におけるガラスの利用について明らかにすることを目指した。

②ガラス玉を組んで製作された天蓋の残欠（中世から近世において製作されたと想定）

京都府・大徳寺には、ガラス小玉をつなぎ合わせて作られた天蓋が保管されている。研究代表者はこの天蓋に使われたガラス小玉の調査に参加しており、鉛同位体比分析の資料として検討した。一部の資料について化学組成分析は実施済みであり、カリ鉛ガラスとカリ石灰ガラスの両タイプがあることが判明している。ガラス玉の生産から日本国内で行われたのか、あるいは玉は中国など国外で生産され、どこか別の場所で組まれて製作されたのか、という問題が提起されている。

①と②ともにガラスの組成情報は得られているため、それをもとに齋藤教授と相談の上、資料の選定を進める。場合によっては資料を保管する現地へ赴き、サンプリングを実施する。サンプリング後の同位体比測定についても齋藤教授の指示のもと、国立歴史民俗博物館にて実施する予定である。なお、サンプリングや測定については新型コロナウイルスの感染状況などを踏まえながら、感染対策を意識しつつ進める。

3. 今年度の研究経過

①北海道松前町の表採ガラス

鉛同位体比分析の前に、鉛を含めどのような元素がどの程度含まれるかを調べるため、化学組成分析（蛍光X線分析）を実施した。用いた分析装置は可搬型蛍光X線分析装置OURSTEX100FAである。分析の結果、すべてカリ石灰ガラスであることがわかった。カリ石灰ガラスは、既に先述の先行研究での鉛同位体比分析の結果、国外産原料の可能性が指摘されている。そこで、もし本研究で対象とする資料も国外産原料であれば、ガラスそのものはいったん国外で作られ、松前では二次的な加工が行われていた可能性など様々な議論ができる。化学組成分析の結果をもとに、200点近くの資料から、12点の鉛同位体比分析資料を選出した。本年度はガラス資料の化学組成分析と資料選定に時間を要し、鉛同位体比分析用の装置に不具合が生じ修理に時間がかかることがわかったため、本稿執筆現在において鉛同位体比分析は未実施になってしまった。今後、分析や結果の解釈を進めていきたい。

②ガラス玉を組んで製作された天蓋の残欠

①と同装置を用いて実施した化学組成分析の結果、天蓋を構成するガラス小玉はカリ鉛ガラスやカリ石灰ガラスなどであることがわかった。特に中国だけでなく日本でも生産されていたカリ鉛ガラスは、化学組成のみから生産地域を識別することはできないが、例えば天蓋を構成するカリ鉛ガラス製のガラス小玉の生産地が全て国外であった場合、そのガラス小玉を組み合わせて天蓋自体を製作する工程も日本国内ではなく国外で行われた可能性が想定される。原料産地とガラス小玉の生産地域が必ずしも合致するわけではないが、鉛原料の採

取地が国内であるか国外であるかは、資料の来歴を明らかにするための重要な要素である。それには鉛同位体比分析が有効であると考えられ、本研究での実施を目指した。しかし、残念ながら令和4年度内で鉛同位体比分析の許諾は得ることができず、本研究課題での実施は断念した。

4. 今年度の研究成果

①の地域にはかつて松前藩が置かれており、松前城下に限らず松前町内のほかの場所でも多くのガラスが表採されていることから、ガラスの生産が行われていた可能性が示唆されている。近世の日本の北方交渉の要衝であるという歴史的な側面も踏まえ、松前におけるガラスの利用を明らかにすることを目指した。鉛同位体比分析に先立ち化学組成分析を実施し、合計約200点の資料から12点を鉛同位体比分析の対象資料として選出するところまで完了した。化学組成分析や資料の記録、鉛同位体比分析の対象資料の選出などの分析の準備が整いきれず、また鉛同位体比分析用の装置に不具合が生じてしまい修理に時間がかかることがわかったため、本年度は資料の選出までにとどまった。今後は鉛同位体比分析を経て、松前におけるガラスの生産や流通に関する考察を進めていきたい。②については本研究課題実施期間中に許諾が得られなかったため断念した。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎村串まどか 東京電機大学工学部・応用化学科・研究員

○齋藤 努 本館研究部・教授